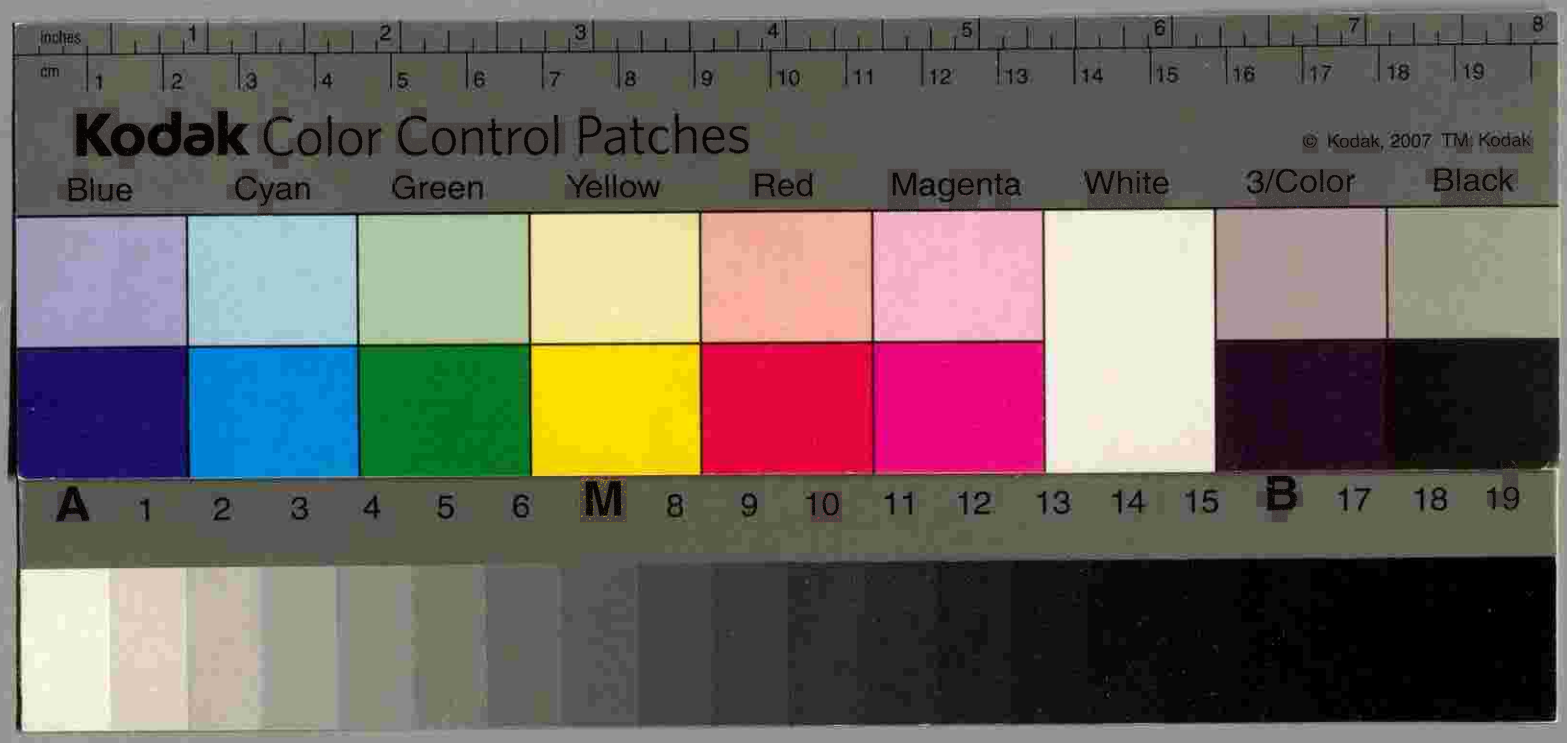

Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

扶桑蠶史著
蠶絲業道中記
有隣堂發兌

蠶絲業道中記

有恭堂
版權所
永久保存

叙

大食津姫の眉化して、蠶の繭となれりけり、とは是れ似た山々の諸、化して鰻となりけると、日を同じうせる論とや云ひなん、されど此事古事記に見もれば、以てあが國蠶業の、ふるきを茲に證しつべし、斯く古くより傳はりて、あやはとり吳織、はたおりの音世々絶えぞ、いよ〳〵盛になり行きて、雜新の今日に至りては、外國輸出の第一

と、なりつる程のステープル(Staple)、捨てゝ置くべき者ならずと、殖産に心ある者は、喋々勸め說くが中にも扶桑の蠶史は、いと熱心なる人にして、身はあが國を西に走り、東に走りつ蠶業の要を說きて勞を思はぜ、改良を說き飽くを知らぜ、一年三百六十日、外に在るは家に在る、日よりも澤と傳へ聞きぬ、然るに猶も飽かぜやありなん、其忙しき暇もて、此道中記の著作あり其意

蓋しみくにの廣き、戸々に說き人々に教へ諭すの暇なみ、廣く此書を行ひて、もて蠶業の要を知らしめ、道の枝折となすに在るか、嗚呼勉めたりや蠶史、もゝひ、未だ一面なるも、令弟より其平生を聞き、今又茲に此書を見て其熱心と勉强とを知る、之を彼の世の流行に投じて、物したるえせ小說の、徒に書肆の飾りとなり、新聞廣告欄内を、ふさぐる而已の物に比するに、其差恰も蠶と蛤、見

ん人形の似たるを以て、之を混ずること無くば、之を具眼の人と謂はまし、之を眞の讀者と謂はまし。

明治二十年見奈月

をんどうひでさぶらう

しるす

蠶絲業道中記目次

第一回　汽車中地方紳士と蠶業の大勢を談ず

第二回　瓜込屋貝太郎と語りて横濱開港以來の沿革を知る

第三回　船中紳士に邂逅して我國蠶桑の得失を談ず

第四回　蠶史佳人が言を借りて我國の蠶業上保護奬勵の必要を論ず

第五回　佳人に邂逅して蠶史感慨に沈む

第六回　佳人に製絲家の心得べき大意を說く

第七回　製絲用の水質を論じて漉水法に及ぶ
附新發明漉水器の事
第八回　水質試驗の方法を譚りて蠶の絲質に及ぶ
第九回　製絲機械の造構を論じて建設地の事に及ぶ
第十回　殺蛹法の得失を論じて貯繭の事に及ぶ
第十一回　撰繭法の必要を論じて纖維試驗の方法に及ぶ
第十二回　蠶絲業の未來

蠶絲業道中記目次終

蠶絲業道中記

扶桑蠶史　著

第一回　汽車中地方紳士と蠶業の大勢を談ず

早起蓐食行李既に整ひ腕車又來る匆々駒込の僑居を出で車を驅て新橋の停車場に至る俟つこと少時にして汽車早已に横濱より達ず汽笛ピーヒーの一聲と共に足音囂々焉たり是則乘客の停車場に入り來るなり此間汽船問屋西村の手代切符荷物等の斡旋を爲すこと甚だ務む諸事皆整ふ少焉にして乘レーの鳴鐘を傳ふ衆客競ふて其切符の等位に從ひ夫々乘車し了る乘客床に踞するや

否復汽笛の鳴るあり其聲ピーヒー車輪鐵軌と輾るの響ゴオー

室内乘客座定まる喫烟するものあり暗想するものあり新聞紙を讀むものあり談話するものあり話次何やら蠶史と臭味を同ふするものあるが如く覺ゆれども例のゴオーの響にて其聲を聞くも其語を解する能さりき時は覺ふ行車の進み稍鈍りたるを車窓頭を回らせゝ早已に品川停車場に達せりゴオーの響直ちに止むと同時に車掌戸を開きつゝ呼ぶ品川々々乘客茲に下りるものあらざりしが匆々一客の入り來るあり其扮裝を見るに黑絨

の帽の山高からさる形稍々小振なるを少し斜に戴き藍鼠の最と細やかなる萬筋の紬縞の綿入二枚を裾短かに着なし絹の濃花の股引に白足袋を穿ち鼠色革の細き緒の着きたる疊着きの駒下駄を蹈み襟に獺の毛を飾り付けたる流行の回し合羽を被たるか蠶史の隣床稍々寛なるを洞視して少々の禮辭と共に腰打掛けたり新橋より乘合へる一客にして蠶史の斜面に踞床せし地方紳士とも覺しく新らしき黑絨の帽子を少し阿彌陀に戴き紬縞の美麗やかなる上衣に黃八丈の下衣綿毛交りの白き莫大小の股引赤き毛織の靴下に半靴を穿ち胸にゝ明光々

たる金鎖を四邊眩ゆきまでに露出し銀の燻し銕具の付きたる茶色革の提籃を膝の上ゟ安置し桃色の新聞紙を讀みつゝありしが夫の蠶史の隣床に腰打ち掛けたる商人体の客を見るより帽ゟ手を掛けしが復た手を下して熟く〳〵思慮する体屢々斜眼ゟ商人体の客を見て居りしが良々ありて獨り合點きたる體ゟて更ゟ咳一咳して帽ゟ手を掛けつゝ貴君ハ横濱の……と言ハせも果てぬゟ商人体イヤ是ハ宮城縣の……今お歸りですか地方紳士体ハイ一昨々日の汽車ゟて前橋より東京に戻りましたが昨日ハ京橋具足町の製糸機械師川口屋の方ゟ生糸の試驗機械

と注文してそれから駒込の蠶史先生此先生ハ恐らく様と殿との間あるべし と訪ひしが生憎留守でした商人体蠶史先生の名ハ曾て承り居りましたかあの先生ハ元來何處の人ですか地方紳士体あれハ群馬縣の人ですさうなが五六年前から東京に出懸けられたさうです先年尋ねた時も留守でしたが復た今度も留守でありました聞く所ゟよれば明日から中國筋へ旅行するので何やら忙しき驪梅なるを以て今回も空しく歸りました商人体貴君ハ元來お知己ですか地方紳士体イヤ文書ゟてハ一二回往復も致しましたが未だ一面識もなき人です商人体聞く所ゟ據れはあの先生は

蠶業の熱心家にて各地方に巡回して蠶絲の業を勸告し專ら改良の事を務めらるゝとのことですがまた今度の旅行もそれでせう（地方紳士体）ハイ御譚の如くあの先生は去る十五年に私の地方に參られましたが其時も頻りに養蠶製糸の改良を喃々せられたるとのことです其際私ゝ是等の事にも關係なしでしたから面會しませなんだが私の地方もあの時から頻りに驚ぎ立ちまして今日の有様まで生糸も改良しました尤も其筋の御世話ゝ中々容易な事でゝ有りませなんだ何に致せあの様な先生が巡りて勸告せらるゝゝ餘程當業者の藥になります

と云ふとたんに汽車進行と始む例の通りゴオー

蠶史獨り腹笑しつゝ思へらく知らぬと云ふ程怖しきものゝなし僕のこゝに居るのを知らぎに噂をして居るなる何にしろ妙な場合だと思ひながら烟草を吸ゝんとして洋氈包と膝の上から股の下に卸せしとき洋氈の一隅に S. Fusou. の記號ありしを商人体一瞥して何やら顧みて疾しきの体なりしが頓て懷中を探り名刺を取り出し其裏に鉛筆にて何やら認め紳士に示せるものゝ如し紳士体も亦何やらきまり悪るき様にて稍々談話も絶えたりしが暫くして袂より卷烟草を取り出しつゝ帽に手を掛け

失敬ながら火を拜借と言ひながら蠶史の前ゟ立ち出で洋氈包を熟ら〳〵視て卒爾ながら貴君ハ蠶史君ゟハおもさぎやと問ひ掛けられたり蠶史も今更笑ふ事もならねは前の談話をは聞かぬ振にてハイ拙者ハ蠶史で御座ります貴君ハと言ふ間もなく地方紳士体名刺を出しつゝ

地方紳士体 私ハ昨日先生をお尋致しましたが御不在ゟて御目ゟ掛りませんだ承われは中國筋へ御出張の趣今日御出立で御座りますか蠶史ハイ只今から出掛けますといふ時隣床ゟありし商人体又名刺を出して

商人体 兼てお名前ハ承り居りましたが初めてお目ゟ掛りますと云

ふ

蠶史 イヤこれハ初めてと禮を了り名刺を見れハかの紳士体なるハ絲野創商人体のものハ瓜込屋早利と云へる孰れも蠶史ゟ縁故ある人々なりき蠶史絲野君ゟハ昨日のみならぎ一昨年もお尋ねゟ預り何時も〳〵不在ゟてお氣の毒ゟ存じます、して今度ハ何等の御用で御上京ですか

絲野 ハイ餘り山の中ゟのみ潜み居り大都の事情も疎く成りまするからチト開化の空氣を呼吸したくもあり又一昨年中の御懇諭もありしより一の製絲場を創設せんとの目論見もあり旁〳〵出掛ましたそれゟ就てハ横濱市場の狀況をも知悉せざるを得ぎと覺悟し去月來横濱

に滞在して生糸賣込問屋の業務より商館にて生糸檢査の有様等を是なる瓜込屋君のお店に就き詳細承り尚ほ實地とも目擊し稍々事情と知り得たれば過日來群馬長野両縣に遊び第一富岡製糸所を始め各所の繰糸機械を巡覽し此處に二日彼處に三日滞在して機械所設置の方法より之が管理の蘊奥に至るまて管理者其人に就き數年經驗の説話を聽き或は質問討議し稍々其一斑を窺ひ得たれは歸縣の上に一の製糸機械場を建設し專ら地方生糸の改良を圖る精神ですか退て考ふるに各所其趣を異にするのみならず管理者其人の意見も區々にして迷

津の感なき能はす又養蠶法の如きも人々其所説と異にし私の如き未熟の輩は將來方針の向け所に苦しみますチョット申せは養蠶に清涼溫暖の二派あり製糸に直繰（大甕に直ちに繰り揚ぐるを云ふ）小甕繰り（一たび小甕に繰りて更に大甕に揚げ返すの方法なり）の二説あり將又機械と座繰りとの得失を論ずるものあるが如きの諸點ですか先生の御意見は如何で御座りますか蠶史ハイ説の異なるに猶其人の顔つきの異なるが如くで免るべからざるの數でありますが何樣人に其已れが好惡する所に於て癖するが性でありますから縱令其目的に一つでも其手段方法に至りては兎角一樣に出で

さるか通例であります夫の養蠶は清涼溫暖の二派あるも其目的とする所は必ず一ッであるに相違なし誰れも良き繭と澤山は收り得て利益の多きを望まざるはなき答なれども人は第二の天性が染み着くものにて此染の深きは從ひ益〻凝結して容易に撰擇の出來ざるものなるか故は上州にても固陋の養蠶家は先入が主となり居るを以て是非とも清涼飼はあらざれば良繭を得難しと信ぜ頑然として舊慣を株守するものあり又他の幼稚の養蠶家を見るに上州に遊びたるものは清涼育を以て主義とし奥州に遊びたるものは溫暖育を以て主義とし其

說の相分かるゝ宛も氷炭相容れざるの有樣なり加之風土氣候の溫暖なる竹材は富みたる地方にても奥州の藁座は固結し夫の廉にして輕便なる信州地方の竹籃を用ふるを嫌ひ或は家屋の狹溢なるにも拘らず上州流義の竹の大籃を用ひ一家人數の寡少なるに奥州流義の轉がし取りを利とし上州流義の綱を用ひて除沙するを厭ふが如きは皆是第二の天性ちう奴が腦裡に染み込みたるの弊であります元來此清涼と云ひ溫暖と云ふが如きは恰も消極と積極との如く間違ひきつたる說で御座る必竟此輩は養蠶の眞理を忘失したるものと謂ふて宜し

いのです何せと言へば一ッハ以て非常ハ清涼ならしむるを主とし一ッハ以て溫暖ならしむるを主となすものなればなり蓋し君も知らるゝ如く蠶と養ふハハ適度あり涼に過ぎず暖ハ失せず所謂養蠶者が袷衣一枚と云ふの氣節即ち華氏驗溫器七十度より六十七度位までを育蠶ハ最も適せるの度となす彼の支那人も曾て言へることあり曰く蠶と養ふものハ衣と薄ふせよと是此適度を過たざらしめんが爲めなり蠶史の祖母ハ鄉黨のものハ蠶の神なりとまで崇められたりしか此祖母も亦人ハ諭すハ蠶する身ハ少し薄着せねばならぬよと常ハ言ひける

が今日ハ至り往事を追懷すれば則みな同一轍ハしてこれ蠶を養ふの適度を誤らしめざらんが爲めなりところ知られたれ又奥州流の養法ハ其源を繹ぬれば該地ハ寒冷なるが爲め自ら此度を過らざらしめぬが爲めハ火爐を設けて之を養ふことゝハなれるものゝ如し而して近年次第ハ育法の上進し來るハ隨ひ巧者ハ巧者が加ハり往年七十度ハ三十七八日間にて老熟せしめたるものを近年ハ漸次に進んで七十五六度即ち三十一二日位ハて結繭せしむるハ至りたるものなり因りて今日より此二法の來因を考ふるに一ッハ以て舊法を保守し一ッハ以

て新法に改進せるものにして斯く幾等の差異あるものとこそなれるなれ今之が改進の功を擧ぐれゝ第一溫暖育ゝ未だ霖雨せざるゝ能く蠶兒を簇ゝ登らしめ霖雨に際して已むなく濕桑を與へ蠶病を起すの患少なく又蟹虹の寄生を免かるゝの功あり況んや農間秧田の期に先ち之か結繭を終るか如きは尤も考案の妙と謂ふものゝして所謂五旬の勞苦を三旬ゝ切り上げ殘りの二旬ゝ之を他に用ふるものなれば開明日新の世界には斯くこそ有り度ものにこそ去り乍ら又こゝに意を留めざるへからざる事ありそゝ他にあらず是此溫暖育てふもの

ゝ固より人爲の溫度なるが故に到底火力ゝ依賴せざるを得ず又手その火力を用ふるときゝ夫の炭酸氣なるものが蠶室内に滿つるは當然です而して此炭酸氣なるものは所謂殺氣ですから此氣が多ければ蠶兒を害すること猶吾人の生活と一般なる次第なればなんでも空氣の新陳代謝を善くするか肝腎で御座るこゝに意を留ざるときゝソラ彼の血液の酸化があるくなつて來て乍ち病蠶が出來るのであります

又お尋ねの製糸機械の一件ですがあれは一概に利害得失を定むる譯ゝ參らぬものです今ちよつと之を車に

譬へて見ますると座繰ハ腕車にして小簍繰り機械ハ馬車なり直繰り機械ハ氣車でありますそこで此三車の中でハどれが一番便利で有らうと言へば三才の童子と雖も必ず氣車が一番だと謂ふに相違ない其次ハと問ふたなら今度ハ馬車だと言ふでありましよう左樣すると腕車が第三の位になりますす去りながら今日日本の有樣にてハ此第一位ニ居る尤も便利なる氣車即ち直繰り機械を一般ニ行ふことが太だ六ツケ敷いのでありますす何故ならば此直繰法ハ工女が正直で管理法が能く届て纖度の平かなること夫の鐵軌の平坦なるニ氣車を行るが如

き都合ニ行けば勞銀ハ省けるし絲線ハ勞れず伸度も隨て多き理屈ですから此法の一般ニ行ハれぬのハ甚だ殘念でありますす然りながら最早内地雜居も近づきましたから彼の赤鬚緑眼の先生達が低利の資本を澤山ニ齎らし來りて製糸の工場を各地ニ起し出しましたら工女も一時ハ拂底ニなりまするハ當然ですから需要と供給が平均と失ひ自然工女の勞銀も昂るニ相違ありません左樣なりますると馬車なる小簍繰りハ直繰と變ずるでありましやうから今より創立する製糸機械ハ宜しく前途と慮り着手するが必要です夫の座繰と機械との得失の

如きハ前の比較よりてお解りでしやうが幼稚の國柄で見ると馬車ハ愚か腕車も通行のならぬ地方が多いのですから道路開鑿の全く行届くまでハ腕車即ち座繰の奬勵も肝腎です然るよ此腕車の通行も不充分なる凸凹崎嶇たる狹路よ直よ馬車を驅らんとし一左大澤よ墜ち其身と亡ぼすのみならず祖先傳來の財寶をも亡失したる例ハ工業未熟國の輕躁郡急進村と申す所よ多しと承ハる去ハ然りながら腕車通行の道路普請が行き届きたる以上ハ其第二着手ハ馬車道即ち蒸汽製糸機械と造るが順序で御座らう然れども此間の緩急が餘程工合もものです

社會の事物ハ率ね需要供給の釣合よりて增減と生ぜる譯柄ですから道路開鑿のみを俟つ譯にも參らざるべし道路稍々開けしならば道路の需要者即ち馬車を曳き込み之が供給即ち開鑿なる養蠶の改良增殖を促すの必要なる場合もありますから理屈計りでハ推せないのですと云ふとたんよ汽車の進行が徐々よなると同時よ汽笛一聲ピーヒユー蠶史モウ横濱ですか絲野イヤこれハ餘り早いと云ひつゝ不興顔車掌戸を開きつゝ呼ぶ横濱々々瓜込屋蠶史先生のお譚よ實が入りし故この汽車ハ大さう早いやうよ思れました蠶史イヤ斯くまで念を入れた積りで

もありませなんだが品川から横濱まで一足飛のやうに思われました絲野イヤ私も大森や川崎の停車場ゝ氣が付きませんでしたと車と下りながら話す蠶史絲野君ゝ何時御歸郷ですか絲野ハイ今日午後の船から歸る覺悟です誠によい所でお目ゝ掛りました尙ほ此末も宜しくと云ふ蠶史是ゝ失禮致しました折角自重せられて御盡力と企望致します孰れ又其内と云ひつゝ袂を左右ゝ分たんとするとき瓜込屋後より聲を掛け蠶史先生失禮致しましたさやうなら御機嫌能うと五六間離れたる後に知己らしき人と對立しつゝ云ふ蠶史イヤ失禮と云ひつゝ腕車を

偃ひ横濱辨天通の西村ゝ向うて走らしむ車輪塵を飛ばし其聲ガラ〳〵〳〵

第二回　瓜込屋貝太郎と語りて横濱開港以來の沿革と知る

辨天通二丁目の汽船問屋西村ゝ至ればイラッシャイの禮辭と共ゝ男女出で迎へて蠶史の荷物を携へ樓上の一間ゝ案内し且座蒲團を敷き火鉢を持來り順次茶菓子等と進め待遇太だ勤む蠶史山城丸乘込ゝ午後の幾時にて宜しきか手代へイ三時頃からて宜しう御座ります蠶史一昨日東京佐久間町の支店へ申遣し置きたる船の切符ゝ調へ

くれたか手代へイ〳〵慥に取り置きましたと云ふとたんに下婢名刺を持ち來り此お方がお目に掛りたいと申して只今お出で御座りますと名刺を出す蠶史手に取り見れば瓜込屋貝太郎と眞中に五號活字にて印し其左傍に *Urikomiya.* と記せり蠶史ハテナ先刻汽車で逢ひし人と同姓だか名が違ふやうだマア何にしろ此處へと云ふておくれ手代何も外に御用の御座りませぬか蠶史アー先づ宜ろしい瓜込屋下婢の案内に隨ひ入り來りて御免の挨拶と共に座に着き瓜込屋貴君にも一両度お目に掛りましたが染々御挨拶致しませなんだ承れば中國筋へ御出張

のおもむきにて當家に御休息と承りし故チヨツトお尋申ました蠶史ハイ其後も久しうお目に掛りませなんだ何時も御壯健でと禮を了り且言ふ今日品川から汽車で瓜込屋早利と云ふ人と同行しましたがアレハと云へせる果てさ瓜込屋へイアノ者も私の手代で御座ります實も彼の譚で此處にお出と云ふことを知りましたので御座ります蠶史ハヽア左樣ですか如何です此頃の市況も瓜込屋へイ當年も洋銀の爲替が非常に狂ふた爲めに地方の荷主も利益が多くありました樣子です何にしろ此一両日も稍々活潑の有樣にて手合も相應に御座りました蠶史ハヽ

ア貴君ハ當港生糸賣込屋の隊長で古くより生糸の貿易ヨ御從事ですか安政開港頃の有樣ハ何樣なものでしたかナト承り置き度と云ひつゝ蠶史手と拍ちて下婢を呼びビールと命ぜ瓜込屋私も近頃ハ老衰しまして記憶も薄くなりましたが何ヨ致せ安政開港頃のことと考へますれば能も開けたる事でありますイヤハヤ實にアノ時代ハ夢のやうでした御存知の如く抑も横濱貿易の創始ハ安政六年巳未の七月盆前と覺えました其頃横濱商人の巨擘は中井重兵衛と申す人でした此人は本町二丁目より三丁目ヨ亘り宏大なる家屋を構へ庭にハ泉水ありて内

ヨは美麗なる椅子を駢べたる等今日ヨありてハ毫も怪むヨ足らざるとながら其頃ハ實に吾人の目を驚しめたりそも〳〵本港にて日本生糸を外國人に賣り初めしハ上州前橋の道具屋又藏と云ふ人ヨして之を買ひ初めたるは佛朗西二十番館のロレルの手代支那人ハシヤウと云ふ人でしたその時前橋生糸の相庭ハ一両ヨ付き百五六十目で御座りました然るに盆過ぎ即ち七月二十日頃は信州佐久郡の生糸上州前橋勝山の生糸などハ両ヨ九十目となりたり此頃の取引ハ都て壹分銀を以てし前橋生糸ハ壹分ヨ付十一半百六十目ヨ付貳両貳分でありと

が追々昂りてその十一月頃ハ信州上田及び松代の提糸ハ壹分ヨ十二半より十三その十二月ヨて上等品ハ十五位にまで進みたりき其頃仙臺美濃長濱カジヤ糸等追々出港したれども信州飯田の島田造りが全國第一等の高價なりき此飯田糸ハ一両年を過ぎ漸く粗悪ヨ流れしより頓ヨ聲價を落し終ヨ買人なきヨ至れり先づ是が末年の大暑でありますと云ふ折柄下婢ビールの口を抜き持ち來る蠶史如何です貴君ハビールを呑りますか瓜辻屋へイ何卒お搏ひなさりますな蠶史先づ一つつぎましやう瓜辻屋へイこれハ〳〵それから萬延元申年の末より酉年の始

に掛け外國人ハ兎角細絲と好むと云ふよりして彼の両籠繰なるものが始り此機械が廣まるに隨ひ細糸も追々出掛け又買人も隨て殖えました夫までハ大概太糸のみヨて信州松代の提糸などハ繊度三十前後位のものと考へられました其頃細き糸を買ひしハ佛人ロレルと云ふものでした又此ロレルと肩を並べて細糸を買ひしハ英一番のバルベルと云ふ人でありました又安政七申年より夫の提糸を横濱ヨ持ち出したるハ上州の前橋信州の上田松代の三ヶ所のみなりし思ふヨ此年の輸出ハ壹萬三四千俵九貫目俵ありもありしならん其頃より悪しき糸と出

したるハ武州八王子でありました此時代のつくりハ銚炮造、越中造、上州島田造、杯でありましたが此頃の良き糸ハ島田造とあるがゆゑに良き生糸を見るときハ吾人ともに島田造のやうだと賞賛する有様でした又提糸は百斤につき卷紙の目方が二十七八斤位ありましたゆゑ九番館のメンと云ふ人が莫大なる提糸を買ひ英國へ輸送したるに卷紙の運賃に三萬四五千弗と費し爲に大なる損耗をなしたりと云ふ譚でありました去りながら今日より考ふれば我邦の生糸は糸の直段に賣らぎして紙の直段に賣りしもの丶如く感覺が起ります何んとなれば

今と距ると十八九年前英佛生糸市場の相庭を調ふると一封百二十匁五十志（一志は我二十五錢）乃至五十五志位に賣れる生糸を我横濱にハ二十二三志位にて賣却し良き價なりと思ひ居たる譯柄なれば少々紙の目方が重き位のことハ平氣の平左衛門でありました相違御座りません何んと馬鹿げた有様でハありませんなんだか蠶史瓜込屋君如何葡萄ハ如何ですドオゾ瓜込屋へイ蠶史成る程當時の有様ハソンナものでしたかハ・ア瓜込屋夫から洋銀なども甚はだしき昂低がありました抑も開港の初年即ち末の十月初旬にハ四十一二匁なりしが追々下落して十二月にハ

三十五匁より七匁程となれり又生糸と賣りて得たる代銀をは両替せんとするゝに人足の賃錢太だ高くして莫大の費用と費すの有様なりし故に此頃に洋銀を質に入るゝものもありしが質屋にては三十三匁より三十五匁位にて取りましたが何ゝ致せ斯る景況でありましたから生糸と賣りて利あるも洋銀の爲ゝ損耗と釀したる譯で御座ります其十一月より翌申年の正月頃までに低きは二十三匁より二十一匁の取引がありました斯ゝる氣運なるが故ゝ洋銀と取りし質屋に二匁或に三匁位の上摺りと取りて逃亡せしものもあり又買主に爲ゝ非常の損耗と招き進退谷るより之と八丁堀の幕府町奉行所へ愁訴と出掛けたるものも多かりしが奉行所にては更ゝ御配慮の模様ところか恬として顧みざるものゝ如くなるより人々其擧動と怪むに至れり是を以て各地方の生糸商に大ゝ損敗と來したるゝ唯り上州前橋の三好屋のみ連綿保續するゝ至れりそれより維新前五六年に格別のこともなかりしなり先づ開港初年より明治維新までの有様にこんなもので御座りました蠶史なる程瓜辺屋維新後の狀況に私が申あげませんでも御存知で却て近時の狀況に離れてお出の方が明るく所謂燈臺根暗しの譬へ

の如くで御座ります蠶史イヤ中々そんな譯はいアノ此港の歩合金一件ですが彼法ハ何時ごろから始まつたものです瓜込屋へイ彼の歩合金ハ開港の翌年即ち萬延元申年の秋でしたと覺へます當時の名主は苅部某と呼ぶ人がありましたが此人の發起でありました横濱も其頃ハ實に寥々たる景況にて此辨天通りにハ鹿島丸岡の二軒に佐藤某の長屋建の家がある位のことでありました其頃ハ英量の幾許なるかを知らざるもの多くして中ハハ英斤は三一一と云ふ目安と掛けて日本の量目と出したる人もありし譯柄ですから此一事を以ても當時貿易の

一斑を知るに足りるのですそんな場合ですから貿易商人と申すものも他より一時寄留の者多く朝來て晩歸ると云ふが如くにして町費賦課の法も立たず諸費支辨の道なきより名主の苅部が之を患ひ外國人へ物品賣込の金高は據り其幾分を出金せしめ之を以て町費に充て餘りあれば之を貯積し置き外商の爲は失敗破産する者を扶助せんと勘量し石川石井なぞ云へる人々と謀り幕府奉行所の許可を經て各商人へ說諭したるに各其說に同意し外國人へ物品賣込の商人のみは賣買高の千分の五即ち千圓に付五圓を出すことに一決し爾來町會所に

て之を管し該金を取立三井組へ預けて該金を以て町會所雑費町吏等の給料に支出せるが始まりであります蠶史ハアー成程ハー御免なさいとビールを酌ぐ瓜込屋イヤコレハ〳〵そこで慶應二寅年より至り尚また名主苅部の發意より外國人より物品を買取り營業を爲す者よりも賣込品同様千分の五を町費に出さしめんとを該商人へ協議するも皆其意に從へり此時も矢張奉行所の許可を經たる譯ですそれから明治五壬申年五月に至り輸出入物品の數も追々增殖せると以て從前の歩合五厘をば三厘と改減するとゝなりたり次で明治六年でした生糸蠶種

等の歩合金が一ヶ年貳萬貳千圓の請負となりました確か此年の暮には舶來物品買取り及び製茶賣込歩合も亦請負となり買取品歩合が一ヶ年金三萬圓製茶賣込歩合が一ヶ年金壹萬圓計りで御座りましたと覺えますそこで明治十年の春二月頃でありました此歩合請負金を廢して舊の如く賣買高千分の三となれり元來此歩合金の起りが町費支辨の目途でしたからして維新前ハ幕府の役人がこの取締をなし維新後ハ主任官吏之を管理し毎月出納勘定帳等を監査し之に檢印するが如き都合よなりました故明治五六年頃ハ恰も縣和と一般の性質であ

りました其後八九年頃より再び積立區貯なるものゝ性質は變お居るので御座ります蠶史ハ、ア成程シテその額ハ生糸と屑物を合せて凡そ幾許位は登りまするか瓜辺屋ヘイ先づ本年などの有樣でハ輸出生糸が凡そ五萬俵（九貫目捆）壹俵三百五十圓と假定するときハ此金高ハ壹千七百五拾万圓なり此口錢百分の一即ち金拾七万五千圓屑物が四万俵（九貫目捆）壹俵三拾圓として此金高百貳拾万圓なり此口錢百分の二分五厘即ち三万圓と見ますれば通計貳拾万五千圓となるのですそして此貳拾万五千圓の内十分の三が町會所は納むる歩合金ですから六萬千五百圓

であります蠶史先づ此金額が全く蠶業の爲は此港を潤すのであります蠶史中々莫大なものですナアハ、アー成程瓜辺屋尤も眞綿熨斗糸ハ百分の二生皮苧出売繭等ハ百分の三でありますが之を平均して百分の二分五厘と屑物の口錢と仮定したので御座りますと云ふとき手代旦那最早三時十五分前で御座ります御飯を差上げませうか蠶史最うソーナルカそんなら飯をもらひませう手代畏りましたと二階を下る瓜辺屋お構ひなくお支度をなさいませ蠶史イヤモー別段支度も御座りません飯さへ喰へば宜しいのです瓜辺屋お歸りハ何月頃です蠶史先づ六七十日間旅行

の積りです下婢膳を持ち來る蠶史瓜込屋君御免あさい
瓜込屋ドウゾお構ひなく蠶史オイ勘定をして切符を以て來
てくれ下婢ヘイ畏りましたと云ふとき丁度勘定書と切符
を携へて手代來り毎度有り難う御座りますと云ひつゝ
盆の上ゟ書出しと切符を乘せて出す蠶史アヽ出來たかナ
ヨツト待て居てくれ手代ヘイ蠶史飯を喫し終りそれでハ
これで勘定をと紙幣を渡す手代ヘイ〳〵只今おつりを蠶史
オイ〳〵これハ聊ながらお茶代にと紙に包みて出す手代
ヘイ〳〵と二階を下る蠶史瓜込屋君失禮致しました瓜込屋
イヤエモー手代と主人と一同ゟ二階に上り來り主人毎度

御麁末さま只今ハ御丁寧にお茶代とと禮を云ふ手代只今
のおつりを蠶史イヤ毎度お世話で手代是ハ御船中のお慰ゟ
と密柑の籃入とビールとを荷造りして出す蠶史イヤコレ
ハ〳〵誠ゟお氣の毒です主人お荷物と車ハ宜しいか手代ヘ
イ皆宜しう御座ります蠶史瓜込屋君寔に失禮致しました
何ぞかの地方に御用ハ有りませぬか瓜込屋何分宜しう折
角お厭ひなされませ蠶史左やうなら何れ歸りにお目ゟ掛
りませうと立て二階を下る主人、手代、下婢左樣なら御機
嫌さまよう瓜込屋御機嫌よう蠶史ハイ左樣ならと言葉を殘
し腕車波止場に向つて去る

第三回　船中紳士は邂逅して我國蠶桑の得失を談す

波止場に至り車より下り西村の手代の案内にて艀に乘込み行く〳〵海上を望めば天氣晴朗波穩はして蒼海蠱の如し航海者の歡ひ何事か之に若かんやと獨り愉快を覺ゆるとき手代旦那今度の航海ハ陸よりも穩で御坐ります蠶史左やうさ先づ此分でハノルマントンの氣づかひハあるまいよ手代へエーなんのそんな事が度々ありてたまるもんですかと云ふうち早や山城丸に達す船頭ホラ賴むよ〳〵手代船頭衆氣を付けておくれ船頭ハーデー丈夫です

蠶史オー宜しいか手代宜しう御坐います蠶史手代に續いて船階子は移り山城丸は入る蠶史部屋ハ何番か手代ナヨット お待下さい只今と階子を下りるや否直ぐ上り來り手代旦那さまこちらへ蠶史オイと後はつゞいて階子を下る手代此お部屋で御坐ります蠶史こゝハ何番だ手代ヘイ九番で御坐ります蠶史アーソーダこゝハ誰かと相部屋だナ手代お獨りさま御あい部屋で御坐ります蠶史フウン何樣な人かしらん手代こゝハ何誰で御坐りましたか承りませう蠶史イヤヨシ〳〵手代ヘイお手荷物ハ此下の所は皆置きましたオイ〳〵ボーイさん〳〵旦那御用が御坐りましたら此もの

まおつしやつて下さいましボーイさん宜しうお賴み申ますボーイヘイ蠶史ボーイ宜しく賴むよボーイハイ蠶史アー此相部屋の人ハ何樣な人だボーイハイ洋服をめした髭のある立派な方です何んでも高等の官員さまのやうです蠶史フウン左やうかボーイ別まして御用ハ蠶史先づ宜しいと云ふとき相部屋の先生來るその扮裝を見てあれば茶色絨の帽子を戴き黑絨の上衣に鼠色に竪縞の袴をはき胸まハ最と太やかなる輪繫ぎの金鎖を光らし黑目掛りし鼠色の厚絨の長き外套まハ襟と左右の袖先きまハ獵虎のつきたるを胖に着なし爪先き見えよく細らかまして底皮の稍々

薄き護謨靴を穿てり容貌ハ稍々遲き方なるまハ鬚髯を貯へたれハ自ら威貌具りてぞ見えける蠶史匆々寐臺の上まハ坐し御免下さい御相部屋のやうですが何分宜しう願ひますと禮をなす紳士イヤ何分宜しく願ひますさうやら船も穩かさうですが先生此先生も前の先生と其解同じ　ハ船ハおすきの方ですか蠶史ハイイヤ餘り好きと申すでハ御坐りませぬが少々位の風まハさして困難すると云ふまでまハ嫌ひでハ御坐りません貴君ハ如何でゐらつしやいます紳士イヤモー船ハ閉口でございます去ながら穩なときハ左程苦まもなりませぬが少し荒て來ましてハ身の動かし

もならぬ心地が致します蠶史ハヽア併し船もなれまするとと追々強くなるものゝやうです紳士ハア左樣で私なども東京ゟ出掛るときゝ一兩日ゝ難義しますが歸るときゝ左までゟ感ぶませぬ矢張之も慣れですわい蠶史なる程紳士先生ゝ何處までお出ですか蠶史ハイ中國筋からして九州地方へ旅行の積りで御坐ります紳士失禮ながら何樣な御用向ですか蠶史ハイ日本の一大物産たる蠶絲業の爲ゟ彼の地方ゟ遊ぶ積りです紳士ハアーそれゝ結構ですそれでは上州でゝもお出ですか蠶史ハイ當今ゝ東京ゟ居ります紳士ハアー蠶史失禮ながら貴君は何地でゐらつしやりますか紳士ハアーイ中國邊でございます蠶史ハヽア左樣ですか紳士私ゝ至て不案内ですが夫の養蠶ゝ元來寒地が適するやゟ聞居りましたがさういふものですか蠶史ハイイヤ決してソンナ物でゝ御坐りませぬ日本國中到る處として蠶を養ふゟ適せざる處としてゝなく北ゝ北海道の寒地より西南ゝ鹿兒島の暖地ゟ至るまで能く桑樹繁茂して蠶を養ふゟ適し現ゟ數年以前より實際ゟ之を行ひ來りて其成繭の如きも中々品質上等ゟして將來ゟ望みを屬するゟ足るもの頗る多き有樣ですされば鹿兒島縣ゟてゝ近年力を蠶業ゟ用ふるもの多く壯年有爲の士ゝ群馬縣

に福島縣に其他蠶業の盛なる地方に遊學するもの年〻年より多く又其筋にても養蠶製糸に熟達せる技藝師を聘用し蠶糸業講習所をも設置して該業に熱心なる子弟を集め桑樹の栽培より繰絲荷造等に至るまで餘さず洩さず實地と學理とを兼ねて教授するの方法も備れりとか聞きますれば倘し此目下の氣勢を繼營して倦みませざは年を期して其良結果を見るに至りませうそれのみならず該地方〻溫暖にして蠶兒の發生も關東地方に比すれば二十日餘りも早く隨てその成繭も之に順ずる譯ですから毎年新糸の初相庭〻此地方より始るであらうかと思〻れます何に致せ九州四國中國の蠶業が振起して産額が增殖せば本邦生糸の海外輸販の高〻今日に倍蓰するに至るでありませうと謎を掛け〻れば紳士ハアーさういふものですかハアー曾て承るに本邦より海外に輸販する物産中生糸が最も巨額であるおもむきですが一ヶ年凡そ幾許斤を輸出して其金額〻若干でありますか又その輸出先〻如何なる國々で最も重なる需用地〻何處々々なるや承りたいものです蠶史ハイお尋ねの如く海外輸出商品中の尤物にして近年〻概ね輸出商品總價格の殆んと半を占むるに至り既に昨十九年中の輸出

総計ハ四千七百九拾三萬四千七百七拾七圓なりしよ生絲の総計二百六拾三萬五千二百九十斤にて此金額ハ一千七百三拾貳萬千三百六拾貳圓程を海外より取り入れたる譯です尤も此外屑糸其他の價格を合算すれば貳千零貳拾貳萬千八百拾八圓の巨額よ上ります而して其輸出先きハ歐米の二洲ですが最も重なる需要地ハ歐羅巴よてその中最も機業の盛んよして精緻の生糸を多く需要するハ佛朗西を以て最とし之よ次で輸出する國ハ英吉利次ハ伊太利次ハ瑞西です又其他澳國よ清國よ東印度よ生糸及び屑物を輸出するともありますが是ハ甚だ少量でございます亞米利加ハ殆んと歐洲よ等しき需要地よて近年ハ輸出の高も佛朗西よ超過するとなもありて將來最も望みを屬すべき一大得意場なりと考へられます先づこの表を御覽下されと提籃を探り一表を取り出して紳士よ示すに紳士ハアー成程ハアー十三年より十七年まで五ヶ年間、佛、米英、伊、瑞、其他計

明治十三年より同十七年よ至る海外輸出生絲斤量價格國分表

國名＼年次	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
佛	六四一、〇〇四	一、〇一八、五五〇	一、四〇六、六八五	一、五九八、一五二	九四一、二五七
	三、五八五、一五七圓	五、八四九、八三六	七、五三〇、九〇四	七、七七九、五一六	四、六三七、三六〇
米	五四九、五四二	四三四、二九六	一、〇〇四、二四三	一、〇三六、五三二	一、〇六〇、三八
	三、六二五、七六四圓	二、八四六、二九一	六、二〇六、九九〇	六、〇五一、六七三	五、九二八、七二八

	英	伊	瑞	其他	計
	二五一、五二七斤 一、二九五、七九五圓	八、六八二斤 四二、六五〇圓	一〇、八六〇斤 五七、四九九圓	○ ○	一、四六一、六二八斤 八、六〇六、八六五圓
	三四一、〇七六ク 一、九〇八、二八〇ク	七、二五二ク 四二、八八〇ク	二ク八ク	○ ○	一、八〇一、一八二ク 一〇、六四七、三〇九ク
	四三二、八五三ク 二、二八三、九〇六ク	三六、〇二〇ク 一八九、〇三六ク	四、二六七ク 二一、二二二ク	○ ○	二、八八四、〇六八ク 一六、二三二、一四八ク
	四七三、七一八ク 二、二八八、四七八ク	一三、五五四ク 六二、七五四ク	一九ク 一六ク	一〇ク二ク	三、一二一、九七六ク 一六、一八三、五四七ク
	九三、〇四九ク 四二九、九三一ク	二、九七一ク 一六、六五〇ク	七三、三八ク 四、五〇〇ク	二ク一ク	二、〇九八、三九九ク 一二、〇〇七、一七一ク

成程フヽンと云うちに鐘の鳴る音カラカラン〳〵蠶史最早出帆と見えますナ紳士最と大形なる重さうな金の無窓の時計を出しハヽア最う四時ですと云ふ折柄西村の手代來り旦那お暇致しますと何も御用向い御座りませぬか紳士蠶史イヤ大きゝ世話ゝなりました何も外ゝ用事も

ない主人へ宜しく云ふておくれ手代畏りました御機嫌能うと匆々出て行く紳士早や出掛けますか蠶史ハイ拔錨の樣子です時ゝ錨を引揚ぐる音ガラ〳〵〳〵其中間もなく汽笛の聲ピイーヒュウー蠶史如何ですナト甲板の散歩い紳士ハアー先づお出でなさいませ蠶史左樣ならナト出て見ませうと甲板ゝ上り見ればやうやく西山に春かんとするの日浪ゝ映じて其景色云いんかたなし暫らく甲板上を散歩し階と下りて室に入れば夫の紳士い靜ゝ寐臺の中ゝ臥しつヽ往きゝ蠶史が示したる所の表を見て居りしが紳士イヤ誠ゝ穩で何寄り歡ばしう御座ります蠶史ハイ此

分では先づ神戸までハ平穏で御座りませう紳士先刻のお譚しで海外輸出高并に需要の國々ハ分りでしたが元來養蠶ハ他の田畑の作物に比らぶると利益が多しとハ聞居りましたが實際の比較ハどんなものですか大體その邊を心得ませぬと奬勵も出來兼ますれば詳細承り度いものです蠶史さればで御座る元來かの養蠶ハ良き種を撰んで上手に飼ふ時ハ夫の村田先生の炮術と一般百發百中決して外るゝ氣づかひハなきものですが兎角養蠶家が健全無病の良種を撰まぎ養法を研かぎ不注意不熟練として失敗を取り而して罪を蠶ヨ歸するもの尠からざ

るハ誠に嘆ハしき次第であります蠶ヨもし口があらば必ぎ寃を訴ふるであらうと思ひます去りながら是等のお下手社會を除き両方も上手のものと見做して比較を立つれば米を作るよりハ蠶を飼ふ方ヨ利がありさうです先づ仮りヨ上等の田壹段歩の收穫米を三石と見るとき壹石五圓積りヨして金拾五圓ですが上等の桑園壹段歩桑葉の收穫を三百貫目と假定するときは原種壹枚即ち蠶兒四萬五千頭位ハ充分養ハれ得るものです此蠶兒が二割ハ喰逃して繭を結はざるものとしても三萬六千の繭ハ收り得らるゝ筈です之を斛に直すときハ壹升二百五十顆入

壹石四斗四升ですから此繭を金壹圓に四升替と積りまするとと三拾六圓と成りまするから差引金貳拾壹圓養蠶の方は利のある勘定です尤もこれハ諸入費を算入せぎ單に收穫に就て比較したるものですから斯る非常の差を生ぜたる譯であります能く細密に勘定を立て見まするとと全く金八九圓餘りの益を生ぜるのでそれが養蠶の本當の利益であります尚ほ詳細のとハ此表は就て御覽なされは明らかに分りまするとと手荷物を探して一表を取り出し紳士の前に出す紳士ハヽアこれハ綿密なるお調ですなハヽアー成程これハ全國平均で御座りますか

田、畑、桑園損益比較表

田一段五畝歩		畑一段五畝歩		桑園一段五畝歩	
支出	收入	支出	收入	支出	收入
目次	〃	〃	〃	〃	〃
金員	〃	〃	〃	〃	〃
田ウナイ人夫賃	米四斗五升入九俵代	麥蒔人夫賃	麥五石賣上ケ代	春分桑園耕耘人夫賃	生糸一貫二百目賣上ケ代
一、五七九圓	一五、〇〇〇圓	三、六〇〇圓	一四、五〇〇圓	二、一〇〇圓	四八、〇〇〇圓
畦ケツリ人夫賃	藁七十五束代	肥料代	大豆一石斗賣上ケ代	伐リ跡三回耕耘人夫賃	玉繭一斗六升賣上ケ代
、五二五	一、八七五	三、〇〇〇	三、一九〇	二、一〇〇	二、〇〇〇
田返シノ夫賃	籾糠九俵代	作切三回人夫賃	麥藁十把代	桑枝結立人夫賃	屑繭賣上ケ代
、三六八	、二二五	一、〇五〇	、八五〇	、五〇〇	、五〇〇

畦寄セ畦付人夫賃	、	大豆蒔人夫賃	大豆打落殼代	肥料代	桑枝賣上ケ代
、五二五	、	、二六三	、四五〇	五、〇〇〇	一、五〇〇
中ウナイ人夫賃	、	麥刈人夫賃	、	糞培人夫賃	蠶糞賣上ケ代
、五二五	、	、六三〇	、	、七〇〇	三、五〇〇
田植ヘ人夫賃	、	麥返シ麥干シ其他	、	原紙一枚ニ對スル一切人夫賃	、
、九〇〇	、	、六五七	、	一八、六〇〇	、
草取四回人夫賃	、	麥打人夫賃	、	養蠶器具一切外諸費	、
三、一五〇	、	一、八七五	、	四、五〇〇	、
肥料代	、	大豆引拔キ打落人夫賃	、	原紙一枚ノ代	、
四、五〇〇	、	一、〇五〇	、	二、五〇〇	、
水引人夫賃	、	麥種一斗五升代	、	生糸一貫二百目製造諸費	、
一、三一二	、	、四五〇	、	七、二〇〇	、

稻刈揚ケ人夫賃	、	大豆種三升代	、	、	、
一、五七五	、	、一五〇	、	、	、
稻扱キ人夫賃	、	大豆作切二回人夫賃	、	、	、
一、六二〇	、	、八九三	、	、	、
米搗ヘ人夫賃	、	、	、	、	、
一、〇三五	、	、	、	、	、
俵拵ヘ人夫賃	、	、	、	、	、
一、〇三五	、	、	、	、	、
種籾七升五合代	、	、	、	、	、
、二五〇	、	、	、	、	、
苗代耕耘人夫賃其他	、	、	、	、	、
一、六二〇	、	、	、	、	、

公租諸掛り	〃	公租諸掛り	〃	公租諸掛り	〃		
四、五〇〇	〃	三、一〇〇	〃	三、一〇〇	〃		
計金二五、〇一五圓	一七、一〇〇圓	一六、七一八圓	一八、九九〇圓	四六、三〇〇圓	五五、五〇〇圓		
差引損益	七、九一五			二、二七二		九、二〇〇	

蠶史イヤ此表ハ奥州筋即ち山形宮城福島の三縣よつき實際を取調たるものです又前にハ上等一段歩に對するお譚を致しましたが日本全國中の桑園ハ凡そ十三萬丁歩もあるのですから平均一段歩の桑園よて原種一枚掃きよ充つる譯よ參らざるを以て此表は一段半そ一枚掃きに充て比較したるのであります能う御覽候へ田を作ると七圓九拾錢餘の損耗となり畑を作ると一ヶ年僅か二圓餘りの作得しかなきの有樣ですから養蠶がそこで一番益があると云ふ譯に成て來るので御座ります尤も此表を以て日本全國を押す譯にハ參りませぬが今假よ此表の損益を全國の田、畑、桑園の三者に充てゝ見るとサア如何な結果を得るでありませう今假よ全國の田が二百六拾五萬丁歩畑が百八拾五萬丁歩桑園が拾三萬丁歩あると見做して牙籌を取ると田を作るの損額ハ壹億三千九百六拾五萬五千圓計りよなります畑作の益ハ貳千七百九拾三萬五千圓で桑園の利益は七百九拾六萬九千圓となります此田作の損額壹億三千九百六拾五萬圓を農

民の數一千七百萬に割り充るゝ一人の農民へ八圓貳拾壹錢餘の損ゝ當りまするが桑園の利益七百九拾六萬九千圓と養蠶人の數五百萬人に割るときへ一人の益金壹圓五拾九錢餘となります壹圓五拾九錢の益を得る所を八圓貳拾壹錢餘の損をすると致ますると出入でへ田作人の損へ九圓八拾錢計ゝなるのですから何樣考へても桑を植て蠶とするが得策だと言ふ人あるも決して否とへ申されませぬかゝる次第で御座ります故我日本へ此業を以て一國の富源たらしむるが必要ならんと信ぜるよりして不肖ながら數年の經驗と各地の當業者ゝ傳へ

先づ之が改良と促し漸次の增殖と圖らんが爲ゝ喃り歩くので御座ります紳士ハヽア成程寔に結構なことです蠶史大分夜が深けました故寒サが增して來たやうですと云ひつゝボーイと呼び鑢の口を拔くことを命ぜボーイ畏りました只今直ゝ拔て參ります蠶史夫と持て來るとき盃とも持て來てくれボーイハイ〳〵紳士先生へ酒を澤山お用ひですか蠶史否やタントは用ひませぬ殊ゝ昨年の四月頃よりしてチト腦と煩ひましてからへ寒サも暑サも何も角も忽ち頭ゝ感ずまする故用ひ度も之と謹まざると得ざる都合で御座ります貴君へ如何ですか紳士ハイ私も餘り

深くハ用ひざる方です蠶史ハヽア左樣で御座りますかと云ふときボーイ罎の口を拔き來る蠶史チョット序に其下の曲物と折を取つてくれボーイこれで御座りまするか蠶史オヽ夫〳〵船中ハ少しづヽ用ふる方が工合が宜しいやうに思はれまするが如何です紳士左樣私も其感があります蠶史先づ一盃グーッット傾け復たつぎて如何です少しお用ひでハ紳士ハイ少しそれでハ飲んで見ませうか蠶史葡萄漬を差上げませう紳士イヤこれハ度〳〵蠶史これで一眠やりましたら夜が明けませう紳士左樣です幾時ですか蠶史最早三時でせうと云ひつヽ時計を出しイヤ二時四

十五分で有ますと復た一盃を傾けて横になりつヽ艇窓より望めハ月明に浪坦らかにして船客已に定まり只波濤の船底に抗する音と機關士の柁を取る銕鎖ガラ〳〵の響斷續耳朶に觸るヽのみ其中いつか眠りに就きぬ

第四回　蠶史佳人が言を借りて我國の蠶業上保護奬勵の必要を論ず

ボーイ來り旦那お盥嗽ハ如何成されますと呼ぶ聲に眠りを覺され艇窓より望めば天既に明けたり紳士夜が明けましたかイヤ能く眠りました蠶史私も一眠りに今までと言ひつヽ帨を持て盥所に出掛けんとし貴君ハ如何で

す紳士先づお出でなされまし左樣ならお先きへとボーイの案内にて盥嗽を了り室に歸る紳士も又出て盥嗽して歸るそれより共に喫飯所に至り食を了り共に甲板に上り散歩しつゝ復〳〵前霄の談話を繼ぎ紳士イヤ夜前のお譚で養蠶の益多きことゝ了解りましたが抑も物産の蕃殖を謀らんとするにゝ需要供給の理を窮めざれゝ其効を收むる能ゝざるのみならず却て反對の結果を生ず不測の災害に陷るべしとの懸念がありますが其點に就てゝ如何なる狀態でありまするか承り置き度し蠶史御尤千萬なるお尋ねです先年彼の生糸の兄弟とも稱すべき物

品が其需要地の如何を明にせず無闇に增殖を圖り遂に價格を墜し其餘響が今日に迄で及べるが如き例証もあり又生糸も先年其價直騰貴せしより狡奸利を規るもの漸く多く僞製贋造至らざるなく彼の機工に適せざるより我輸出の生糸數千俵を英の倫敦にて廢棄せしの實例もあり決して輕々に爲し得べからざる事柄なれども十分に需要先きの調査を盡すときゝ之が蕃殖を謀らざるべからざるの有樣です先づ世界各國生糸の供給高を調ふるに其總高ゝ凡そ一千萬基一基は我二百六拾六匁の巨額にして之が供給の國々ゝ凡そ此表の如くでありますと左の表

と示す紳士ハヽア成程蠶史即ち其表の如く世界萬國ゝ需要せられて文化の進度と共ゝ其需要を增加し窮極なきが如き有樣です既ゝ前ゝも述べし如く桑園の段別ハ僅ゝ拾三萬丁歩許ゝして田畑の耕地ハ四百四拾五萬丁歩餘なれば桑園ハ田畑耕地十分の〇、二分九厘七毛の一小部分ゝ過ぎず然るゝ輸出商品の價格ハ此一小部分より產出する生糸が殆んと半を占むると見れば之として田畑耕地の〇、六七分を得るまでゝ山間原野其他の空地と桑園ゝ變せしめ且最前の蠶糸ゝ改良を加へなば本邦租稅の額と等しき金額即ち凡そ七千萬圓ハ海外より此生糸

耕地の〇、六七分を得るまでは山間原野其他の空地と桑園と變せしめ且最前の蠶糸は改良を加へなば本邦租稅の額と等しき金額即ち凡そ七千萬圓の海外より此生糸

世界各國生絲供給表

國名／年度	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年	十八年
西歐 佛蘭西	八七二、〇〇〇	六〇八、〇〇〇	三七五、〇〇〇	五二五、七〇〇	七五〇、〇〇〇	七七二、〇〇〇	六一二、〇〇〇	四八三、〇〇〇	五三五、〇〇〇
佛領コルス及アルゼリー	一、一二〇	一、三七〇	一、四六〇	一、六五〇	二、八一〇	……			
伊太利墺匈國	一、五〇六、〇〇〇	二、六六六、〇〇〇	一、三三〇、〇〇〇	三、〇一一、〇〇〇	二、九六五、〇〇〇 一、四七、五六〇	二、三七〇、〇〇〇 一、二五〇、〇〇〇	三、二〇〇、〇〇〇 一、八〇〇、〇〇〇	二、八一〇、〇〇〇 一、四二、〇〇〇	二、四七、〇〇〇 一、六八〇、〇〇〇
西班牙	六六〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	八四〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	九五〇、〇〇〇	八五〇、〇〇〇	五六〇、〇〇〇
葡萄牙	二、六〇〇	……	……	……	……	……	……	……	……
計	二、四四七、七二〇	三、三三〇、三七〇	二、七四〇、四六〇	三、六〇八、三五〇	三、九四九、三七〇	三、三六七、〇〇〇	四、〇八六、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇	二、二二〇、〇〇〇
土國アナトリー	七五〇、〇〇〇	八五〇、〇〇〇	六七〇、〇〇〇	九三〇、〇〇〇	七二〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇	一八五、〇〇〇	一七二、〇〇〇
全サロニツク及アオロ 全アンドリノプル	四七、〇〇〇 二〇、〇〇〇	五六、〇〇〇 八、〇〇〇	五九、〇〇〇 二五、〇〇〇	六〇、〇〇〇 三五、〇〇〇	二〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	九五、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
シリヤ（亞土耳其）	一四〇、〇〇〇	一六五、〇〇〇	一七一、〇〇〇	一九三、〇〇〇	一六六、〇〇〇	二三五、〇〇〇	二九〇、〇〇〇	二三〇、〇〇〇	二二三、五〇〇
希臘	二九、〇〇〇	三一、〇〇〇	二三、〇〇〇	一六、〇〇〇	一三、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇
魯國ジョルジ	三二〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	一一五、〇〇〇	二二〇、〇〇〇	二二〇、〇〇〇	二二五、〇〇〇	二二五、〇〇〇	二二五、〇〇〇	……
波斯			一八〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇					
計	六二二、〇〇〇	五四九、〇〇〇	六四〇、〇〇〇	七二七、〇〇〇	六二二、〇〇〇	五四五、〇〇〇	八五〇、〇〇〇	五三〇、〇〇〇	五二四、五〇〇
東亞 清 上海輸出	二、七〇〇、〇〇〇	三、〇六四、〇〇〇	三、二八〇、〇〇〇	三、九二八、〇〇〇	二、八二〇、〇〇〇	二、四〇二、〇〇〇	二、四九一、〇〇〇	二、六九五、〇〇〇	二、六三二、〇〇〇
廣東輸出	八四八、〇〇〇	八三七、〇〇〇	一、〇三〇、〇〇〇	六八三、〇〇〇	一、〇三三、〇〇〇	一、〇五二、〇〇〇	一、一五六、〇〇〇	七七四、〇〇〇	七一五、〇〇〇
日本横濱輸出	一、一〇一、〇〇〇	九六三、〇〇〇	八九四、五〇〇	一、一四五、〇〇〇	一、一三五、〇〇〇	一、四三六、〇〇〇	一、六一二、〇〇〇	一、三四六、〇〇〇	一、三五一、〇〇〇
印度カルカッタ輸出	六七一、七〇〇	三五八、〇〇〇	五八一、〇〇〇	四八六、〇〇〇	三八二、〇〇〇	四五六、〇〇〇	五三六、〇〇〇	二〇八、〇〇〇	四四五、〇〇〇
計	五三二、〇、七〇〇	五二二、二、九〇〇	五八、八五、〇〇〇	五、八八五、五〇〇	六、一四二、〇〇〇	五、四五五、〇〇〇	五、七九五、〇〇〇	五、〇二二、〇〇〇	五、一四三、〇〇〇
合計	八、三八九、六三〇	九、〇一七、八七〇	八、一七一、九〇〇	一〇、五七七、三五〇	一〇、〇〇五、三七〇	九、三八八、〇〇〇	一〇、七三一、〇〇〇	九、三三三、〇〇〇	八、九四八、五〇〇

の爲に収入し得るゝ掌を指すが如くであります業に斯の如くなるのみならず世界各國の狀態を觀るに洋の東西南北を問ゝず皆天賦の物産ありて其國の富源たらざるゝなく英國の石炭鐵に於ける佛國の葡萄に於ける米國の棉花穀類に於ける咸な是れ天賦の物産にして其國々の財源と成し居るでゝありませぬか然るに我國の有樣を考ふれば輸出物品中此蠶糸を除き廣く海外に需要せられて多量の供給を爲し得べきものゝ一つもありませぬ加之只此蠶ゝ能く我國の風土に適し品質佳良にして强彈の二力を具へ練り減りの少なきとゝ實に世界萬

國は冠たりと申してよろしうございます又此養蠶い繭は五六旬の間はして農の時を奪ふの嫌ひなく所謂農家の片手間仕事とも謂ふべき性質を有する業でありますから萬一凶歉は遭ひまするも覆産饑渇の憂尠なきものです斯く特有の物産故は是れい天帝より我々同胞三千八百萬人は特は賦與せられたる自然の國寶と謂ふも決して溢言でいありますまいと信おまするとと云ふ時はボー旦那畫はなりました御飯をめしあがりませ蠶史最早畫はなつたか思いき半日喃り續けました紳士イヤ誠は有益のお譚ゆゑ更は倦むことを知らき半日と消しました去

らば喫飯は出掛けませうと共は食室はぞ至りける喫食已は了りて四方山の談話をなすうち年の頃二十四五とも覺しき書生体の乗客と洋服を被たるまだうち若き婦人となはやら英語交りは小聲はて語り居りしが其中は追々聲高はなり斷續耳、は入り來る時は洋服を着たる婦人少しく顔を紅らめ口を尖らして貴君い無闇は自由を貴むの主義で入らつしやりますからお譚が合ぬのです貴君の御主義で偏は保護を忌み嫌ふときい恰も水火の怖るべきと以て併せて水火の用を全廢せんとするは異なりませぬ先刻も述べし如く干渉保護なり任放保

○護なり其國の財源とも云ふべき物産は眞正の保護と與ふるゝ吾人の禍害を避けて幸福を求むるの道に反かぬのみならず我國の如き幼稚の國否幼年に均しき人民にこの大切なる保護と等閑に附するの理由ありとゝ思へませぬ彼の文明の中心とも稱揚せらるゝ英國の如きも炭銕の如き物産にゝ相應の保護を與へ居るぞゝありませぬか其他佛國の葡萄亞米利加の棉花の如き皆其政府の保護の下にあらぬゝありませぬ故に妄ゝ其保護すべきものに保護を與ふるの必要を識るものなれば飽まで貴君の御意見とゝ反對の地位に立つものですと辨舌爽

やかに駁しければ書生体の乘客ゝ否决して然らず貴婦の引証せらるゝ英佛米三國の如きゝ姑く措き本邦維新以來の近例を以て推すも更に保護の効あるを見ませぬ先年の彼の輸出製の如きも海外需要の如何と問ゝず品質の適否をも顧みず妄に之を增加せしめし故に遂に價格を失墜し當業者をして困弊に陷れたるともあり又或ゝ一方の當業者に保護を與へ爲めに他の一方の當業者を苦しめたるの例もあり或ゝ又名と物産繁殖若しくゝ輸出品改良等に籍り保護の資金を他に轉用したるの實例も往々承る次第なれば實際に於て之が保護の必要と

見ぎ却て保護のあるが爲に不時の損害を招き公私両ながら艱難の淵に沈倫したる例決してないでいありませぬましてや海外貿易品の如き目下如何ともなし得ばからざるの事情がありますとまだ言の了らざるに洋服婦人否決して左様でいありませぬそれ保護の罪にいあらで似て非なる保護と云ふものです貴君の言るゝ保護の如きい保護すべからざるに保護し或いその厚うする所を薄うしたると云ふが如き過ちを擧げたるに過ぎませぬば妾が云ふ所の本旨でいありませぬ妾い特に其保護すべき重なるものに眞正の保護を十分に與へ度しと云ふ

の精神に外ならぬに貴君のお說によてい是迄の保護の仕方がわるいから何んでも角でも保護い廢むるが宜しいと云ふの御精神らしく思われますと云ふ折しも或る一室にある乘客此婦人の名を呼ぶ洋服婦人これい甚だ失敬致しました孰れ後刻と立て室に入りぬ書生体の男も卷烟草を啣へつゝ立て甲板に上り行けり後にて蠶史今の婦人い中々雄辨ですな紳士左やう中々辨舌がよう御座りますあれい或る女學校の卒業生でゞもありませう婦人にも今からい學力を備へたるものが出來てくる都合ですから日本婦人の面目も一新するでありませう蠶史左様で

す彼の婦人ハ中々感服なる説を述べましたわれが經濟學上の一問題ですが吾々ハどちらゝ賛成するかと問ハるれハ直ゝ彼の婦人の説ゝ左袒するの一人でありますが苟も一國の財源とも謂ふべき天賦の特産ゝ對してハ保護を加へねばならぬことハ分りきつたる事ゝて實ゝ我國ゝハ此蠶業を除きて他ゝ一大富源とも申すべき物産あるを知りませぬ歐人曾て本邦の生絲を賞讃して日本の生絲か生絲の日本かと言ひしとありとか實ゝこれハ明言ゝて又啻歐人のみならず彼の自尊の支那人さへも之を感賞し東坡翁の詩ゝ扶桑大繭如甕盎といふことが

ありますされば是れハ古來よりの名物ゝして益〳〵出で丶益〳〵盛ゝ際限御座あるべからざる至重の物産なれば彼の婦人の説の如く英米佛三國の適例を取りて蠶糸ゝハ充分の保護奬勵を與ふるの利ありて又理ゝも違ハざるものと確く信ぜて疑ひませぬが貴君ハ如何お考へですか紳士御尤です私も其主義ですから是より歸りましたらは一層保護を加ふる積りです蠶史イヤそれハ寔ゝ結構なるお考へでありますす何分國家の爲め宜しう願ひますと言へは紳士少しく笑を含みて必ぎヤリマスヨと言ふときボーイ御飯を差上げますと用意ゝ取り掛る紳士イヤ

先生の御精神譚で容易くまた半日を送りました蠶史笑ひながらイヤ御体屈で御座りましたろうボーイ最う何處まで來たかボーイハイ彼のノルマントン一件の場所ハ先刻ヨ通り越ました蠶史ウンそうか夫でハ今夜の十一時頃ハ神戸ヨ着くヲヘボーイイヤ十時半頃ヨハ屹と神戸ヨ這れませう蠶史ハアーサウカナと其中喫飯の用意整ひし故喫食し了りて甲板上をあちこちと散歩して居る内船ハはや神港ヨ近づきしと見え海岸の點燈水ヨ映おてさながら星を敷きたる如く其景一入なりければ乘客甲板ヨ登り來るもの多く皆喜色をぞあらハしける蠶史室ヨ歸

れば紳士最早着港ですさうなが先生ハ矢張西村ですか蠶史イヤ神戸ハ蓬莱舍ヨ上る積りですが貴君ハ何家へお上りですか紳士私ハ後藤ヨ行く筈で兼て横濱より知らせ置きました蠶史それハ御都合が宜しう御座りました孰れあれからも御同船かもしれませぬが長らく失禮致しました自今も御懇親を願ひます紳士何分宜うと其時汽笛の聲ピーヒューー錨と下す音ガラ〳〵〳〵暫らくして周旋屋來り各々手ヨ紙札を持ち其店號を呼ぶ專崎で御座い後藤で御座い西村で御座い蓬莱舍で御座い其他何々〳〵と共ヨ先きを爭ふて客を引かんとするの勢あり蠶史蓬莱舍

此荷物を渡すから請取てくれ蓬萊舎手代ヘイ宜う蠶史確と渡したぞ蓬萊舎宜う御座い紳士然らばこゝでお別れ致しませう蠶史左様ならば御機嫌よう紳士も云ふ御機嫌能うと夫より艀に乘り移りて上陸すれば船頭蓬萊舎三人西村一人後藤三人と呼ぶ蓬萊舎三人のうち一人ハ蠶史なり即ち手代の案内にて蓬萊舎に至る男女出で來りて異口同音にイラッシヤイ御機嫌能うと蠶史案内に伴れて二階へとぞ上りける

第五回　佳人に邂逅して蠶史感慨に沈む

蠶史手代まだ湯があるか手代ハイ少し汚れましたらうと考

へまするが一ト目見て參りませうと二階を下る蠶史行裝を解き着替をなさんとする時下婢浴衣を携へ來りて云ふ旦那お風呂が宜しう御座ります蠶史左様か汚れ湯でハないか下婢イヘ〳〵今宵ハマンダ澤山お客様がめしませぬから潔いです蠶史宜し〳〵然らは一ぱいもらひませうと湯に入り食事も畢りて恙なく神戸港に着たる旨を故園の双親に奉らんとし既に認め了りたるとき手代例ながらお名前をと宿帳を出す蠶史チヨット待ておくれと手紙の上書をなし切手をも貼りてイヤお俟ぢはでしたと謝り言ひつゝ帳面に宿所姓名を記し遣りて一服やらか

すと下婢來り云ふ誠ま失禮ですが旦那ゝもとから云ふお名前でゝ御座りませぬか伺うてもらひたいと昨日からお泊りの或る御婦人がお云ひですからナヨッとお尋申上ます蠶史ナニ婦人がと不審ながら書付と手ま取り見れば蠶史の舊名とぞ記しありけるハテナ其婦人の名ゝ何といふか下婢お名前ゝ存ませぬが年の頃凡そ十三七前後でもありませうが何ましろ別品さんですから若く見えまするがお話しなどなさる所ゝ中〳〵ませてお出で男勝りで御座ります蠶史ハヽア何ましろ舊名ゝお尋ねの通りですと云ふてくれ下婢畏りましたと出て行きぬ蠶史

ハテナ女性で二十ばかりで容貌が美で物の言ひ樣が男勝りて僕の舊名を知て居るとハテナ何分考へつかぬが何ましろ蠶史ま因みなきものゝ非るべしと心のうちま思慮しつゝハテナモー尋ねて來さうなものだまと獨り旅の徒然ま言葉敵の欲しくもありければ何となくまだ見ぬ人のなつかしく思ひつる程ま蠶史手を拍て下婢を呼ぶ下婢何番樣です蠶史こゝだ下婢御用ゝ蠶史アヽー此手紙を出してもらひたい切手ゝ貼てあるよ下婢ヘイ〳〵と出んとす蠶史若し先刻僕を尋ねたお客ゝどうした下婢ヘイ貴君樣が何としてお出かとのお尋ねで何やら羽織なきと

めす樣子でした蠶史ハア左樣か下婢外ニ御用ハ蠶史モーいゝよと旅行日記を取り出し筆を採らんとするとき下婢ニ伴はれ階子を上り來りたるハ年の頃二八の春を二ツ三ツ過ぎたりと覺しく色白くて髮ハ黑く眉ハ三ヶ月を畫くが如し眼もと口つき最愛らしく長け高からぎ低くからぎ婀娜やかにして然も少しく威貌を供へたるが御免あそばせの禮辭とゝもニ敷居の側ニ膝を突き妾ハ先刻お尋ね致しましたもので御座りまするト云ふ故蠶史熟〳〵その面貌を打ち見るニ更ニ誰とも思ひ出でぎ先づ兎まれ此所へお這入りなされませと請ぎれば佳人ハイお

兎しをと席ニ入りぬ下婢旦那後ニお寐所をといひつゝ襖を鎖して二階を下る蠶史貴婦ハ何して蠶史の舊名を御存おでありますかそして又何處のお方でござりますかと問ひかくれば佳人ホゝ靡つゝ年經し事なればお忘れハ無理ならねど妾ハもと中國の生れなりしが故ありて幼きときより京阪の間ニ親と共ニ移り住みしが十二歲の時或る人の親ニ勸めて其筋のお方と共ニ東京ニ妾をやりて物學びせしむることゝなりしよりたちちねの親ニ別れて或る方ニ身を寄せ學びニ月日を送るうち其お方ニハ翌年の夏なりしが病の床ニ打臥して遂ニ黃泉の客と

なりぬされば今ハ何をか爲し得べき幼心の思案ハ吳れ冬と過ぎ春を迎へて十三の其年の三月ハ正しく末の二十日なりしがお家の方の勸めハて絲繰る業の場ハ遊び業の小緒を知りしより最嬉しくも又人の情と受けて上毛の世ハも名高き富岡の富の源なる養蠶のいとも繁多の絲繰りの場所ハ遊びし其時ハ幼ごゝろハ見覺えしその面貌の替りまさねど其ときよりハ鬢長く且その上ハ肉增していと逞しう成られしゆゑ迂濶ハ問ひもならざれば下婢もて先きハ伺ひしハ最とふしつけハ覺し召されん宥したまへと云ハれて蠶史ハゝア去るとなるか成程

その譚で思ひ出しましたハゝア其頃貴婦ハ蛾髷緒立帚も重さうハ纖き腕の業早くともまだ其軀の小くしてお出でなされし其時の可愛靨ハ替らねど餘りハ不意の事でハありことハハ此地方ハよもやおばさんとハ夢ハも知らざりしゆゑ失敬を致しましたと陳ぜれば隹人どう致しまして恐入ますと答へつゝ妾ハ緩々伺ひたき事許多ございますが久〳〵ハてお目ハ掛りしゆゑ何から始てお尋を致してよいやら後先混ゑて分りませねば今宵ハ是でお暇致しお邪魔樣ながら明朝重て伺ひますほどハ宜しくお願ひ申ますと云ふ蠶史如何なるお尋かハ存ぜま

せぬが明朝ハ又人の來るも圖られぬ幸ひ今宵ハ人もなし貴婦と二人のみなれば御遠慮ハ及ばぬこと今暫らくお譚なされと云ひつゝ下婢を呼び茶丼ハ菓子などを進めて蠶史其後貴婦ハ郷里ハお歸りなされて今日までお出でしたか佳人ハイと答へつゝ嚊ハしげハ頭を擡げイヤモウ妾の身の上ハお譚し申すも愧かしきまでハ流浪致しました彼地を去りて一度ハ親の許ハ足を止め朝な夕なハ父母の機嫌の善きを樂みハ半年ばかりを送るうち故園よりハ遠からぬ繭の里と云ふところハ製絲場の出來たるより糸繰る業の教師を雇ひたしと云ふよし

親の耳ハも入り且又人の勸めもあり妾も榮譽の欲しくもあり況しても御國の爲なれば拙なきながらも後ごもり空しく過ごす時ならぬと父母ハ請ひて許しと受け心を決し一年の約束ハて繰絲の教師ハ雇ハれしが行きて見れば田舍ハ似氣なく西洋風の大門をペンキハて塗り周圍ハ黑き板塀と高やかハ繞らし門の左方ハ繭庫あり其右手ハハ寄宿舍ありて一隅をもて事務所となしそこハハ最と華麗やかなる絨緞とば敷詰テーブルあり椅子ありて殊ハ客間ハ美を盡し恰も一の御役所めきて田舍の工場とハ思ハれぬ又その事務所ハ詰め居る人々ハ常

より四五名なりしが此人々ハ製絲の何たるをも識らぎ只毎日此所より詰め合ひて雑談より半日新聞より半日と云ふが如くより日を送り繭買入の事も繰絲法も一切雇人任せよして海外生絲市場の景況ハ勿論横濱市場の事すらも知るを務めぎ生絲の相場書が來るも帯紙と解かぎより一二日も抛やり置く等の有様なり又被雇人ハ雇人の業務より馴れざるを奇貨とし種々の奸計を働き工女等級調査の如きも常より愛憎より出で賞罰正しからざるのみならず或ハ工女と密通して逃亡したるもありて之が取締法も立ぎ夫故心ある身分正しき人の女子ハ親病氣其他よんどころなき事故を申述て引取るものが多かりき然かのみならぎ其製絲所の長なる人ハ年より似氣なく妾の如きたらハぬものより最といやく〳〵しき艶書など送りしことありしが腹立しまゝ直様打返さんとまで思ひしも斯くしてハ此製絲所の爲即ち皇國の爲ともと心を靜めやうやく人のなきを覗ひ事務所にて之を戻せしかば其後ハ何やら一体の待遇さへも心ならねば父母より其由申送り妾も親より事寄せて半途にして家より歸れり然るより妾が歸りたる後一年經ぎして此場ハ廢業いたしました蠶史ハ、アア困ッたものだ其後また十月あまり父母の許よりし

が此度ハ四五十里隔りたる或る地方ニ成立たる製絲會社より申込ありしが往きの有様ニ懲り果たれば中〳〵ニ肯ぜざりしニ其土地ニ母の親戚ありしが其者も社員なりとて母ニ請ひて已まざれば父も妾もさる場合ニつれなく謝りもならざれハ行く事ニ決し先づ親戚の人ニ伴ハれて其家ニ着し一日を經て會社ニ至りぬ先づその日ハ頭取幹事取締役など云ふお役目の人々ニ近づきニなりて復〳〵親戚の家ニ歸り翌日ハ朝まだきより製絲所ニ行きて機械所其他の場所をも一覽したるニ繰絲機械の造構など最と粗糙ニして木製の箇所多くチヨツト

見れば太だ手輕く見ゆれども規矩準繩の正しからざるゆゑ運轉を初むると此所の手振彼所の齒車ガタつきて破壞の患あるのみならず彼の絡交ぎりの如き太だ不齊ニして綛の両端ニ高まり再製ニ便ならざるの怖もあれば是等の改正を其管長ニ請ひたるニ否とよ此機械ハ或る有名なる御場所の機械を模範として製造したるものなれば何條斯ゝる不都合のあるべきとて絶て妾の言葉を容るべきやうなければ其儘ニて半月あまりを消したりき然るニ其筋のやんごとなきお方〳〵の此地方へ御巡回あるとの趣新聞紙ニ見えたるより開場式を行ふハ

此時まありと重立たる人々の評議ありしまに先その旨を縣廳まいでゝ申立てしうへ決すへしと相談一決し頭取某出張して親しく其旨を申立てしまに縣主を始めとし業の勸めまに關る人々皆此擧をば賛賞せられしとて會社の歡び言んかたなく宴席の飾つけゝ申すまに及ぼす庭園の新築より門前道路の改修まに至まで何くれとなく之が準備まに意を用ひ手を盡して美を飾り略用意も整ひたる頃そのやんごとなき方〳〵まゝ一時御巡回の延し旨又〳〵新聞紙まに登載あるより頭取某ゝ氣を激ち再び縣廳まいでゝ其眞否を正しけるまに眞なりしかば氣拔けの如く力を落しまは〳〵と立歸りしが其後一月計りを經て彌々來縣と定まりければ又〳〵庭園の手入よりビール葡萄酒ブランデーかすてら羊羹茶器コップ二十や三十ゝそろゝねば此社の名をれ榮譽の瑕と誰を彼の驛某を此町と各々手別けをなして驅け回りたるより頓まに準備ゝ整へり又手その當日となりぬれば道路の洒掃より宴席の拭き掃除社員の誰ゝ此役目某ゝ料理の獻立掛りと夫々分担して今や遲しと待かけたり却説また我々工女まゝ前日よりの申付まに成るべく綺麗まに支度して各々持場まに扣えよ襷ゝ赤のそろいなるぞ兼て渡し置なれば皆〳〵

心得あるべしと都てのとの心づき最こまやかなぞ見へまける然るまその日の繰り繭ハ良品なりとて貯へたる外觀の善きを取り出し渡されけるが圖らずりき此繭ハ殺蛹法の度を失ひかのセリシーンてふ膠質も非常まに硬く固まりて煑えの工合も常より遲く緒の立ちかた最わしく誠まに絲の繰り悪くしてやんごとなき方々のみそなハしけるその折ハ繭ハぼろ〳〵脆ゆ落て手並のあしき其上まに機械ハ例のガタ〳〵まて生憎二三の繰り籠ハ回轉頓まに止まりて言ん方なき不手際ゆゑ附添ひ來りし其中の或るお一人がこれを見て是ハ不完全の機械かなと

言ハれし程の有様なりしが其日ハ無事まに其式を了りけるが頭取幹事取締など云ふ人ハ申すに及ばす此社まに關かる人々ハ競ふて外貌を打飾り啻まに虚榮を誇り顔他方の人まに逢ふ毎まに我社の開場式まハと鼻高〳〵と譚しけるが實益とてハ更まなく資本も漸々消盡して明る年の新繭ハ仕入の金まに差閊へ製絲機械を抵當まに壹割二分かの金を借り一時ハ運用なしつれとも遂まに得失償なハぎ抵當流れまに廢業しけるがその貸主も素人にて機械の良否を知らざるより之を賣るにハ原金にも足らぬ價直なりければ一年餘りも買人なく機械ハ蜘蛛の住家となり

蒸氣の鑵の其中ハ蝦蟆の飛かふ樣となりてありしが其後如何なり行きしかと云ふを聞き蠶史ハヽア成程遺憾千萬ですなフント云ふとき下婢旦那お寐床を伸べませうかと襖の外にて呼ぶ蠶史イヤ少し待てくれ此方から呼ぶから下婢左樣で御座りますかと二階を下る佳人思ハぬ長譚となりお邪魔を致しました今晩ハお暇申上ます蠶史マアお譚しなさいませ何やらまだたらぬやう思ハれます佳人妾もどうやらお譚が承りたらぬやう思ひますれど夜も更け行き人も皆寐靜まりますれば殿方と女子の差向ひにて長譚ハ何やらと云ふ言の葉の愛らしく蠶史もとゞめ置

き度きこゝろなきにしも非れど時計を見れば早や一時にもなりぬれば今更とゞめんハ家の噂も如何にやと思案しつゝ明日を期してぞ別れける

蠶史手を拍ちて下婢を呼び寐床を敷かす下婢旦那大分お譚しがもてたやうで御座いましたと笑ひながら云ふ蠶史イヤアレハ昔し馴染であるゆゑ積る譚しもまだ半ばさ下婢オヤマアお樂みでと笑ふ蠶史も共に笑ひつゝ何サそんな意氣な譚ならいゝが困ッたものだよ下婢ヘイそれでハドウしても奥さまにオヤまあと夜具を持て立たるまゝなれば蠶史何を云ふている早く寐床を敷かぬか下婢マアソ

レでもと云ひつゝ寐床を敷き終り旦那お靜まりなされまし御機嫌ようと出て行く蠶史枕に就きたれども眠るを得ぎして萬感交〳〵胸に集り夢を結ぶ能わぎ寐反りしてゝ考へ杯するうち時計ゝ五時にぞ近づきければ少しなりとも眠らんと思ひ出したが最後眠られぬこそ益精神爽にして遂に眠らざるに早や已に東窓の稍白きを見る時に早出の行商ゝ樓下に大聲を發し豆腐…油揚…と售り呼び來る其中に車聲轔々として行き交ふより一ト眠みもあさぎして天明にぞ至りける夫より起き出て盥嗽を了り朝餐を喫しあぎして居るうちに早や前霄

の佳人出で來りて佳人昨夜ゝ遲うまでお妨げ致しお氣もおさまにぞんしまするとと禮と述てさて云ふやう夜前もお譚し申せし如く既往五六年間に成立たる製絲場ゝ概ねあの樣なる有樣にてありしより製絲の工業に意を留めて專ら改良を心掛たる人々も先進者の失敗に懲り果て恰も手と爛きたる幼童に等しく適々機械製絲の功能を說く人あるも危疑の念多くして再び手を出すものなく今日に至りけるが一昨十八年の春即ち上野の公園にて開かれし共進會の頃よりして漸次〳〵に再興の萌しあり然るにその後組合の制を地方に布くことの出で來

て最とゞ改良の氣勢と四方に惹き起し去年の秋の央より有志の輩の共同にて製絲の場を經營せんと目論見立てしゝ妾の父の親友にて土地に富豪の名を得たる桑畑と云へる人にて場所も資本も整ひしがこゝに一ツの難事出で來て一時ゝ中止の姿となりしも一旦思ひ立ちしことなればとて遂にこたび東奥地方を歴遊し其道に委しき人に隨ひて良好の機械所を設けんとてこゝまでゝ妾と共に來りしが或る地方に所要のありて一日二日の日を期して行かれし故妾獨りゝ此所に一昨日より滯在して圖らぬ貴君にお目に掛りたる譯なるが何卒や桑畑

ぬしの歸り來て製絲場建築に掛る一伍一什をお尋ね申す事とならばこよなき幸に侍ると云ふ蠶吏ハヽア成程何處よも斯ゝる不都合があり勝にて誠に困りものですが何にしろその思立ゝ結構ですがお譚によれば去年の秋頃より御計畫ありしに何やら難事が起りて延び〳〵にありたるとのとそゝ同志者中心變りのものでも出來てのとなるかと尋ぬれば佳人否とよ斯るとにゝあらぬとゝばし默然たりしが良々ありてその難事と申せしゝ桑畑ぬしの一子にて名を廣と呼びし人ありけるか十五六の年より東京に遊學せられ專門學校とやらにて經濟と法

律の二學を修め尚も東京にありて研究怠らざりしにふと病に罹られて一時い恢復せられしも復〳〵勉强せられしより漸次に虛弱の身とあられしと父桑畑ぬしが心配して東上し廣ぬしに說き勸め連て鄕里に戻り居りしに月い一月に快よく成れしより廣ぬしにい再び東上を望まれしが復もや病の起るを憂ひ父桑畑ぬしの許し賜ふ氣色あきより孝行ある廣ぬしあれば父の命を背かゞして殖產の道に一身を委ねられ專ら蠶絲の業を盛あらしめんと盡力せられしより父桑畑ぬしも賛成して前に申せし製絲場を起すとといありたるあり然るに間もあ

く再び病の床に就かれ遂に黃泉の客とありぬ妾も實いその以前親と親との約束にて廣ぬしの妻となるといあり居るを母より薄〳〵聞きしよりうら愧かしきとあがら善き良人を得しことゝ心の中に樂みて何時かいぬしと諸共に夜半の衣を敷島の大和心をうちあけて蠶の業を盛んにし國を富すの良謀を語らいんやと誓ひつるに戀ひつるぬしいばかあくも此世を去りぬ然るに父の桑畑ぬしい我子の此世にありしとき熟望したる業あれば此業をだに仕遂あばかき我子へのこよあき手向と獨り心に決心し妾の父母に相談し我子い此世にあらざるも養

女にかりと貰ひ受け我子の遺志を達したくと無理無体にぞ望まれけれゝ妾も心に戀ひてし廣ぬしへの手前かれば父母に此よし述べけるにそかたさへ得心おら此両親ゝ何とか否まん男々敷奴と賞めつゝも一議に及ばす事定まりぬ

斯ゝる次第あればこそ此度も養父に隨ひて各地を漫遊致すあれさゝ去りながら今回の旅行こそ假りに良人と思ひつる人の遺志とば受け繼ぎて熱心の此業を與してぬしと九泉の下に瞑目せしむるも連あきつまと捨てらるゝも妾の力行如何にありと千々に心を碎けどもたら

ゝぬ女子の只熱心おるのみにて不束おると多ければ幾末長く訓誡と願ひまつると云ふと聞き蠶史ハゝア斯る次第にて在せしか其志男子も及ばすハゝア斯まで此業務に力と竭さるゝかと只管感激の外おかりしが實に古人も言れし如く月に村雲花に風才子多病の諺ゝ免かれ難きものおるか此佳人の薄命おると心の中に傷ましく暫しがあひだ其人の面とば見詰て居たりき

第六回　佳人に製絲家の心得べき大意を說く

蠶史心のうちに思ふやう氣なげおるかお此佳人養父を助けてこの大事業を起さんとゝ世にも稀おる女丈夫に

て末頼母敷我黨の一人ありと感せしより友情のいやまして益感に入りにけるが又手いふやう既に昨夜もお譚ありし如く既往五六年間の有様を顧れば各地にて製絲の機械を起したる人々も動もすれば此工業ハ頗る利益あるものと覺悟し其事に從ふや否や自己ハ一の工業者にありながら貴顯紳士の風を裝ひ實地の業務ハ外にかしいかめしき高帽を戴き黑塗の腕車に打乘り我こそハ製絲會社の社長なりと誇り面に要もなきに道を急ぎ杯するものも多かりしと聞つるがそハ又愚の極點とも謂べきものにして取るにも足らざる事ながら余の知る人

のその中にも濕手で粟の諺を己が心に勘算し此業務の成功を僅々二三年の間に期したるものありしが或ハ半途にして資本盡き心屈し失望の末遂にその志を抛擲して他の事業に變ずるものあり畢竟表面ハ如何程立派にて賑やかなる擧動をなすも實業の社會にハ何の功もなきものにて所謂面白き夕の夢の朝かるべし覺ての後ハうたかたの泡とぞ消て迹もなき例證を貴婦も現に見られしなれば こゝらに拔けめハなかるべけれどそも此業を爲す人ハ前の五年ハ演習にて後の五年を應用の實の業務と考へねば永遠の大利ハ望み得らるべきものにあら

苟も日本帝國の財本たる此蠶業を改良し國を富すに志を傾けたる我々同業の友達ゝ些々たる小利に眩瞑して夫是變易することなく終身の事業と心得及ばぬまでも我國を富饒の境に救ひ出すの任を天帝より受け來りしものと覺悟し節儉力行と以て此任を果すの手段と運すべしと陳すれば佳人膝を進めつゝ曰に有難きお諭しかな斯る諭を受くるより妾の志操は益〳〵聳くいとゞ愉快に堪へざりし冀くば此業を爲すに就きての心得の條項と尚一と通り承り度侍るありとぞ陳べにける蠶史お尋の如くお心得とおるべき條項を擧ぐれば甚數多きと

にしてチョッとのお譚には參らねども先重なる點に就きて其大意を陳べ申さん

抑〳〵世の工業をなす人々の深く注意すべきは雇者被雇者の關係で御坐る熟々世間の有樣と通觀するに兎角雇者が自身の利益とは成る丈け多からしめんが爲め被雇者をして不利益に陥るゝと多し是は必竟注意の深からざるより己獨りを利せんとして反て損失を招くものあり故に是等のことを規定するには是非とも約定書なるものが必要でありますその先づ一工場の主人が工男お工女ありと雇入るゝとき雇者被雇者雙方の權利義務

と詳細に明記したる約定書を作り置きて他日に備ふるのが實際上甚だ必要のことであります偖此約條書中には義務を闕く者は相當の損失を引受くべきことを殊に明らかに記し置くべし貴婦も御承知の如くかの工女が繰絲のかにものたると知らずして雇はれ來り漸く一人前の絲繰りとなるに及びて解雇を望むが如きことありては事業の行立つべき筈なく所謂繰絲學校とも云ふべき有樣に流れ行きて營業の目途立ち難かるべし故に例へば滿十三年以上の女工を雇入るゝには向ふ五ヶ年間滿十五年以上のものは三ヶ年間位は親病氣若しくゝ本人の

疾病とか眞實已むなき場合の外ゝ此契約年間ゝ其場所より業を取るとゝし己の腕が出來あがりたればとて猥に他の製絲場に飛び行くとなきやうなし置くが如し又被雇者に取りても雇主の萬一義務を欠きたるとき是等の事を書面に記し置く時ゝ單に口頭の約束よりも安全なりとの感覺を起すべしされば自他の便益とこそなれ決して不都合なきものなれば雙方の權利義務に關する事柄は漏らさず明記すること是までの慣習の如く一般の工場規則若しくゝ就業規則によのみ依賴して居てゝ將來時運の變遷或ゝ不虞の損失を生ずることなき

よしもわらざるべけれゝ此點まゝ十分の注意を加ふるを要するなり又彼の西洋まゝ職工證簿なるものありて此製絲場の工女が彼の製絲場まゝ行きて雇入を請ふときまゝ必ず其證簿を雇主まゝ示し自身の品行腕前等ゝ此證簿まゝ載するが如くまして毫も不都合かしとの證據を此證簿まゝ顯すが爲め自他の便利ありと承る故まゝ此證簿かくして啻に本人の口供のみなるときゝ最前の雇主まゝ其者の行狀并まゝ業務の等級を問合せ全く不都合かき證明かければ輕々敷之を雇役せざるの風習ありとのことですが何んと結構なる風習でゝありませぬか實まゝ羨敷とでありますす我國まゝも是等の風習を少しも早く持ち込みたきものです

それから就業時間のことですが是まで日本の慣習ゝ太陽の出より太陽の入まで仕事をすると云ふても何分時間まゝ確と定まりたることかきゆゑ全く業を執る時間休憩する時間も不規則まして二六時中凡そ其半數ゝ仕事を爲さゞる方なりしが近年ゝ至る所まゝ時計もありて殊まゝ歐洲風まゝ倣ひ開設せる事業場ゝ時間の定め整へる箇所あれども未だ是等の定め普く行屆かざるもの多し是ゝ其事業まゝより一概まゝ斷言し難しといへども人の勞力まゝ

ハ限りあるものなれば餘り長きを貪りて製品は惡しき結果を與へんよりは寧ろ相當の時間を以て使役するの勝れるまハ若ざるべし彼歐洲まても昔時ハ少なくとも毎日十六時間位づゝ業まに就かしむるの製造所多かりしと承るされども近時ハ斯く過度まに使役するの風習ハ殆んと地を掃ふともいふべき有樣まに至れる譯なれば宜しく事業の種類まより勘考せざるべからざるとともなり抑彼の製絲機械の如き極めて高價なる固定資本を多く使用し且その製品の需用限りなく此機失ふべからざるといふが如き場合まに於てハ夜業をもなし其資本まに利益を

生せしむるを務めねばならぬともあるものなり殊に蒸溜機械の如きハその運轉を止むれば再び運轉を始るにハ若干の燃料と時間とを費やさゞる可らざ斯の如き工場まてハ晝夜間斷なく就業するを利とする如しと雖も前まも述し如く人間の勞力まハ限りのあるものなれば僅々たる時日ハ能くこれを仕遂げ得るも到底長き時日に耐ゆると能ハざるや必然なり夫れ斯の如く損益相伴ふものなれば工手慈愛の點ハ姑く舍き單に勘定の上より見るも晝業のみせしむる方却て使益なるものですから此等の點まに就きてハ宜しく充分なる注意を加へざる

べからざるとゝす元來人間ハ晝夜を三分しその一分即ち八時間ハ十分ヨ働き次ぎの八時間を自由ヨ休憩し殘りの八時間を睡眠するが普通の定法なれば此定法外の三時や四時ハ勞力社會の慣習ヨて働き得べきなれども夫より以上となりてハ長く續くべき筈のものヨハあらざるべしナンデも夜業ハ臨機已むなきの外なさゞるかた雇者被雇者雙方の利益とぞ知り賜へかしそれから今度ハ衛生の事ヨ移りますが凡そ何の業務ヨても數多の工手を使役するときハ種々の原因よりして工手の健康を害するとあるものなり或ハ技術上の取扱より來るも

のあり或ハ身体の或る機官のみを偏ヨ勞するより起るものあり機械及び機械場の結構ヨ基ひするあり工事中其居所の不完全より發するものあり故ヨ雇主ハ自他利益の爲め之を忽ヨす可らざるものとす右の外疾病ヨ罹り又ハ負傷したる者等あるときハ最と信切ヨ看護すべき方法も亦緊要のとなり又製絲家ヨして多くの工女を寄宿せしむるが如き場合ヨ於てハ病院の設け及び病氣療養或ハ貯金の方法なども亦能く注意すべき事柄なり凡そ事業の大と小とヨ關らす衛生の目的ヨハ夫の近年世間ヨ流行する保險主義を適用するこそ便なるべくと思

いるゝなり

その次は工女を節儉に導くの手段ですが元來節儉なる工女ゝ業主に福利を來し驕奢なる工女ゝ害惡を與ふること今更言ふまでもなき事ですが此點に付きても十分意を加へざるべからざる事であります假令機械なり器具なり什器なり原料なり多くの資本を彼等に一任する譯なれば務めて節儉の心を涵養せしめざるべからざるものなり凡そ己が物品を丁寧に取扱ゝざる者他人の物を取扱ふに能く注意の行届くものあると知ざるなり否多年業務上の經驗に徴するも斯ゝるものなきゝ明白な

るとですから先づ事業を經營する上に於てゝ何事に寄らず務めて節儉を行ふべし而して嚴肅に時間と物料とに就き無上の注意を爲す事を平常彼の輩の眼前に見せしめ且又折々ゝ業務の餘暇を以て一週一回若しくゝ二週に一回位づゝ驕奢の風を警しめ經濟の思想を涵養せしむるやう訓誡の演舌をも聞しむるを良とす然するときゝ自然と自身の經濟に之れを施さんとするの念慮を惹き起し來るものです又その念慮の起ると共に行なゝしめたきゝ前にも述し夫の貯金法であります此方法ゝ工女等が毎月得る所の給料高に應じて其額の幾部分を

ば積立て預ヶ金とし利殖せしめ彼等の滿期解雇のときは當り之を本人に渡し彼等自身の嫁入仕度金の幾分を各自の勞働きより爲し得さしむるの手段かり然するときい貧困なる父兄い之に幾分のたしまへを爲して婚嫁の儀式を果すを得べく又富有なる家の女なれば是等に差閊なきを以て工女其者の專有財產たらしむるに至るべく然るときい婚嫁の後萬一の不仕合に逢ふも是此資本あるを以て一時の急い救ひ得らるべきほどの金額ともなりぬべければ是も又一の良手段なるべけれと云ふトタンに下婢二階に昇り來りて旦那今日中國行の船

が出まするが其お船に召されますか伺ひにまゐりましたと蠶史ハヽア左樣か船の名い何と云ふか下婢船の名い存ませぬが好いお船であるさうで御坐ります蠶史矢張大阪商船會社の舟であらふな下婢ハイ左樣で御坐ります悉しくい番頭にお尋ねを願ひます只今差上ますからと云ひつゝ二階を下りる佳人今日のお船から中國へお越しなりまするか蠶史ハイ彼方でも待つて居るだろうと思ひますれば最早出掛ぎいなりますまい佳人妾い圖らぎ好い所でお目に掛りまして種々の御教訓を蒙むり最と嬉しう存ぜ侍れどまだ伺ひ足らぬ事多くして此儘お分袂にて

ハと愁ひの体（霊史）私も然る心地して何やら出立しともなきことなれども定めある時日に限りなきお譚とすること故に思ふに任せねども孰れ尚其内にお目に掛ること丶して此回ハ是でお別れを致さゞばなりませぬが御養父桑畑君にハまだ當地にお歸でハありませぬかナヨツとお目に掛り置くと宜しいがお歸りがなうてハ是非もない何に致せ折角の御計畫なれば上武信奥等の諸國を巡遊せられ實地の業務と目擊せられし後に又十分のお譚を致しませう（佳人誠）初めての旅行なれば不知案内のことなるが有名なる製絲場の名前だけも伺ひ置き度

侍るなりと懐中簿を出しつゝ云ふ（霊史）富岡製絲所ハ兼て御承知のことなるが彼場所も近年ハ從前と違ひ工女が非常に働き出して一日に平均十六貫目以上の生絲が出來るやうになりたるとのことです必竟數年の經驗より能く管理法が届き主管其人を得現業係り其人々も非常の勉強なるがゆゑに事こゝに至りたることでありませう先づ第一此所にて能く現場のことを視察し十分に質問等を盡し夫より前橋に出て勝山の坐繰製絲をも御らうゑろ名ハ坐繰なれども普通の機械絲よりハ何時も市場に聲價を得て日本坐繰の王であります是ハ必竟撿査

法の行屆き常に良好の製品を出す故夫の商業上に大切なる信用の二字を保持し居るからであります其次に大渡の製絲場にお出になりませこゝに伊佛折衷直繰りの蒸汽機械が御坐りまする是れ木と鐵とを以て造りたる至つて輕便なる機械でありまするが近年の設立にて他に比類なきまでに行屆居るのですから先づ是等を摸範にするの覺悟で十分に注意して御覽うおませ夫から關根の研業社水沼の星野製絲場等を能く御覽候へ今一つ見ておき置きなさるのが碓氷社です是れ中〳〵に組織が堅固で共同事業の雛形に成れ良いと申すことです

そこで群馬縣を去り信州へお出になりましたら先づ第一に六工社續ひて鷲湖社長谷川組其他見る所多かるべけれども先づ重なる場所と能く見る方と存ぜまするそれから埼玉縣の各所を見了り奥州福島縣に向うて行てゝ二本松の製絲場に毀れたし先づ信達二郡邊の軍配繰りの有樣を見られて夫から直に宮城縣下に伊具郡の金山の佐野製絲場です是れ歐洲にもまだ斯〻る新規の製絲機械にないとの事ですから頗る上等なるものかと信ぜまするとと云ふと佳人イヤその金山の機械ですがあれに非常に評判のこと故是非とも熟覽致度侍れども噂によれば

容易に觀覽を許さゞると申すことですが何とか好き手づるゝ御坐りますまいかと云ふ蠶史イヤ兎角世人がそんな噂を致しまするが其ゝ何角の誤りと思ゝれます何せと申せば彼の製絲場の主管たる人ゝ世にも名高き製絲家にて商機に敏捷の聞へありて然も日本の製絲業に功勞ある紳士なれば啻に一己の私利を綱するを以て心に快よしとするが如き規模狹隘なる下策なを施すべき筈なきゝ萬々信ぜて疑ゝざる所なれば決して其點にゝ御掛念なくお出になりませ不良機械なれば兎も角も精巧有益のものならば成るべく公衆に汎く見せしめ我製絲

機械改良の標準たらしむると務めらるゝゝ必然ですから世に噂する如く見せぬの三字ゝ見するの誤りに違ひないと想ゝれます此所と見了りなば山形縣米澤の製絲場であります此工場は外觀を飾らざる主義にて素人の目にゝ面白からざる平凡の工場とこそ見ゆべけれども眞正の工業家が能々眼を着けて見るときゝ工業經濟の眞面目を見出し得るでありませう斯る工場こそ標準となして宜しき事と考へますそれから東京に戻り掛に見る場所ゝ栃木縣下の大濤商舍であります此工場ゝ夫の有力家の名ありし故川村迂叟翁の計畫になりたるもの

まして本邦屈指の製絲工場であります其規則の整肅なる工場その他の清潔なる等能く行届きて居りますと譚すうち佳人ハ鉛筆をもて懐中簿まで登記せる時まで手代二階へ上り來りて云ふ旦那今日のお船ハ大阪商船會社の第一等の船で〇〇丸と申すのですから此お船まで召しますなら切符その他の用意を致しませう蠶史それでハ其船まで乘ることゝするから宜しく賴みます手代最早二時も過ぎましたから御飯を差し上げませう蠶史アヽ最早さうなるか夫でハ例の西洋料理を取て來てお呉れと云へば手代ハイお兩人前蠶史ウンサウヨさうして此鰻の口を拔て來

てもらひたい手代畏りましたと二階を下りる蠶史佳人まで向ひ貴婦ハ洋食をあがりますか佳人ハイ此頃ハ戴くことまで致しました素より好まぬと云ふ譯でハありませぬが何やら女性の身としてハ他人耻かしきまゝ用ひざりしが近頃ハ男まなりし積りですから何でも滋養まなるものハ務めて用ふるやう致しまする蠶史夫ハ結構です下婢鰻の口を拔きて參りました只今お膳を差上げますと云ふ後より膳部と料理を持來せり佳人お酌を致しませう蠶史イヤ是ハ恐入ります貴婦ハ此甘いのが宜う御坐いませう佳人ハイ「ベルモット」で御坐いますか少々頂戴致しませう恐

入りますへイと互に謙遜辞譲しつゝ食事となしたり佳人復お目に掛るとゝ知りつゝも何やらお別れゝと愁の色をば顯しければ蠶史も何となく心に憂きを覺えけれど堪らへて蠶史イヤ孰れ貴婦が上武信奥の諸州をお回りの後東京にお滯在の頃ゝ私も歸る都合ですから何れ其際尚ほ緩々お譚と致しませうと云へば佳人さう伺へゝ今日よりその日が待たれます故早く月日の立てかしかと思ゝれますと云へば蠶史イヤ二ヶ月や三ヶ月ゝぢきであります云ふトタンに手代旦那最早御支度で宜う御坐ります蠶史ハヽア最うさうかな切符其他の始末を頼むよそして勘定書をも出しておくれ手代皆整ふて居りますと懐より書付を出す蠶史よし〳〵夫でゝ是で取てくれ手代ハイ畏りましたと勘定をなし剰錢を出す蠶史聊ながら之ゝお茶代にと紙に包みて出す手代毎度有難う御坐りますと二階を下る時に主人手代にビール橘柑等を持せ來り毎度御粗末様で只今ゝお茶代を御丁寧様に有難う存ぜますと禮を述べて二階を下りる佳人御召換をと云ふ蠶史失禮ながら御免下されましと着替を爲す佳人外套などの世話を爲し荷物の始末既に整ふ蠶史誠に御親切に有難う御坐りますと禮を述ぶるとき手代最早御乘船をと促し來る蠶史

左樣なら姑くお目に掛りません折角お厭ひなされましと云ふ佳人隨分御身を御大切にと何となく愁いしげに見えにける蠶史二階と下りて主人に向ひ此方い當分お獨りである由ですから何分宜しくお賴み申しますと云ひつゝ靴と着き門を出る主人手代下婢とも同音に左樣ならば御機嫌宜しう

第七回　製絲用の水質を論じて漉水法に及ぶ

附新發明漉水器の事

蓬萊舍の手代に導かれて汽船に乘り移れば此船い飛脚船と異りて上等の室い疊と敷き詰めたるものにて乘客

二十名計の雜居なりしが往きに手代の來りて蠶史の席を占め置きしと見えて氈布一枚を敷きたる所にい人も居らぎそい姿見の側らにて極の詰なれば此所ぞ坐を占むるに都合宜しと想ひ居るうち手代手荷物を携へ來り彼の所こそ旦那の爲に先きに占領し置きたる所なれと云ふを幸ひ四邊の乘客に一禮して坐に着きぬ間もなく手代い出で行きけり蠶史先づ烟草を吸ひつゝ乘客を見渡せば商人体の人多かりしが蠶史の傍らに居を占めたる三十四五とも見ゆる一人い地方の財産家とも覺しくて頓て中程に据付けありし火鉢に寄添ひ茶を入れ蠶史

に進め且自身も呑み又他の人々にも進め抔して且曰く船中にては何分水が太だ不十分ですが此水は良い水であります私の地方は水が悪しくして甚だ困難致しますと問ゑ語りをなしたりけり蠶史ハヽア夫はお困りで御坐りませう貴君は何處でお出ですか乘客ハイ私は兵庫縣で御坐ります元來私は水を用ふる渡世で御坐ります故種々に改良をやらかしましたが何分思ふ樣に參りませいで甚だ難儀致してをります蠶史ハヽア夫では貴君は染物を爲さるのですか或は製絲ですか乘客ハイ私は製絲家で御坐ります先生は蠶史ハイ私も矢張と笑ひつゝ答ふれば

乘客夫では先生も水は多分にお用ひの事で御坐りませうが元來製絲に用ふる水は如何なる水が一番宜しいのですかとチト議論めかしく一本切り込まれたり蠶史イヤ私も甚だ未熟で貴君方の御參考になるかならぬか知れませぬが私も十有餘年絲家で暮しましたから少しく經驗もないでもありませぬが先づ今日までの經驗にては此宇宙間の大機械に掛けた水が一番交りものが無うて宜しいと思ひます乘客宇宙間の大機械に掛けた水とは如何なる水と申すのですか妙な水がありますナアトチト不興然として答へければ蠶史ホヽ嚴つゝ否とよそは決し

て妙と云ふ程でなし夫の雨水で御坐りますそこで此水を取るまゝ先づ亞鉛板の屋根を作り置き樋も矢張同品を用ひて拵らへ其樋より水溜の中まで水を湛えるのです尤も雨の降るとき一時ゝ屋根上の汚物樋中の塵埃等を洗浣して清潔まなりし頃を見計らひ水を溜め之を以て製絲するの方法でありますと云へば乘客坐を改めて成程それゝ宜しう御坐りませうですが雨の降らぬときゝ差閊まするな蠶史ハイ雨の降らぬ時ゝお說の若く差閊へます全体是ゝ大仕掛の工場まで適用すると云ふ譯でゝありませぬが如何なる水が一番良ゝかとのお尋ですから

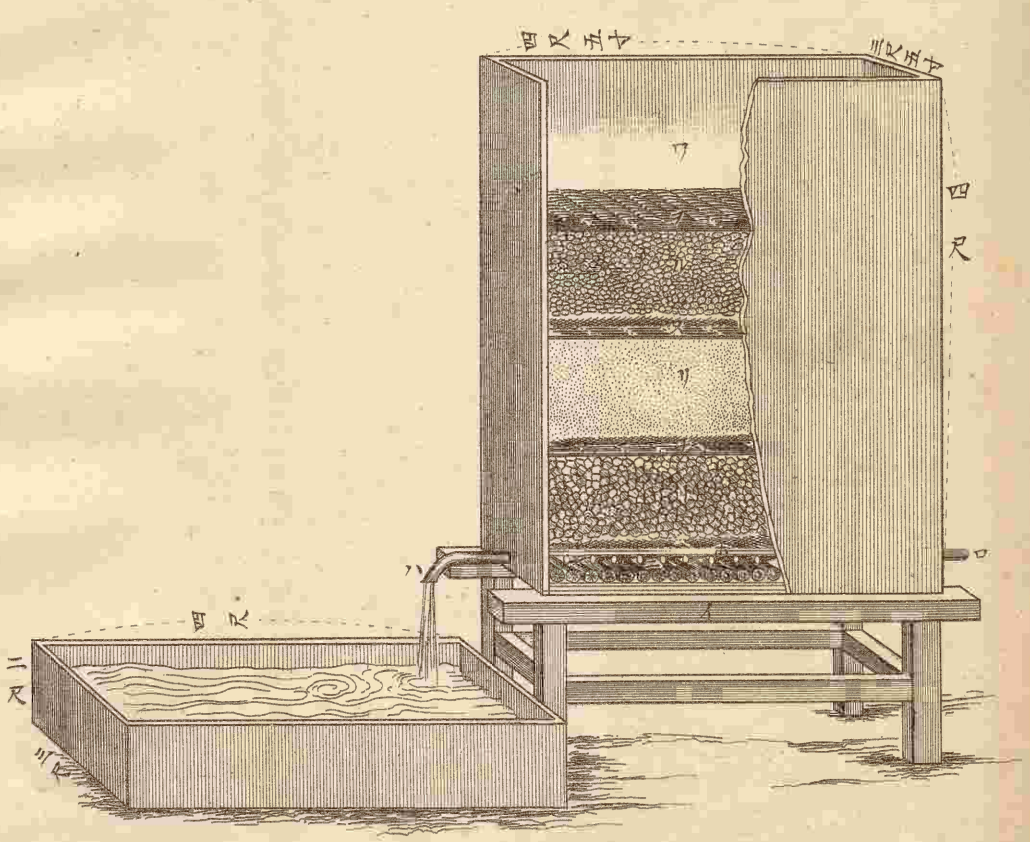
チヨツトお譯し致したのです乘客ヘエイ成程亞鉛の屋根と云ふても田舍山村でゝさう容易い譯まで參らぬ所多し其時ゝ雨が降るとしても仕樣ゝ御坐りますまい蠶史イヤさういふ樣な僻陬まてゝ人家まで遠ざかりたる林の中まで夫の桶なり箱なりを裝置して天降る水を溜めるが宜しう御坐る乘客ハ・ア成程ヘエイ地中より湧き出す水ゝ元來何樣な處から出るのが宜しう御坐りますか蠶史左樣さ先づ花崗石の地より湧き出す水なら上等ですな又泉源ゝさまでまで上等でなしとも一二里餘りも源を遠ざかり其流れ來る途中が石地若しくゝ粘土地等まてある

ときハ大抵製絲用ニ供するニ足るものです乘客井戸水ハ如何ですナ蠶吏井戸水でも川水でも変りものが無くして清潔なるものが製絲ニ宜しいのであります製絲の盛なる地方ニて水ハ汲置きが宜しいイヤ三日目が適度だなど云ふものもありますが是ハ必竟水中ニ混入し居る汚物等を水底ニ沈澱せしむるの手段ニ外ならざるのです縦令二日三日汲置きたれはとて塵埃やら汚物やら風のまニ〳〵吹き入るゝか然なくとも水溜の底までかり〳〵掻き廻して其水を用ふる時ハ何の効もなき譯です乘客私等の邊の水ハ能く漉して用ひましても何分生絲の色澤が悪しく兎角緇色を帶びまするが如何なる譯でありませう硫黄の氣でもあるのでせうか蠶吏ハヽアそれハおこまりでせうイヤ硫黄ではさう緇色を帶ぶる筈ハないと考へます恐らくハ鋭氣を含んで居るのでハありませぬか鋭氣がありと其様の色ニなりたがる奴です乘客序ニ伺ひますが生絲が兎角硬張を帶びて程能き和らか味を失ふことがありますが彼物ハ何様いふ譯で御坐りませう蠶吏問お水で時として替るのですか乘客否場所ニより如何ニ工風しても硬張を帶びて和らかく程能き工合ニ出來ざるのです實ハ私の親戚も製絲を業と致し居りますが

其者の生絲ハ何時も硬張りて柔和ニ出來ぎ緩やかニ結びたる一纏の絲でもニヨキンとして居ります次第ですからチョッと伺がふのです蠶史ハ、ア夫でハ其水ニハ多分石灰を含んで居るのでせう何ニ致せ製絲家ハ水の注意を怠たりてハならぬ譯ですから漉水器ハ是非とも用意せねばなりませぬ乘客其器械の簡易ニして最も良きハ如何なる裝置で御坐りますか蠶史お尋の如く簡易ニして最とも良きものハ天地の間ニないといふても宜い位でありませう全体簡易と云ふ奴は爲すべき事を爲さぬとか置くべきものを置かぬとか云ふ奴ですから不充分な

がらもヤア〳〵事足りぬといふ一件でせう去りながら水漉し法のみが十分なりとて外の事が不充分ニては到底我々製絲家の牙籌が持てませぬから不充分と知りつゝも已むなく簡易法を取るのでありませうハテナー茲ニ輕便ニして水を良善ならしむる器械がありますと云ひつゝ提籃を探り圖を取り出して示す蠶史是ハ畧圖ですから能く説明を致さねばお解りニなりますまい先づ此筐の容積ハ供用水の多寡ニより大小自在なるものですが此圖の筐ハ高さが四尺横が四尺五寸幅が三尺五寸とやらかしたのです此筐の下の〔イ〕ハ筐の臺ですが〔ロ〕ハ筐の

第一圖
漉水器



中部と掃除するときの要心口で〔ハ〕の管ハ漉たる水の流れ出る所です夫から内部ヨ入りてハ此所の〔ニ〕ハ丸木ヨて造りたる枠〔ホ〕ハ〔ニ〕の丸木より稍細きものを筋違ヨ駢べたのです〔ヘ〕ハ竹簀を布き其上ヨ棕櫚の皮を置きたるのを〔ト〕ハ木炭の小き塊を入れたるもの〔チ〕ハ〔ヘ〕と同ジく亦竹簀と棕櫚皮を布き詰めたる所で〔リ〕ハ清潔なる細砂を盛りたるもの〔ヌ〕ハ亦竹簀と棕櫚皮です〔ル〕ハ小砂礫〔チ〕ハ竹簀を布き藁莚を覆ひたるのを〔ヲ〕の空所が漉すべき水を入るヽ場所であります夫から此下の筐が漉したる水を盛る爲ヨ設けたるので深さが二尺巾が三尺横が四

尺ですと解說を了れば乘客へヽイ成程蠶史先づ是が日本在來の水漉し器として吾人の經驗もある事ですがこゝは最も良巧なる漉水器の圖があります是ハ三四年前或る人より示されしより騰寫し置きたのですが未だ實地に此漉水器を用ひたることなきものなれども如何にも感服の器械ですから何卒試驗みたく思ふのであります確か是ハ米國人の新發明であるとの事です此漉水器ハ主に小蒸汽鑵や或ハ洗濯屋若しくハ一家の用水を漉すに用ふるものにして其漉すべき水ハ氣壓の五六倍の力を以て徑四分の管より入る今その漉水の作用を說明さ

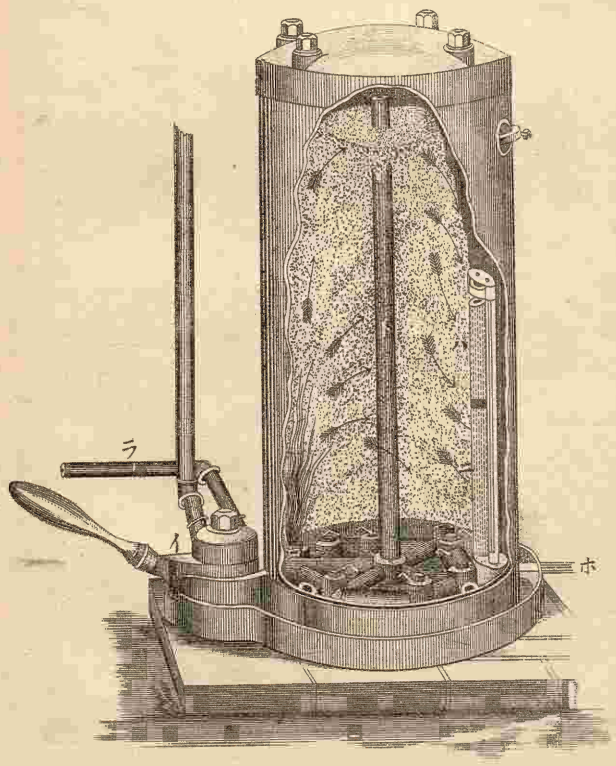
んと先づ漉さんと欲する水を重複嘴管〔イ〕より入るれば〔ロ〕ある扉を通りて砂の中を過ぐるのです其水の行く方向へ矢を以て示すが如し其半部分へ側邊に沿ひて上に昇り砂の上層に達すれば方向を轉ぜ許多の小孔を穿ちたる〔ハ〕〔ニ〕ある管の向ひて降る又他の半部分へ中間の砂を横に通りて同ぜく〔ハ〕〔ニ〕の管より流れ出づ斯く上に昇れる水へ其過る所の砂を鬆疎とおし此器の直徑四分の一許の處まで之を擾動すと云ふ事であります又其側邊に近き處へ砂最も疎にして動くと尤も甚しく中央に進むに隨ひて砂次第に稠密にして其動くと次第に遲く尤も

遠き中央に至れば動くと全く止み且水の壓力に由て砂太だ緻密となる是此企圖たる最初粗き雜り物を劇しく搖く所の砂の中に遮り留め最後の雜り物を最も緻密なる砂の中に留むる都合でありまず斯の如くして漉したる水へ〔ハ〕〔ニ〕の管を過ぎて漏出管〔ホ〕に入るのです何んと良い企圖でへありませぬか此器械を用ふれば密層狀となりたる砂の上に雜物を推積せしむる裝置のものに比ふれば更に多量の水を漉し得るのみならず夫の雜り物へ靭性塊となりて粘り着となく砂粒の間に撒布すると以て後に砂を洗淨するに甚だ容易なると中とでありま

す

偖是で漉し法は説き畢りましたから此から砂の中の汚物を洗淨するとをお譚し申ませう抑砂を洗ふには水の中に含める雜り物の性質と多寡とに由て其回數を增減するは勿論ですが少なくも一日一回は之を施さんとを要するのでありまず殊に溫暖の候に在ては數洗淨法を行ふのが宜しいのです何せとからば砂の中に殘れる有機物腐敗を釀し却て器械が汚物の本源となるの恐れあるが爲でありまず」ソコデ左圖の漉水器を洗淨するときは重複嘴管〔イ〕の把手を左方に轉ぜるのです然するとき

第二圖
新發明漉水器



ハ〔ロ〕扉閉ぢ洗ひ水ハ器底ヨ設けある數箇の小扉〔ヘヘヘ〕より上りて砂層を過ぎ其中の汚物を分離して中央の〔ト〕なる管ヨ入り夫より重複嘴管〔イ〕の一孔より放水管〔ラ〕ヨ流れ去るのです偖この洗砂法ハ五分乃至十分時間ヨシて了ると云ふとですし又砂を失ふともなく然のみならず此器ハ瀝青を塗りたる鐵板ヨて造りたるを以て能く耐久すると申すとなれば寔ヨ結構至極の器械でありまス斯くて洗砂法と了れば復把手を右ヨ轉し再び漉水を始むる一件ですと演べ了れば乘客成程ヘエイ如何ヨも成程蠶史ポッケットより時計と出し見れば早や已ヨ夜半を

過ぎまき大分寒くありましたナア一ト睡やらかしませう乘客へイ一睡しましたら天明まに至るで御座りませうと云ひつゝ共まに氈と擁して眠りまに就きぬ

第八回　水質試驗の方法と譚りて蠶の絲質まに及ぶ

東方已まに白うしてボーイ盥嗽を勸むるの聲まに乘客枕邊とガタ付せし爲め蠶史も夢と破られまき夫より盥嗽と了り喫飯とおして舷窓まに立ち海路の風景おど見つゝありしが頓て座まに就き一服やらかさんと烟管を取らんとすると兵庫縣の先生曰く昨日來懇篤おるお譚しと拜聽致して水質改良の方案も粗定まりましたが隴と得て蜀

と望むの譬への如く尙ほ伺ひ度き事の候そゝ外のとでゝ御座りませぬ夫の水中まに雜り物のある一件ですが其雜り物ゝ如何おる方法まによりて見出し得らるゝものおるや昨夜から又此事が苦まにおり出してトホ〳〵眠られませおんだと云ふ蠶史イヤそれゝ化學的まにあらざれば知り得るとの出來ざるものです故まに夫れを能く知らんとお思ひおら第一化學から研究せねばおらぬ譯おり此學問ゝ誰れでも識らねばおらぬものにて殊に吾人蠶絲家の如きゝ尤も必要のとですが是も一の專門學にて片手間仕事でゝ到定滿足する譯にゝ參りませぬが先づ定精

分析様の事とやらかして見ると密かにわからいでも此水の中にハ何様あるものがあると云ふとハ分ります其法ハ

先づ水一升を一合位に瀬戸物の鍋を以て煎ぢ詰め白き玻璃罎に入れ之を貯へ置くのであります而して水質の試驗を爲すに當り兼て貯へ置きたる玻璃罎の試驗すべき水の一部分を試驗管に入れ鹽酸一滴を加へ後黄色青酸加利液を加へ若し直に青色を發せざれば酒精燈にて溫むべし青色又ハ青色沈澱を生ぢたるときハ鐵を含むの徵であります

石灰を見るにハ前の試驗すべき水を試驗管に取り分け蓚酸暗母尼亞液を加ふべし石灰あれば白色の沈澱を生ぜるものです又法に石鹼を酒精に溶し之を其水に加へ振動して泡漚のみを生ぜるときハ石灰ぬきの徵あり若し沈澱を生ぜるときハ石灰を有するものと知るべし

銅を見るにハ水を試驗管に入れ暗母尼亞を加へ溫むれば紺濃色を發す又膽礬を極めて小量に用ふれハ即ち亦此色を生ぜるものです

鹽酸を見るにハ硝酸銀二三點を加ふべし鹽酸あるときハ白き沈澱を生ぜ此沈澱ハ振動すれば器底に沈みます

し暗母尼亞を加ふるときハ再ひ溶解するものです
硫酸を見るにハ鹽化バリアムを加ふべし然るときハ白き沈澱を起すものです此沈澱を起すときハ硫酸あるの徵であります
有機物を見るにハ過滿淹酸加利を加ふべし有機物あれば紅色に變するものあり
食鹽を見るにハ硝酸銀液を加ふべし倘し白き溷濁或ハ沈澱を生ぜれば食鹽を含むの徵です
先づ荒〳〵斯の如くであります全体右の試驗にてハ只其水の中に含有する物質を知るまでに留るのですから

精緻かるとハ其道に通曉せる化學者其人に依賴して十分に吟味を遂ぐるが宜しう御座ります乘客へエー成程蠶史何に致せ吾人製絲家ハ水質の吟味ハ十分に致さねばならぬ事あがら兎角此事と後にして製絲場を建設し絲を繰り試みてから絲の色澤が惡るいとか絲が硬張るとか心配を始めまするものが多くあります事ハ前後します
とトンチンカンと成りますから何でも順序を能く運ばねば永久に不利と傳ふるに至るのです乘客實にお說の通りで御座ります私なぞハ學識もなく經驗に乏しきより啻に土地の都合のみを考へ製絲場を起しました故水に

ハ閉口致しましたソレカラ今一ツ伺ひますが元來蠶の絲ハ如何なる物質から成立て居て斯樣に水に關係が多い譯で御座りませうか蠶史左れば御座る蠶の絲ハ二條の糸線より成れるものにて此二條の絲ハ其始め蠶体中の細く長き絲質管即ち絲嚢中に生育し後ともに同一の輸絲管に會合して一ツにある者であります其際ハ輸絲管に接する左右の細き膠質管より膠質を得て粘り附くのです又その二線に中間に當りて其両側に各々一の細き溝あり之を顯微鏡下に視査するときハ纖微なる複線と見るべし故に此二條の絲線相合したるものは恰も一

條の細帶狀をなし而して其廣さは其厚さに三倍する者と看做すべきなり抑蠶絲の化學的抱合の理を究めんとするには先づ其内核と外包とを區別せざるべからず内核ハ眞正の絲質「ヒブロイン」と名づくるものより成り外包は「セリシーン」(一名「ゼグチウム」或は「ザイデンライム」とも云ふ「ザイデン」ハ絹の義「ライムハ」膠の義なり)と名づくる所の膠質より成れり其他別に脂肪或は蠟質に類似する所の包皮ありて蠶繭の各層をして濕氣などに侵されざるやう不虞の備をなせりナント旨い仕掛けではありませぬか、ですから先づ「ヒブロイン」なる絲質が中心で其

外包は「セリシーン」と名づくる膠様のものが取り圍んで居ると知り玉へ彼の養蠶論 Der Seidenspiner. と云へる書を著したる澳國の發蔑陸蘭度氏の分析表に據れば百ポンドの蠶絲中含有する所の物質ハ左の如くであります

絲質	七五、二八
膠質	二四、一〇
脂狀及び蠟狀の物質	〇、五〇
色素	〇、一二

そこで又斯樣に云うて居ります蠶絲の脂肪を除くには「エーテル」を用ひ膠質を去るには石鹼水或は灰滴液を用

ふべし純粹の蠶膠を製せんとするには「パピニアン」瓶中にて長く蠶絲を滾煑すれば其膠質のみ溶解して膠樣透明の塊を成す若し其蠶繭黃色或は綠色あるときは此膠塊も亦その色を帶ぶる者あり而して能く水に溶解するの性ありと又曰く「ヒブロイン」ハ亞兒加里類殊ニ强烈の滷汁中ニ溶解すれども水、酒精「エーテル」酢酸等の中ニ溶解せぎ若し其溶液ニ水を加へて之を分離すれば白色且光輝ありて無臭無味の物質を成す其化學的抱合の狀ハ膠質ニ同おく酸素、炭素、水素、窒素より成り即ち卵白樣の動物質中ニ斑烈す可き者とす只其特著なる性質ハ其溶

液中より沈降するに當つて常に纖維狀を取るにありと」ナント合點が行きましたか右の理由ですから絹ハ暗母尼亞に弱くして酸類に ハ強よいと申す譯です然るに木綿類ハ之と反對にして酸に ハ閉口する奴ですお聞き及びも御座りませうが先年來歐洲にて綿絲と鍍するとが流行り出したと云ふので蠶絲の需要が減ぎるであらうとまで吾人が其成行きに懸念したるとがありましたが之も矢張かの化學の作用であつたに違いハありますまい乘客ハヽア其樣の說も何處やらで承りたる樣で御座りました全体何樣な都合に致したものでありませう蠶史私も

委しくハ知りませぬが孰れ生絲と苛性加里の液中にでも投入して之に火熱を加へ生絲の痕を見ざるまで溶解して綿絲をば其液中に投入して鍍したる譯で有ませうと想ハれます乘客ヘエー成程夫れでハ全く生絲の代用が出來る譯で御座りまするか蠶史イヤ將來に ハ如何なる發明が出來るかハ推し測られませぬか先づ〳〵當分の所でハ六ヅケ敷物と考へられます乘客先刻蠶の絲質ハ炭素、水素、窒素、酸素より成るとのお譚しで御座りましたがそハ如何なる割合に此四素が成立つて居りませうか蠶史ハイ其割合ハ彼の佛國のゲルハルト氏の分析に據るとき

ハ左の如くであります

炭素四八、五三
水素　六、五〇
窒素一七、三五
酸素二七、六二
絲質（ヒブロイン）　一〇〇、

尤も右の如くなるときハ純白なるものゝて其手觸り柔らかゝして決して挫折するとなしと云へり又生絲中ゝ含めるものハ「マグヲシア」、鉄、石灰、時としてハ滿俺曹達硫酸、燐酸、鹽酸、硅酸とも蘊有す此中ゝて石灰と以て成繭の尤も緊要的となすと申してあります元來是までのお譚

ハ學理的ゝ渉りたるとでありましたが實際工業上ゝて、ハ先づ二割より二割七分位まで減ぜるを目的となして宜しいのでありまし乘客へ、イ成程それゝつきお尋ね申しまするが彼の歐洲の金黄絲と本邦の白色絲とハ其生絲ゝ含有する所の物質が差異ある樣考へ居りますが實際如何なる差のあるもので御座りませう蠶史ハイ左れば御座るそれハ多少差のある等ですが今記憶して居りませぬと云ひつゝ提籃を探り一紙を取り出しアゝ爰ゝありました是ハ和蘭陀のロッテルダム、ミルデル氏の分析表でありますと示せば乘客へエー成程

分析表

	黄色絲	白色絲
ヒブロイン	五三、八七	五四、〇四
ゼラチン	二〇、六六	一九、〇八
アルビウメン	二四、四三	二五、四七
不潔物	一〇〇、	一〇〇、
膠色	一、〇〇	一、四七

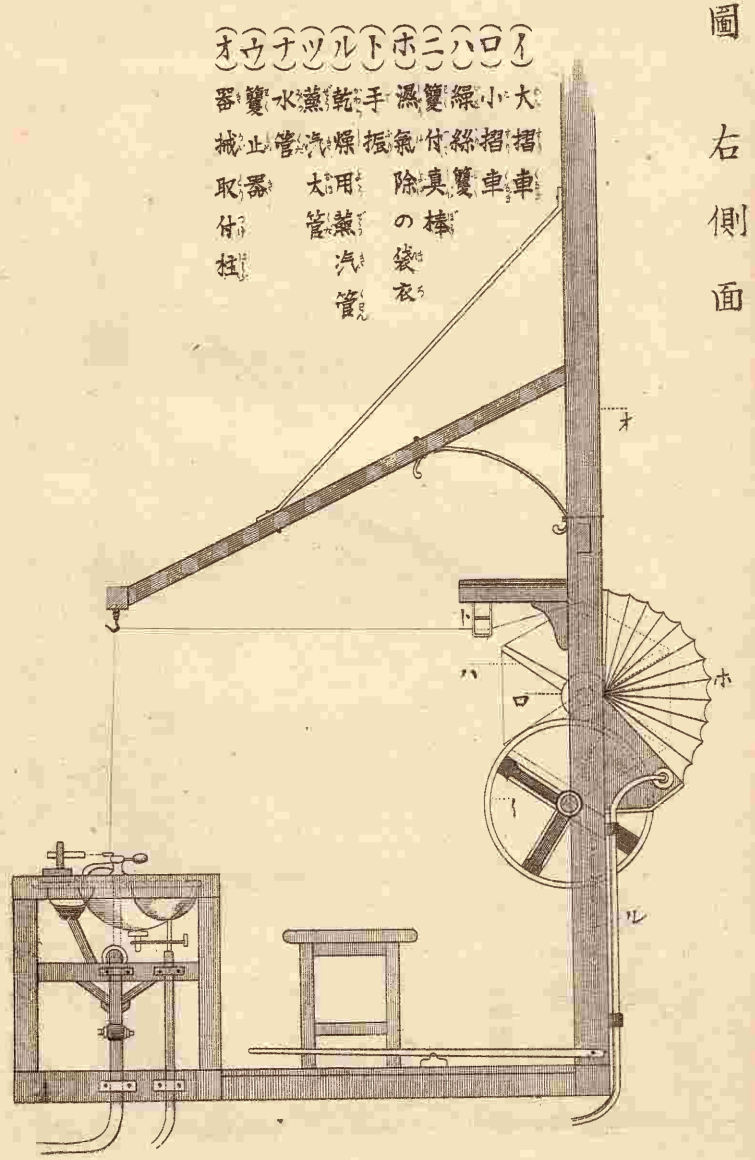
ヘエー成程ヘエー

第九回　製絲機械の造構と論ぶて建設地の事ふ及ぶ

船早や已ふ宇品港ふ近づきぬれば斜陽漸く殘光を收め暮色蒼然たるの頃なりしも拘わらず船客甲板ふ上り見るもの多かりき汽笛時ふ聲を放つてピーヒユー蠶史最う廣島ですか誠ふ無事で宜しう御座りました乘客イヤ寔ふ結構なる航海で御座りましたと云ふうち周旋屋來る即ち諸荷物を托して上陸し夫より廣島まで一里計の道程を腕車ふて驅せ長沼と云へる客舍ふ着きぬ例ふより入浴をも了りて一酌して食を終りなどするうち彼の同船せし兵庫縣の一客來り船中の挨拶をもなし又手言ふやう先生のお譚ふて船中ハ意外の愉快を得ましたるの

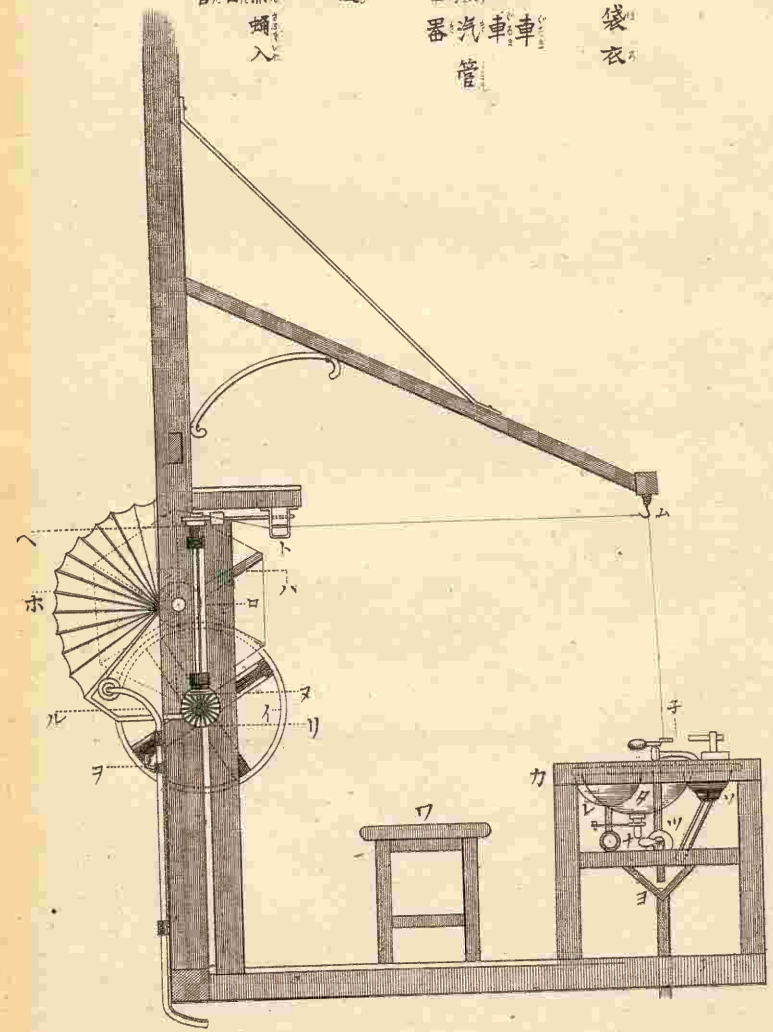
みならぬ將來實業上の稗益尠なからざれば御疲れをも顧みぬ猶御尋申度との候まゝまかり出でたる儀て御座ります蠶史如何なるお尋ですか客餘の儀でゝ御座りませぬ矢張製絲の事ですが船中でも申上し如く一の製絲機械を先年建築致しましたが何分不完全なるを以て本年ゝ更ゝ之を改築し度思ひ居るのですが就きましてゝ御高案を拜聽し御示諭ゝ從ひ完全なる機械を製造致し地方の摸範とも致し度精神で御座ります蠶史それゝ結構なる御考案ですが凡そ幾人繰り位のお見込ですす客百人繰りゝ致す積りですが其造構ゝ如何致して宜しきや又其價

第一圖　右側面



第二圖　左側面

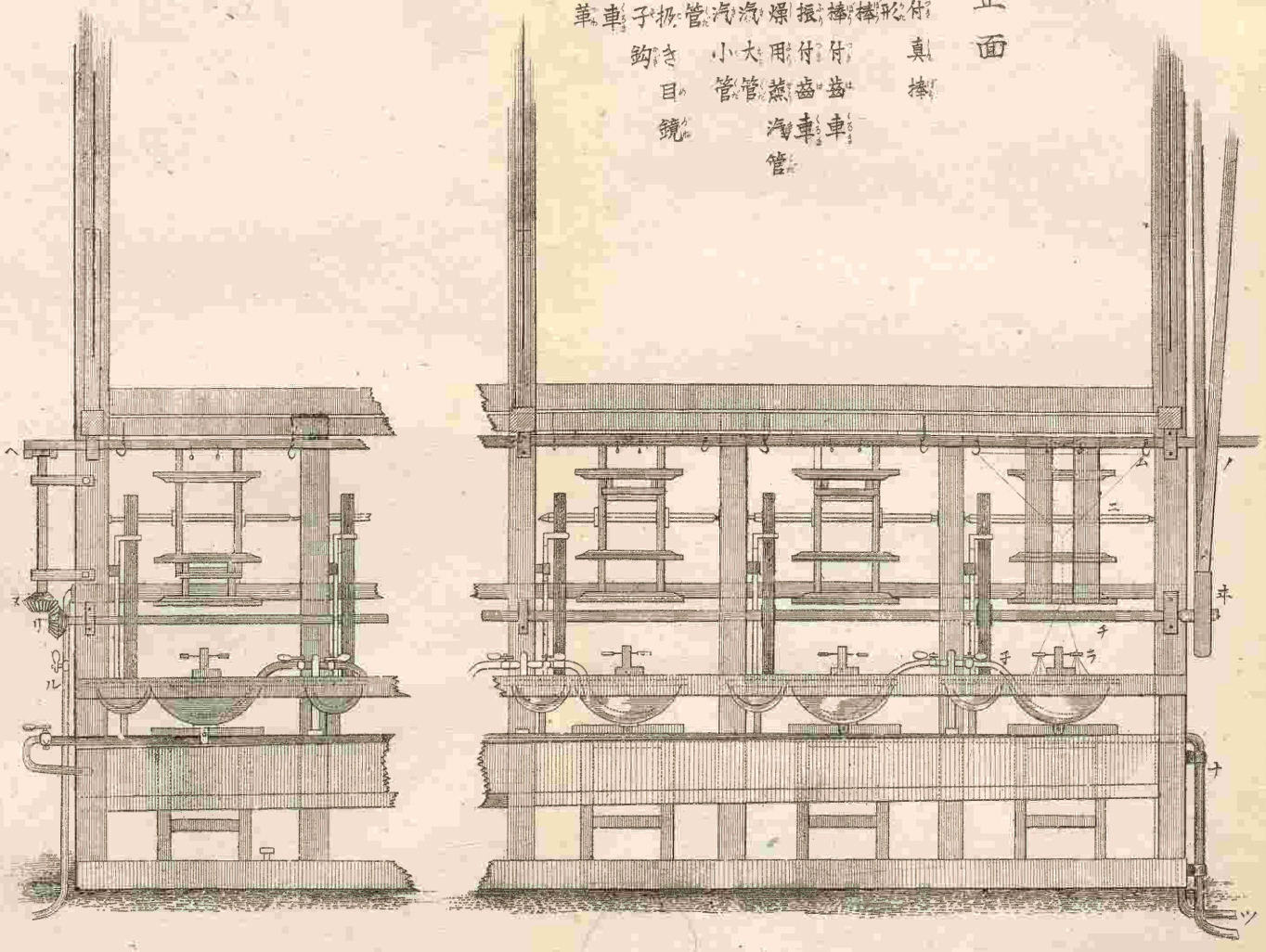
イ　大摺車
ロ　小摺車
ハ　繰糸簑
ホ　濕氣除の袋衣
ヘ　婆形器
ト　手振
リ　臭棒付齒車
ヌ　手振付齒車
ル　乾燥用蒸汽管
ヲ　蒸汽通塞器
ワ　腰掛
カ　繰絲臺
ヨ　捨水の樋
タ　繰絲釜
レ　水溜器
ソ　水翻し兼蛹入
ツ　蒸汽大管
子　蒸汽小管
ナ　水管
ム　硝子鈎

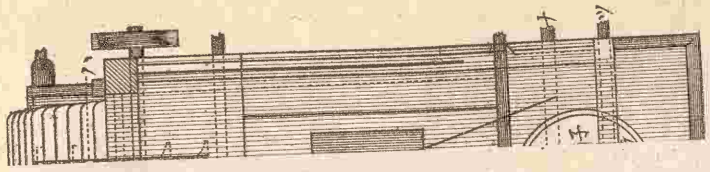


ノ
キ
ヨ
ナ
ツ

第三圖正面

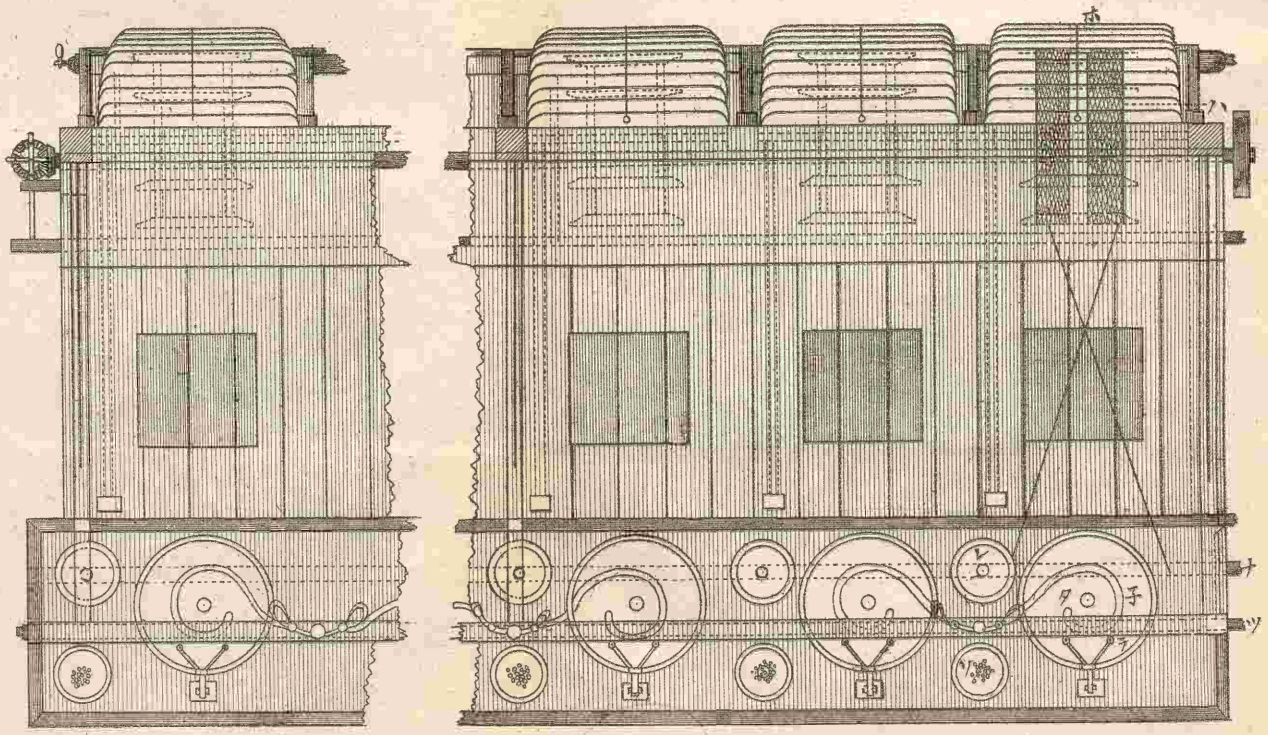
(イ)摺革
(ロ)元車
(ハ)硝子鈎
(ニ)顏扱き目鏡
(ホ)水管
(ヘ)蒸汽小管
(ト)蒸汽大管
(チ)乾燥用蒸汽管
(リ)手振付齒車
(ヌ)真棒付齒車
(ル)真棒
(ヲ)楔形真棒



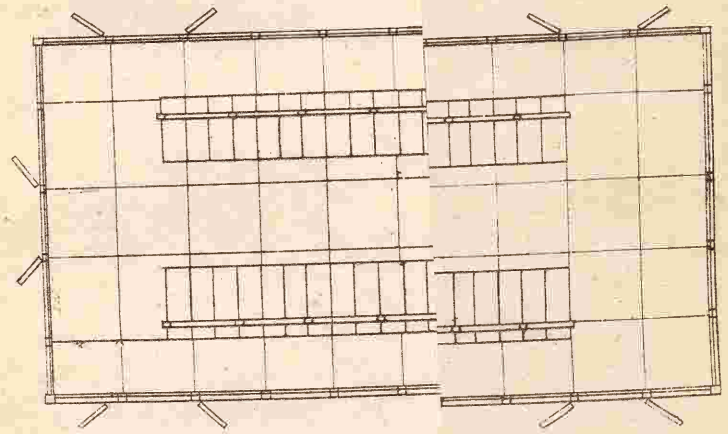


第四圖平面

(イ) 繰絲釜
(ロ) 繰絲釜の袋
(ハ) 濕氣除
(ニ) 繰糸釜
(ホ) 沸湯器
(ヘ) 水槽
(ト) 繰汽管兼蛹入
(チ) 蒸汽大管
(リ) 蒸汽小管
(ヌ) 水管
(ル) 顔扱き目鏡



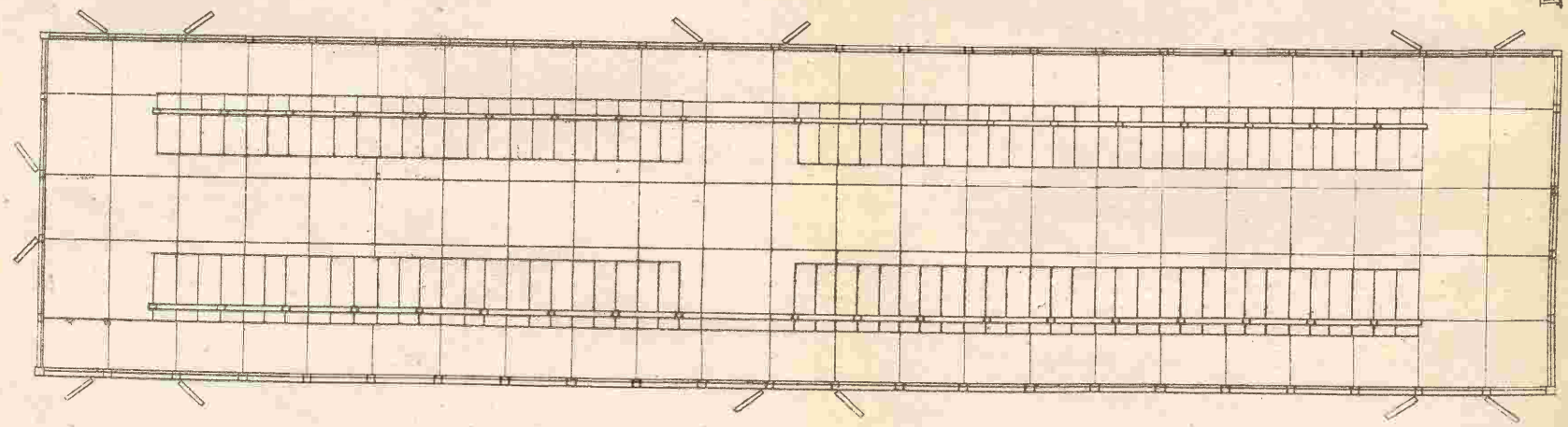
第五圖



づ是から拵るものとせしで實用ま絲工業者ま製絲機械をものなれはを模範とし

第五圖

百人繰り繰絲所割合の圖



格ハ幾許圓位を要するや詳悉承り度し蠶史先づ是から拵らふる機械も價ヨ構ハゼ良巧なる機械を造るものとせば立派なるものも出來まするが價格を廉ヨして實用ヨ適するものを造るが資本の乏しき目下の生絲工業者ヨハ尤も必要と思ハれます此の機械ハ伊佛の製絲機械を折衷したるものヨして木銕を交へ作りたるものなれば價格も廉ヨして完全のものなれば先づ是等を模範とし製作せば宜からん

又其建築費ハ概ね左の如くであります

百人繰り製絲場建築費豫算

一金壹萬六百四拾四圓　　總高

内譯

金千五百圓　蒸汽鑵其他金物ヨ属する分壹式
金七百圓　木材ヨ属する分壹式
金三百圓　機械据付諸費
金百圓　殺蛹器械壹式
金百圓　水車
金百五拾圓　溜池一ヶ所漉水器とも
金七百圓　貯繭器七千枚但壹枚金十錢積り
金百圓　試驗器械各種

小以金三千六百五拾圓　機械ヨ属する分

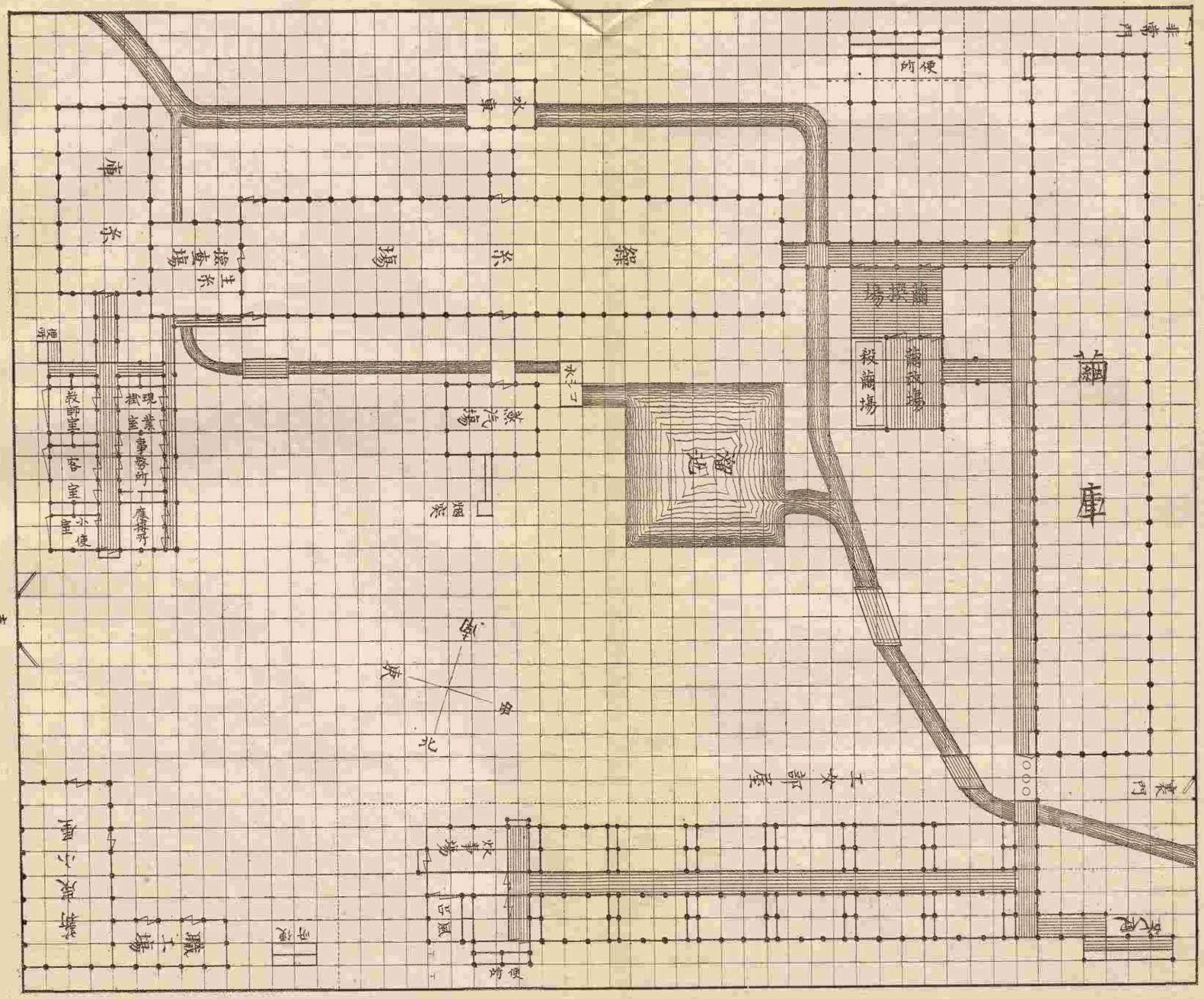
金千九百五拾圓　繭庫壹棟二階建瓦屋百五拾坪但壹坪ニ付金拾三圓積り
金千貳百圓　繰絲場壹棟平家百二十坪但一坪ニ付金拾圓積り
金千三百五拾圓　工女部屋壹棟平屋百三十五坪但一坪ニ付金拾圓積り
金六百四拾圓　絲庫壹棟二階家三拾貳坪但壹坪ニ付金貳拾圓積り
金四百四拾圓　事務所壹棟平家四拾四坪但壹坪ニ付金拾圓積り
金百六拾圓　撿絲場壹棟平家拾六坪但壹坪ニ付金拾圓積り
金四拾八圓　蒸汽鑵室壹棟平家六坪但壹坪ニ付金八圓積り
金百六拾圓　撰繭所壹棟平家廿坪但壹坪ニ付金八圓積り
金四拾貳圓　水車室壹棟平家六坪但壹坪ニ付金七圓積り

金四拾貳圓　殺繭室壹棟平家六坪　但壹坪ニ付金七圓積り
金六拾圓　職工小屋壹棟拾坪　但壹坪ニ付金六圓積り
金百九拾貳圓　炭薪小屋壹棟三拾二坪　但壹坪ニ付金六圓積り
金八拾圓　便所五棟拾六坪　但壹坪ニ付金五圓積り
金貳百貳拾四圓　廊下五拾六坪　但壹坪ニ付金四圓積り
金三拾圓　表門并ニ裏門　但表門貳拾圓裏門拾圓
金三百七拾六圓　周圍の藩籬百八拾八間　但壹間ニ付金貳圓積り

小以金六千九百九拾四圓　家屋建築ニ屬する分

先づこんなものですそこで其場所の面積ハ凡そ二千百餘坪もあれば十分ニ經營も出來る譯です尤もこれハ是

百人繰り製絲場経營圖


表門
倉庫
生糸置場
繰糸場
繭置場
繭乾燥場
繭蒸場
繭倉
繭置場
繭殺場
繭殺場
繭乾燥場
繭倉
繭置場
繭
便所
便所
便所

非かうせねばならぬと云ふ譯でゝないのですが御參考まで迄といひながら畧圖壹枚を取り出してぞ示しける

客　成程地坪も是だけあれば十分で御座りませう成程斯の樣ゝ出來ますれば申分ゝ御座いませぬが何分費用が嵩みます故思ひながらも屆き兼ねる儀で御座ります蠶史

イヤ此豫算も余輩の考案でゝまだ〳〵不充分の感おがありまするが我邦目下の有樣まてゝ到底さう十全のものを造り出す譯ゝ參らざる事情もあれば夫是と斟酌して以上の豫算とお示し申たのです尤も百人繰りの機械ゝ此位も金を掛けましたならば前ゝお示し申たる通り

のものが出來ますから管理者其人と得て指圖が行届き工女が正直に蔭日向なく能く働くときハナンノ伊佛の生絲に劣り申すべき必ず良き品位の生絲が出來ること請合で御座るさりながら管理者其人と工女が熟練でなければ如何に機械が良好なるも良き結果ハ得て望むべからざるとですイヤ〳〵管理者と工女が熟練なるにもせよ彼の生絲の前身なる製造素品即ち繭があしくしてハ好き結果を得ると難し何様かぞへ立てると際限もなく種々の關係が起りまするが管理者即ち工場長なる人物と工女が一番肝腎で御座る今これと軍隊に喩ふれば

工場長ハ大將で工女ハ兵卒であります故に大將たる工場長が學術經驗に富み兵卒たる工女が技術に熟して能く場長の號令を遵奉し恰も人体の手足と意の儘に働かすると一般ならざれば良き仕事ハ出來る筈なし好し此大將と兵卒ハ孰れも申分なき精練の一隊なるも御維新時代の「ゲベル」や「ミニール」の如き不完全なる火器即ち機械と不十分なる彈藥（繭即ち）とを以て鬪ふものとせば其勝算の期すべからざるや明かなり然るに此精練なるものどもに授くるに「アームストロング」製なり「クルップ」製なりの精良なる火器と彈藥とを以てし敵と相鬪ふに於て

ハ勝算あるや疑ひなかるべしデスカラ何んでも調練ハ能くせねばならぬ事ですゝ成程して見ますると製絲の工業ハ先づ十の七八ハ工女の仕事で機械の働きハやうやく二三分位と見做して宜しいのですナ蠶史左樣サ先づさういふたものです然りながら其二三分の機械の働きが只今も申した通りで人力でハ中々行届かぬ所ですから二者相須て始めて全きを得ると申さねばなりますまハ兎角ハ世間の工業家即ち製絲を業とする人達ハ動もすると資本が乏しくして思ふまゝハ改良が届かぬとかイヤ利益がないとか云ふて概ね罪を有形資本ハ歸する

もの十中の八九ハ居れり如何ハも有形資本即ち資金の不充分なるハ工業者ハ取つての一困難ハして十分なる成績ハ得て望むべからざるものとするも敢て否の字を擔ぎ出す程ハもあらざれども唯り有形資本の欠乏をみ喋々して無形資本即ち工業者の勞力如何ハ至りてハ恬として顧みざるもの多し何んと偏頗の譚でハありませぬか只今貴君が述べられし如く工女の仕事が十中の七八を占むる譯ですから無形資本の完全なるか將不完全なるかを能く〳〵吟味し竭して彌〳〵有形資本の不足なるより利益がない改良が出來ぬと申すとなら蠶史

豈敢て否の字を言ハんや然るゝ無形資本なる工場長や工女工男等の熟否と勞力如何とは棚ゝ擧げ措き單ゝ之を有形資本ゝのみ歸するが如きハドウでも否の一字ハ獻ぜざるを得ざる次第で御座る手短かゝ申せば工業者が自身の力行如何ハ顧ぎみして資金の闕乏ゝのみ不利を歸すると不當なりと申す義で御座る御承知の如く製絲の工業ハ多くの固定資本と要する譯でありますが此多くの資本と要したる機械の働きハ十中の二三ゝ居ると想ハねばならぬ場合なるゝ其働きの七八分と占むる無形資本なる勞力社會ゝ油斷がありてハ夫の固定資本

の償還ハおろか流動資本も次第ゝ缺乏を告げざるを得ざる譯ですが何んと遺憾千萬でハ御座りませぬか斯樣な有樣でハ本邦の製絲工業も振起する目途ハ御座りませぬから何ハ兎もあれ今日の急務ハ工業社會の腦味噌と洗濯して正當なる工業社會と造り出すのが肝腎かなめと存ぜます客成程へエー成程序ながら伺ひますが元來製絲場を建設するゝハ如何なる場所を撰ぶが宜しいの御座りませうか左れば此ですが該工場を設くるゝハ種々の關係がありますなれども之を約するゝ地形と風俗の二點ゝ外ならぎ此二點ゝハ豫め大ゝ注意を要さねば

ならぬ事ですが何とか地形風俗と云ふとならば蠶史に之に答ふるに左の分類法を以てせんとす

相地
- 地形
  - 運搬
  - 燃材
  - 水質
  - 衛生
- 風俗
  - 産繭
  - 物價
  - 傭工
  - 人氣

右等の諸項に注意を加へて着手するときに決して不都

合なき筈かり然るに是等のとにかく構ひなさらぬ無闇矢鱈に規矩も揃ぬガタ〳〵機械を造らるゝに閉口で御座る客成程と云ふとき柱漏已に二時を報せり客に再會を約してぞ歸りける

第十回　殺蛹法の得失を論じて貯繭の事に及ぶ

客早天より來り面會と傳ふ蠶史蹶起して盥嗽を了り客と一室に揖して面接すれば前霄の一客他の數客を拉ぎ來りて殺蛹法貯繭法、撰繭法等につき蠶史の經驗説を要望めり蠶史曰く善哉諸君の問ふと抑繭の良否に蠶種と其育法とに因り生糸繰製の多寡と其品位とに原繭の性

質及ひ殺蛹貯繭の方法に基するものなり然るに世の養蠶家たるもの飼育中に頗る注意を極むると雖も既に繭と成るを見れば早已に結果と全ふしたるものと合點し殺蛹の術貯繭の法に至りては之を省みざるもの多く竟に天賦美良の繭質をも傷ひ數旬の勞劬をして一朝水泡に屬せしむるが如きことが多ひのであります諸君も御承知の如く元來養蠶の目的は製種にあらずして製絲にあるのでせう尤も製種に取りても直さき世嗣あれば健全無病の世嗣を得るを以て養蠶の目的とせんなら難し蓋養蠶家の目的は良繭を收むるにあり良繭を收むるの目的は良糸を製するにあり良絲を製するの目的は良帛を織るにあり良帛を織るの目的は需要者に滿足を與ふるにありと謂ねばならぬ譯合ですから此法の適否を講究するは蠶絲家の經濟上欠くべからざるの要務であります故に私が多年實驗講究せし所の大意を順次にお譚し申すべし

第一　生繭の取扱ひ及ひ一番撰別の事

凡そ養蠶家の繭を簇より掻き取るのは氣候の溫冷にも關係あれども大概五日前後を以て通則とす故にこの期を違へず簇より掻き下し成るべく丁寧に取扱ひ蠶籠又

ゝ繭入蒸籠等ゝ薄く擴げ清涼なる所の蠶棚若しくゝ別ゝ設けある乾し棚等ゝ安置し而して片端より下等繭を撰出すべし下等繭とゝ俗ゝ死籠なと稱ふるものゝして蛆害其他の病害ゝ罹り十分ゝ繭を作り得ざるもの又ゝ蛹潰れて汚汁の繭層ゝ浸出したる等の類あり此等の撰別ゝ掻き下し後三四日間ゝ仕終上等の分ゝ殺蛹所ゝ送りて殺蛹せしめ撰出したる下等繭とは速ゝ繰製せしむべしこれを一番撰別と申すのであります此撰別とあさぎして殺蛹ゝ取り掛るときゝ下等繭より浸出したる汚液の爲ゝ良繭と汚し品位と落すのみならず遂ゝゝ其汚

汁が良繭ゝ浸み着き繰製するゝ方り解舒澁難、絲量減耗の恐れあり加之ならず下等繭ゝ數旬を經るときゝ繰製ゝ非常の困難を來し下等繭相當の絲量も得られず品位も一層下劣とあり且又繭の内より「ダールリ」（方言ズミ又はカヒトキツチトル）ツボムシなど云と云ふ蟲繭層と穿つて出で殼繭と一般繰製し得べからざるゝ至るものなれば速ゝ繰絲せしむるか得策であります

又製絲家が生繭を養蠶家より買入るゝ當りてゝ豫め清涼なる場所ゝ架と設け置き殺蛹ゝ用ふる蒸籠等ゝ薄く撒布し務めて清涼ならしむるが宜しゝ元來蠶蛹ゝ上

簇後十五日乃至二十日までゝ其形を蛾ゝ變ぜざるが通例でありますからそれを目途とおし期を誤らぎ殺蛹するが肝腎で御座る(蠶蛆の繭層を穿ちて出掛るゝ上簇後大概十日前後と知るべし)萬一此時期を失し已ゝ發蛾するゝ及んでゝ到底繰製するとゝ出來ぬものあり好しや發蛾ゝ至らざるも時季既ゝ發蛾ゝ迫るときゝ蛹の蛾ゝ化するが爲め幾分か亞兒加里性の溶液を繭層ゝ浸潤せしめその液の付着せし部分ゝ恰も練りたる絹の如くれと湯中ゝ投ぎれば柔輭ゝして綿の如し爲ゝ解舒澁難繰製し能ゝざるものあるゝ至る宜しく注意ありたきもの

ですそこで尚ほ注意を望むところゝ生繭運搬の事ですが極めて手近の場所なれば格段なる注意もさまで必要あきが如くなれとも三里五里と隔りたる場所ゝ生繭を輸る場合ゝ儘あるとです尤も十里二十里と懸隔したる所より遠く輸るゝゝ殺蛹の後ゝ於てするが當然でありますす孰れゝもせよ右等の繭を運送するゝゝ荷造の點ゝ宜しく意を注ぎ運搬中蒸熱の爲ゝ繭を傷損せざるやう致さねばならぬ其荷造の方法ゝ凡そ壹石入位なる麻袋を作り繭の種類を區別して其内ゝ詰め込み俵の中央ゝゝ竹を以て造りたる筒籠の直徑凡そ二寸許りゝして長

さゝ袋の丈ゝ適ふべきもの壹箇若しくゝ二箇を程能く入れうれ.より大氣をば通せしめ蒸熱を掃ふの便ゝ供ふべし而して繭と入れたる袋ゝ極めて目の荒き丈夫なる竹籠ゝ納れその籠の兩端とは密包せゞ圓周のみと莚ゝて包み運送すると法とす若し是等の點ゝ注意と怠るときゝ蒸熱の爲ゝ繭の光澤ゝ勿論絲力と絲量とと減損するものですから製糸家たるもの否生繭と取扱ふ人々ゝ心得べきとで御坐る

第二　殺蛹法の得失及び便否の事

前ゝもお譚し申せし通り殺蛹のとゝ蠶絲家の經濟上尤

も大切の事柄ゝて格段なる注意を要するのです抑此殺蛹法と施すの期ゝ上簇の後十二三日目位を以て適當とす故ゝ製糸家ゝ此期と誤らざるやう致さねばなりませぬ偖そこで殺蛹の仕方ですが是ゝも甚だ種類の多きとです先づチョット指と屈めて重なるものと擧れば蒸殺、燥殺、蒸燥併行殺、薫蒸殺、滾湯殺、日曬殺等の各種でありますす今此各種ゝつきて得失と論ぜれば蒸殺ゝ時間と短うして多量の繭と取扱ふゝ便かれども殺蛹後の手入方が不行屆かるときゝ黴と生ぜるの憂燥殺等の比ゝあらぜ又蒸汽と時間の適度と誤るときゝ繭中の蛹燃爛して液

汁浸み出し繭層を輭解し絲質を傷ふの虞なきを保せず」

燥殺ハ繭中ニ含有するところの水分を減し黴を防ぐニ利ありと雖も乾燥の熱度を低うし時間を長うするニあらざれハ繭層の膠質を焦き着け絲質を害ひ解舒を悪うし糸量と糸力を減耗するの恐れあり」然れとも以上の二法ハ熱度と時間を誤らぎして手入の行き届くときハ障害少なきを以て稍良法と謂ふて可あり

蒸燥併行殺ハ一室内ニ火熱と蒸汽とを併通して蛹を殺すの方法であります此法ハ伊佛等の國ニ行ハれたりしが近年本邦ニても彼ニ摸倣しこれを行ふもの年ハ一年

より多きニ至れりこれハ蒸殺の濕潤ニ失し燥殺の乾燥ニ過まつの弊を除かんが爲め該二法の中庸を取りたる方案ニして頗る良法なり此方法を以て殺蛹したるものハ恰も天然の氣候を以て乾燥したると一般ニて聊かも絲質を傷ふことなき良法なり

薫蒸殺ハ濠國のフリイドリヒ、ハーベルランド氏の發明ニ係るものニして夫の硫化炭素てふ藥品を薫蒸し此毒氣とは繭中の蛹ニ觸れしめ毒殺するのです此方法ハ流石ニ學者の考案だけありて絲質を傷ひ絲量を減するが如きことなく頗る良法なるニ似たり去りながら此法ハ時

間を多く費すと藥品を用ふるが爲に多額の繭を取扱ふ製糸家や智慧の足らざる田舍の養蠶家などゝ到底普くこれを行ハしむること難かるべし何せとならば夫の藥品なる硫化炭素てふものハ毒物なれども人間にハさまで的面に害毒を及ぼす程のことなし然れども萬一取扱人の油斷より此藥品を入れたる玻璃壜等を破壞するが如き過失あるときハ火を失するの恐れあり元來この硫化炭素と申す藥品の氣ハ空氣よりも重くして上騰することなく横に靉靆びくの性あり故に此氣が他の火氣に觸るれば恰も火藥の道火と一般條ち發火すると申す

ことですから田舍の小さき養蠶家などゝハ容易く實行しがたきものであらふと考へます

滾湯殺ハ銕葉を以て筐若しくハ筒形の器を造りその器に適當せる布袋を製して繭を入れ釜中の水を沸騰せしめ其内に該器を投入して蛹を殺すの仕方なりこの法ハ器械の造構を善良にし蒸殺の理に基き蒸汽をば直接に繭に觸れしめざるやうに致し而して布袋をば蒸籠に改め該器を湯中に沒入せゞ釜上に安置して蒸熱の爲繭中の蛹を殺し得るの方法となさば小さき養蠶家にハ便利なる方法と想ハるゝなり

日曬殺ハ本邦支那等ハ古く行われ來りたるものなれど
も此法ハチヨツと考えると器械も入らぎして至極輕便
なるものゝ如し然るハ是ハ元より日曬のことかれば雨
天ハハ勿論行われ難し加之からぎ此方法ハよりて殺蛹
したるものハ繭の色澤を變せしむるのみからぎ繰製す
るハ當りて解舒あしく絲量も糸力も他のものハ比すれ
ば劣れるが通例です故ハ同ぎ繰法ハてもこの原料より
製したる生絲ハ他の適當かる法を施したるものハ較ぶ
れハ常ハ百斤即ち十六貫目ハ對する價直ハ二三十弗ハ
差異あるものです先づ斯樣かる譯合ですから日新の今

日ハハ行ハぎるやう致したきものです
農桑要訣ハ繭以鹽藏之蛾不出此南方淹繭法用甕頗多云
々又殺繭法有三一曰日曬二曰鹽浥三曰籠蒸籠蒸最好と
あり又農政全書ハ鹽著於繭到底浥濕今人只於甕中藏繭
別用紙或箬或荷葉包鹽一二兩置繭上亦可但只須甕口密
封不走氣耳何必用鹽泥乃可かど云へるとありつれども
是等の方法も今日とありてハ取ハ足らぎる陳腐の古法
とぞ知られたり支那も日本も養蠶國でありかがら早く
ハこゝらハ氣がつかぎりしハ愚かりける次第で御坐る
偖斯くの如く殺蛹法ハも數種ありてその得失も又前ハ

陳べたる通りですが蠶史ハ蒸燥併行法を以て最も良好なるものと信ぜるなり然れとも此方法を行ふハ器械の裝置ニ費用多く掛りて一小養蠶家が數石の繭を取扱ふニハ不釣合なるより廣く世ニ行ハれざりしが此方法ニ基き取捨折衷して便利なるものを案出せば費用も少なく成繭固有の艶色をも失ハざる殺蛹の出來得べからざることのあるべきニと種々ニ考案を運らしたるニ其費用も多からぜして實際各地ニ行ふことの出來得べき輕便なるものを案出せり是ハ一室ニて蒸殺し了り而る後直ニ乾燥室ニ輸り繭の中ニ含みたる水分を除き貯藏

費用も多からぎして實際各地ょ行ふことの出來得べき輕便なるものを案出せり是ハ一室ょて蒸殺し了り而る後直ょ乾燥室ょ輸り繭の中ょ含みたる水分を除き貯藏

第一圖側面二十五分の一

殺蛹器械圖解

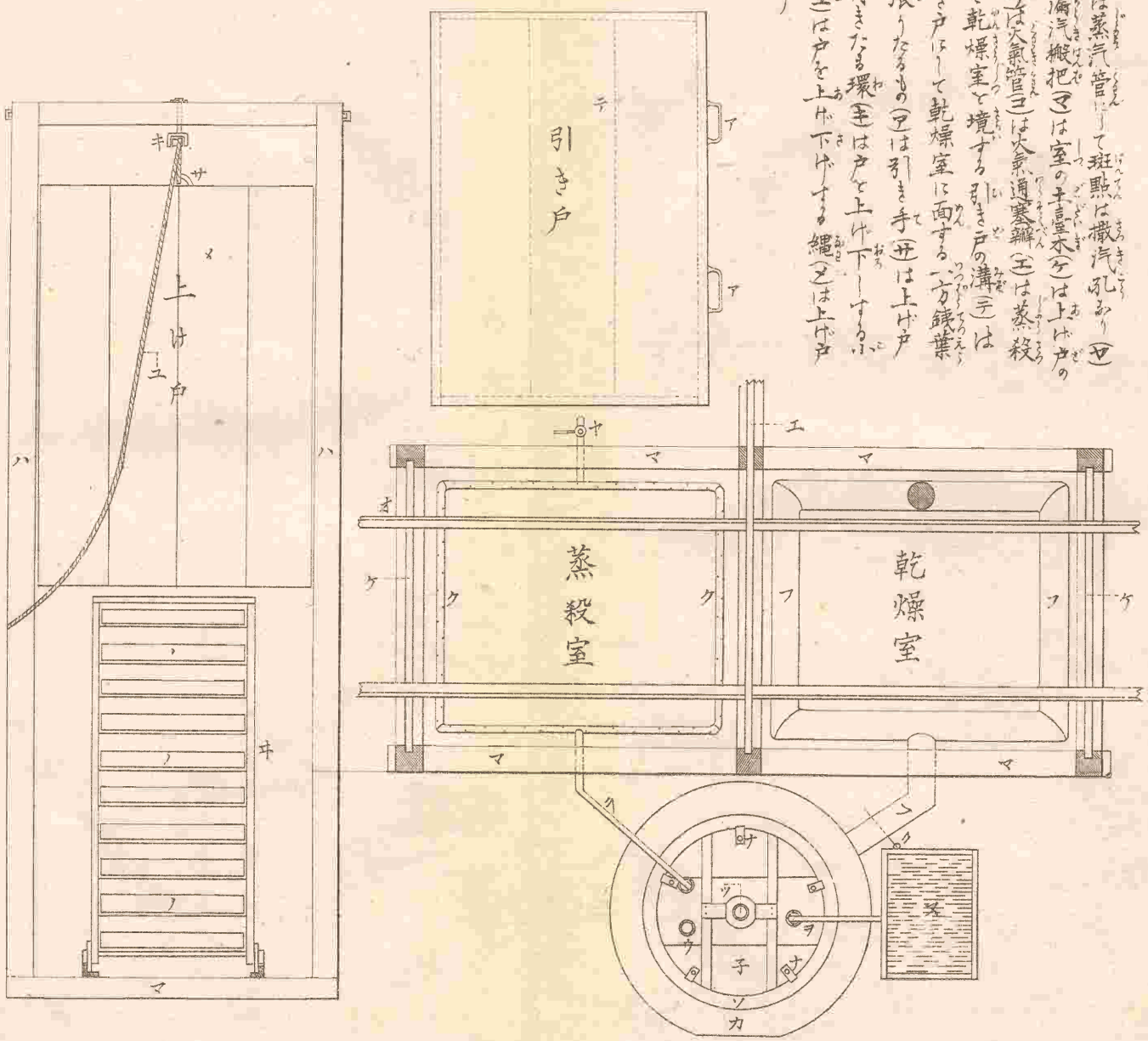
(イ)は蒸殺室にして内は板張り外は壁ありロは厚板の屋根ありハは柱(ニ)は寒暖計(ホ)は漏氣筒(ヘ)は漏氣筒下に點線として示したるところの辨を開閉する繩なり(ト)は蒸気室と乾燥室との境界柱ありチは乾燥室にて室の内外とも壁ありリは烟突(ヌ)は給水箱(ル)は給水管(ヲ)は給水搬把(ワ)は火爐(ヨ)は火爐に薪を供給する口(タ)は火爐の戸(レ)は火爐より落つるところの灰を除き且この戸を開閉して爐中に空氣の進入を加減する所ありソは湯金(ツ)は水量試驗器にして點線として示したる部分釜中に浮み居る裝置ありネは湯釜の蓋(ナ)は釜の蓋を緊着したる器(ラ)は蒸氣管にして管の直經八分ありムは蒸氣通塞搬把(ウ)は漏氣管(ヰ)は棚車にして繭を入れたる蒸籠を載せ室内に輸るところの器ありノは蒸籠にして緣は白朴の木底は割竹ありオは鎭軌にして繭を載せたる棚車の軌道ありマは室の土臺木フは火氣管(ヲ)は火氣通塞辨

第二圖平面 二十五分の一

第二圖平面

二十五分の一

(ク)は蒸汽管にして斑點は撒汽孔あり(ヤ)は漏汽綴把(マ)は室の主臺木(ケ)は上げ戸の溝(フ)は火氣管(コ)は火氣通塞雜(エ)は蒸殺室と乾燥室と境する引き戸の溝(テ)は引き戸にして乾燥室に面する一方鋏葉を張りたるもの(ア)は引き手(サ)は上げ戸に付きたる環(キ)は戸を上げ下げする車(ユ)は戸を上げ下げする繩(メ)は上げ戸なり



ま便ならしむるの新案なり則ち此圖で御座ると取り出してぞ示しける客へエー成程

第三　殺蛹の溫度及び時間の事

それから殺蛹の溫度と時間のことですが是ハ其器械の造構とその繭の質とま由りて差のあるものです先づ蒸殺まつきてお譚し申さば華氏の寒暖計百四十度乃至百五六十度の熱度を平均その室内ま保たしむるときハ四十分間乃至五十分内外まして蛹ハ死ま至るものです又溫度と平均百九十度まも昇らしむるときハ時間纔ま五分内外まても繭中の蛹を斃すま足るものですが是ハ完

全なる蒸汽鑵を備へたる場所でなければ行われ難き事
です尤も斯く猛烈なる熱度を用ふるよりは宜しくその度
を過らざるやう注意するが肝要です
又燥殺の前よりもお譚し申せし如く餘り熱度を高むるの
あしきことですから度を低うして時間を長ふするが安
全と知りたまえ去りながら華氏の度よりて百五十度内外
よりまで昇らしむるも害なし故に先づその器械の造構に
注意し平均百五十度内外の熱度を保ち得るものとすれ
ば五十分乃至一時二十分位にして殺蛹し得るものなり
但し室内繭棚の上中下とも平均を得るやう深く注意を

加ふるが必要で御座る
蛹の生死を檢するに種々の方法あり桑葉或は椿葉なを
を繭と共に其室内に入れ置きその葉の萎みて枯んとす
るを度となし繭中の蛹死せりとなすものあり又冷水を
茶碗若しくは小鉢なを汲み之を繭と同時に室内に入
れこの水の湧きて指を入るゝに耐ゆると耐へざるとを
度となし檢査する簡易法もありつれども是皆確實なる
方法にあらず蠶史の經驗上最も確實ありと信ずる檢視
法は殺蛹室内に一トツの小さき引出しの蒸籠を設け置
き其内に硬質の繭と同功繭數顆を他の繭と同時に差し

入れ置き而して殺蛹より取り掛るあり已より適當の時間到來せば前の引出しより撿査繭を取り出し二三顆を截斷して蛹の生死を視察し尚ほ其蛹の腹部を剖きて胃腑と撿すべし蛹の未だ死せざるときゝ軟らかゝして液体と一般なれども其の既に死するに及んでゝ漸く固まり流動せざるものです故に一見して之が生死を判別することが出來ます然れども此固まり加減が度でありますから其適度を過らざるやう一両度づゝ之を撿査するが宜しい若しその胃腑を小刀にて両斷するにその切れ口が餘り滑らかに奇麗に見ゆるときゝ其度の稍々過ぎたる

ものと知り賜え

第四　貯繭手續の事

既に殺蛹の前に於て外部に顯れたる下等繭をば撰り出したるも尚ほ殺蛹施行中蒸熱のため内部に潜れたる死籠かどの壞れて繭の外部に浸み出すことあるものあり是等のものゝ良繭を損傷せしむるものなれば貯繭に先ち之を撰り出し此撰出したる繭ゝ直に繰糸せしむべし是此撰別を稱して二番撰分と申すなり

凡そ繭を乾燥するにゝ成るべく大氣の流通良き場所に架を設け置き繭入器に繭を薄く擴げて架に差し置くと本

式とす尤も是等の設けなきときハ蠶架蠶籠等を代用するも妨げなし只注意すべきハ攪拌のとき蠶莚なぞハ粗ゝして滑らかならざれば繭層を傷めざるやうゝ取扱ふべし又繭ハ累なるも二三寸を超えざるやうゝなすを良とす若し厚きときハ乾き方あしきのみならず攪拌の際翻るゝの憂ひもあり又攪拌し方遍からずして殖を生ずるの恐あるものなり

偖繭を攪拌するの度數ハ殺蛹後凡そ二週間位ハ一日ゝ三回其後の四週間程ハ一日ゝ二回其後ハ能く乾燥するまで一日一回づゝ攪拌するを良とす通例繭ハ五十日内外ゝして全く乾燥するものなり然れども土地と氣候の乾濕ゝよりて亦多少の差違あるべし又その乾燥きたる度を知るゝハ生繭のときの壹升量を記し置き而して已ゝ乾燥たりと認むるときハ壹升量を檢し見ると良とす乾燥繭壹升の量ハ蠶の種類と土地とゝ因りて差あれども大凡生繭の四分の一强即ち簇より下したるとき百二十目の生繭あれば三十目乃至三十一二匁ゝ乾燥するが通例であります而して本邦現時の有樣ゝてハ水桝壹升即ち半粒乘りと稱ふる量り方ゝして乾燥繭の目方ハ二十八九匁より三十八九匁ゝして平均三十三四匁ゝ止ま

れり但し最下等繭ハ取除としてお譚し申すのであります

繭を乾燥するは大氣の流通を善くするハ前にも述たる如くですが決して太陽に觸れしむる勿れ若し太陽の光線直射するときハ夫の日曬法と同ぢく繭の色が淡緇くなり糸になりても光澤なく且繭の半面急に乾き着くが爲めに糸を挽くとき解舒わしく其爲めに繰湯の熱度を增さねばならぬ場合となり遂にハ生絲に小毛と生ぢ絲力も弱くなるものですから茲にハ厚く注意を加えねばなりませんで

繭を乾燥するは當て大氣を通ぜるが爲窗戸を開くの必要ハ勿論なれども室内え濕氣の侵さゞるやう厚く注意を加ふべし雨天の日ハ決して窗戸を開くべからぎ萬一雨天の續きて室内に濕氣の侵したると認むるときハ火爐に火を入れ濕氣を除くべし倘し繭貯え所の設けなくして人の住居と同所かるが如き場合に於てハ暑さの頃火爐を入るゝの都合にも參らざるバけれは其際ハ殺蛹器械にて乾燥せしむるも妨げなし然れども火熱をして成るべく強からざるやうにおすべし此際の熱度高けれは繰糸するに當り解舒わしきものかれは華氏寒暖計の

百度内外を目的とし成るべく火熱の直射を避くべし
以上の手續をおこし全く十分に乾きたるを認めかば之を
麻袋又ハ澁紙の袋に納れ口を封ぢその種類と石數量目
及び等位を記したる小札を付け之を濕氣及び鼠害なき
室に貯藏すべし此繭入袋ハ各自の便宜によると雖も凡
そ壹石五斗位入るゝを通例とす又袋入の繭を貯藏する
にハ室内の床より壹尺五寸位高く丸木にて棚樣の臺を
作り其上に積み累ね置くを良とす尤もその棚の左右前
後とも見廻りの出來るやうになすべし若し袋に入れた
る後霖雨等の打續きて濕氣室内に侵入するが如き場合

ありて室内の空氣を乾燥す必要あらば前述の手續きを
行ふが宜しゐので御座るそれから今一トツ序ながら申
陳べ置くことありそハ繭につく蟲のことですが此蟲に
も數種ありて保存中兎角に徒らを爲したがる奴です此
事ハ前の一番撰別の篇にもお譚し申たる如く害蟲のう
ち重なるものハ伊太利語の「タールリ」即ち方言「カッポ蟲」
又「ズミ」など稱ふるものゝして其始繭中より爛死せる蠶
俗ゝ死籠と云ふ病蠶或ハ病蛹等ゝ寄生し漸次ゝ良繭を
侵し而してその蛹体ゝ營養を資り蛻皮數回ゝして肥大
となりその大さ恰も二齡の蠶兒と等しくして其色黄褐

なる毛蟲なり此蟲終に蛻皮して蛹となり羽化して復害を蠶繭に加ふるものです

又方言「ダニ」に類似の蟲あり是亦蠶蛹に寄生す此蟲に至つて微小なる淡白色の蟲にして時として一蛹中に數百頭を見ることあり之も營養を蠶蛹に資り漸次に繁殖して蛹の表皮のみを殘し他の餘さず喰ひ盡し殼繭の如く良繭を輕からしむ然るときは外貌良繭なるも内容空虛なるを以て繰絲するに當り終には釜底に沈みて繰絲することを能はざるに至るものです以上の害蟲を除くに種々の説あれども實驗上一ッも取るべき説なかりし蠶

史の考案には先づ前に申陳たる如く一番二番の撰別を善良にし彼の寄生を豫防するを緊要とす而も尚ほ此害蟲の寄生を認むるに於ては務めて撲殺するが宜しいと思ひます先づ大畧右の通りですから術の蘊奥は諸君の御自得にお任し申ます客成る程と會得しそれより交互に質疑をなしてぞ去りにける

第十一回　撰繭法の必要を論じて纖維試驗の方法に及ぶ

客去りて旅窓轉寂然たり起つて柱漏を見れば既に三時を過ぎたり匆々行裝を理めて廣島の逆旅を出て車を馳

せて宇品の港に向ひ去る須臾にして達す吉川と云へる汽船宿に投ぜ汽船の發するを待こと少焉ありしが手代來つて乘船と促す蠶史急しく靴を穿ち吉川なる汽船宿を出て丶艀に乘り汽船に投ず此汽船も例の如く上中下の三室とも畳を敷きたる雜居室なりけるが乘客ハ例に比すれハ少なしと申すことにて室内頗る穩かなりき蠶史ハ前日より來訪の人多かりしため講話と應接とに疲勞し閑座忽ち睡眠を催せり其うち間もなく汽笛の鳴るありその聲例に依つてピイーヒユー焉たりしならん蠶史ハ之を夢の如くうつ丶にて聞つ丶いつか眠りにそ

就きぬ海路ハ常より靜かにして船の行くこと疾く翌日の夕景定の時刻よりハ一時間程も早く神戸港に着きにける夫より艀にて上陸し例に從つて蓬萊舍に泊しその翌日横濱に向ひ出驅の汽船近江丸に打乘り歸途につきぬ此汽船に乘り合の乘客ハ近江の紳商なりしが近年頻りに蠶糸の改良に力を用ひ一ッの製糸場を設立し身自ら之が業務を研究致し居る者なりと聞つるに其扮裝を見れば更に紳商らしくもなく至つて素樸にして帽も時計も羽織も帶も東京横濱等に於て外貌を飾るゑせ商人の比にあらぎ蠶史心のうちに思ふよう兎角地方にて

紳士とか紳商とか仰がるゝ人ゝ概ね事業を傭人任せにして顧みざるもの多く十中の八九ゝその人を得さるが爲に敗を取るが本邦現時の通患なり然るに事こゝに出でゝして躬自ら之が業務に當りその道に熟達の上これが規模を大にし業務の皇張を謀らるゝゝ流石に近江の紳商にて末頼母敷こそ覺えたり古諺に近江の千両棒と申すことを聞きつるが是を之れ申すならんと感嘆に時をは移しける時に紳商も徒然の餘り何やら冊子を播き見てありしが之にもまた倦たる有様にて蠶史に向ひ貴君ゝ東京に御出ですかと尋ねける蠶史左様です先頃より

中國筋へ旅行致し居りましたがやうやく今日東京に歸る事になりました紳商御商用ですか蠶史イヤ私ゝ蠶糸の用向で度々各地に出掛るものです紳商へゝヱ夫ゝ妙です私も蠶糸業にゝ近頃從事致し居るものですが丁度好きお乘合て御座りまする然らゝ追〳〵生糸のお譚を致しませう蠶史夫ゝ面白ふ御座りませふ紳商私ゝまだ業務に馴れませぬゆえ兎角骨折程ゝ良き生絲が出來ませぬ已に此頃横濱の商店から商館の檢査によれば何分纖度が揃ゝぬから貧ろと申して參りました且又私の生糸ゝ纖毛立とか申して中〳〵私共の想ふより安直に直を付けられ

ました私の製糸場ハ建築以來日が淺ふ御座りますれど工女ハ稍々上等のものと傭ひ入れ置きますし纖度の檢査も嚴重ニ致しました積りですが何分甘く參りませぬ因て御尋申ますが纖度のよく揃ふて纖毛の生ぜざるやう致すニハ如何致しましたら宜しう御座りませう何卒よき方法と伺ひ度ものです蠶史ハイ私も甚だ未熟ものゝて十分なる良法をお譚申す譯ニハ參らざれども數年來の實驗ニよれば第一ニ工女が揃ふて業務ニ熟し一人たりとも不正直ニ業を取るものなきときハ纖度ニ不平均を生ぜるの憂ハ先づ無いと申しても可なるものです去

りながら此纖度ニ最大の關係を有する者ハ原繭であります。ますから仮令工女ハ熟練でもかの原料なる繭の揃ハざるときハ何分纖度ニ不平均を生し易きものです加之ならぜ繭質が不同なるときハ類節を生し絲力をも減耗するものであります故ニ繭の撰別ハ製糸上太だ緊要の事て御座る然るニ本邦の製糸家ハ大概之を撰むニ粗おりその甚しきニ至つてハ措て顧みざるもの尠からぜ是を以て精粗混淆爲ニ固有の美質を失ひ品位を麤惡おちしむるニ至る實ニ嘆ハしき限りで御座る紳商ハ仰せの如くありつらん私もこの撰別の點ニつきてハ稍々注意致

させ居りますれども元より未熟のとなれば未た一定の方法順序相立ぎ所謂五里霧中ょ彷徨し居ると申すやうなる譯柄ですから何卒完全なる方法と御教示ょ預り度し

蠶史ハイ然らば先づ伊佛兩國ょ於て製糸家か行ふところの撰繭法と私が實地經驗したる所のものとを是から順を逐ふてお譚申すべし

先づ繭を撰み別くるょゝ繭層ょ纏綿せる繭衣俗ょ毛端と申すものと除くべし之を除かざるときゝ繭層滑らかならぎして其性質を鑑別するょ不便なるものです加之ならぎ撰別の後これと繰絲所ょ送るときゝ之を量りて

各工女ょ渡すょも之を受取りたる工女が緒を索むるょも不便なるものおれゝなり偖繭の性質を撰別る目的ゝ如何なる點ょ於てあるかと問ゝゞ良絲を製するょありと荅ふるの外なし故ょ良糸を得んとするょゝ左の分類法ょ隨つて撰別せざれば到底良糸を製する譯ょゝ參らぬものと知り賜へ

第一色
- 金黃
- 卵黃
- 綠黃
- 雪白
- 銀白
- 淡白

第二形
- 大形
- 中形
- 小形
- 正圓
- 楕圓
- 片尖
- 央緊
- 菱形

第三纖維
綴密―密―粗
綿肌―天鵝絨

第四緊緩
硬緊―稍緊―軟緊
頭軟―胴軟―片軟

第五悪繭
同功―尿暈―鏽焦
脱殼―爛死―殕着
簇着―汚染

即ち以上の五項三十三の節目は隨ひ撰別する所以の主意をお譚申されゝ御會得はなりますまいが第一項の各

色を混同して繰糸するときゝ生絲は斑點が出來まして甚た見えの悪しきものです加之ならす此生糸ゝ撚り合せて染むるも尚は其斑點ゝ消滅せぎして織上けたる織物はまで斑紋を殘すものですから是非とも良き織物の原料とするはゝ之れが撰別を嚴重は致さねばなりませぬ第二項の形狀でありますが元來繭ゝその形狀はよりて蠶の種類を知り其種類はよりて形狀の適否纖維の細大長短とも識別し得らるゝものですから製糸家ゝ是非とも此撰別と爲さねばならぬ事柄です若しこの撰別をおさぎして繰絲せしむるときゝ纖維は細大ありて纖度

揃ハぎ解舒ニ緩急あり繭ニ大小輕重ありて類節を多からしむるニ至る」第三項の纖維ですが此纖維の鑑別ハ最も製糸家の意を注ぐべき點であります若しこれを混淆して繰絲するときハ繭顆亂雜解舒齊しからぎして纖度揃ハぎ隨て類節を生し美良なる生絲ハ出來ざるものです」第四項の緊絃ですが概するニ繭ハ硬きものハ護謨質多く軟かきものハ之ニ反するものですから繰絲するニ際り溫度の平均を得ること能ハす爲ニ往々絲縷切斷して絲量を減耗し質類を多からしめ良絲を得ること能ハざるニ至る」第五項の惡繭ですが之ハ申陳るまでも無く

是非とも撰別ねば良絲を害するものです若し此惡繭を混淆すれば類節も多かるべく生絲の光澤も變すべく或ハ黝色となり或ハ褐色となり到底良絲を製すること能ハさるものです」紳士成程ヘエー蠶皮偖前の如く細密なる方法順序ニ隨ひ撰別したる繭を繰絲する注意を聊か左ニ申述て參考ニ供ふべし

形狀楕圓ニして大ならぎ小ならぎ纖維も細からぎ太からぎして美麗なるものハ溫度を誤らぎして繰製するときハ最も精良なる生絲が出來るものです

大形ニして繭質稍々軟かニ纖維美良なるものを繰製す

るまゝ捜緒と務めて柔らかますべし若し手荒くすると
きゝ絲縷切斷して類と生し又糸量を減ぜ斯の如き繭ゝ
繰絲するまゝ當て餘り熱き湯を用ふへからぜ而して成る
へく湯の中まゝ長く浸さゞるを要す
大形まゝして繭層厚く堅硬まゝして纖維粗らきものあり此
の如き繭ゝ護謨質多くして絲縷の溶け方遲きものあり
宜しく湯の熱度を高くし繰製すると良とす
形狀恰も櫟實の如くまゝして片端或ゝ兩端尖りたるもの
あり之を繰製するときゝ尖端早く解け遂まゝ縺れて類節
を生ぜ易し故まゝ此の如き繭ゝ撰別するまゝ當りて其尖端

を指頭まゝて少しく押込置くを良とす
小形まゝして中央縊れ其狀恰も肥後俵の如きものあり又
卵狀まゝして稍々尖りたるものあり此の如き繭ゝ纖維細
くして護謨を含むこと尠なし故まゝ繰製の時長く湯中まゝ
置かざるを良とす若し濡れ過るときゝ護謨質溶け易く
絲縷脆軟となり爲まゝ良絲と得ること能ゝざるまゝ至る
楕圓形まゝして纖維細密なるものあり此質の繭ゝ繰製す
るまゝ當り繭の回轉齊ふして力强く伸あるものなり繭面
まゝ光澤あれとも纖維粗く恰も天鵞絨の如くまゝして繭層
まゝ締りなきものあり此の如き繭ゝ繰製するまゝ當り湯の

溫度と低くし護謨の溶け過ぎざるやうにすべし若し其度と過るときハ纖毛を生ぜること多くして絲力脆弱となるものなり又他のものに比すれば撚り掛を少なくすると良とす撚掛多きときハ其處より屢々切斷するものなり

繭の上層と中層又ハ中層と下層との間に空隙あるものあり此の如き繭ハ繰製するに當り夫の空隙に水を含むこと速く繰製に困難なるものなり之より繰り得たる生糸ハ光澤稍々可なるも絲質脆弱なると通例とす之を繰るにハ濡し方を少なふして繰湯を熱くし手術を速にす

るの外なかるべし

爛死繭なるものハ久しく日を經るときハ其粘着せし部分より灰白色の黴を生し絲の力脆弱にして繰製し易からす殊にその光澤と失ふものなり又或ハ他日害蟲の寄生して繭を喰破るの怖れあるものなれば高き熱度の湯と以て直ちに繰製すると良とす

蛹斃れ或ハ潰敗して液汁繭層と汚染したるもの及び殖着繭の如きもの繰絲法爛死繭に同し繭層液汁の爲に汚れ鏽色或ハ焦色に變ぜたるものあり之を繰くるにハ先づ繭面の屑絲と除き熱き湯と用ひ始

終溫度ヨリ不同なきやう注意して取扱ふべし此類の生糸ハ灰白若しくハ緇色を帶び美しからざるを常とす故ヨリ繭を煑るヨリ當り五分乃至一匁許りの少量なる「コルゼール」石鹼を投入し其色の惡しきを去り併せて解舒を易からしむると良とす

簇着なるものハ上簇中繭面ヨリ甚しき痕を生ずたるものなり之と繰くるヨリハ高度の湯を用ひ成るべく手術を速ヨリ施すを良とす

同功繭ハ二蠶若しくハ三四蠶の相倚て一繭を結りたるものなり故ヨリ絲縷錯綜解舒一蠶の結びたるが如くなら

ぎして類節を生ずるものなり是を以て細き良絲と繰製すること能ハぎ

脫殼繭ハ紡績糸又ハ眞綿等ヨリ製するを良とす「斯くの如く精密なる撰別をなし繰絲するハ善ハ則善なれども頗ふる煩雜なると以て恐らくハ一般ヨリ實際行ハれ難かるべし然れども前條ヨリ申述たる撰別法を詳かヨリし而る後事ヨリとゝヨリ從ふヨリ於てハ適宜ヨリ該法を省略するも大なる過ちなかるべしと信ぎるなり否豈啻ヨリ過ちなきのみならぎ製糸家の經濟上或ハ實際ヨリ斯ゝる煩雜なる區別ハ行ひ得べからざること往々これあるものなり況んや

製出額の微少なる幼稚の蠶糸家に於ておや故に今こゝに製絲家が實地の經濟上に適應すへき略法の例を擧げて以て御參考に供ふべし仮令へば第一項の色の別ちに於ては卵黄と緑黄とを合し雪白と銀白とを併するが如くし第二項の形狀に於ては大形と中形とを合せ楕圓と正圓とを一トツにするがごとし第三項の纖維に於ては緻密と密とを合併し天鵝絨と綿肌とを一トツにするが如し第四項の緊緩に於ては硬緊と稍緊とを合し頭軟と胴軟とを併するが如し第五項の悪繭に於ては爛死と汚染とを合し鏽焦殖着尿暈等を併するか如くであります

了解きつたる事なれども都て繭の撰別法は其數の寡ふして見易きものより撰拔くを良とす仮令は總体黄繭なれは其中より白繭を撰出し總体白繭なるときは黄繭を撰出すの類であります　成る程段々の御説明にて成繭撰別の手續は了解致しましたお説を承りますれば我々が是まで行ひ來りたる事は全く杜撰なりしゆえ勞して功の薄き譯柄で御座りました蠶吏イヤ私も未熟ですから實地に就て篤と御試驗を冀望致します性來私は不器用なる奴にて右に聞て左に説きテエブル上の空論を宛も實地らしく吹きちらしなぞするが如き最と怜悧なる當

世風の早學問ゝ出來も致さぎ又實際太だ嫌ひでありまゝすゆえ是までお譚申ましたことゝ十有餘年刻苦致したる實地の經驗說ですから正さかゝ金黃繭と綠黃繭を取り違え當業者の苦情を惹き起すが如きことともなく又乳鉢と摺鉢とを聞き違え過りを世間ゝ傳え當業者と惑ゝしむるが如き不都合ゝ先づなき積りでと打ち笑へば紳商イヤハヤ其譚ゝゝ閉口致しまゝす實ゝ私も右樣なる不都合と致度ないと思へばこそ先覺者ゝ就て疑を質し然る後之を實地ゝ試み事の得失を辨ぎる積りて御座りまゝする諺ゝもありまゝす通り一犬虛を吠れば萬犬聲ゝ應ぎと

か申す譯柄ですから何分利口振つて一時の間ゝ合せゝ善くなきことゝ考へまゝす因て尙ほお尋ね申あけまゝすが本邦ゝも蠶の種類が數多ありまゝして其種類ゝより繭ゝ大小厚薄あり纖維ゝ細大長短あり區々ゝして一樣ならぎ幼稚の我々製絲家ゝ繭の購入等を始めとし萬事萬端困難致し居りまゝするが全体如何なる種類が最も製絲ゝ適應するので御座りまゝせう蠶お尋ねの如く我國ゝも蠶の種類が澤山ありて養蠶家も製糸家も共ゝ惑ひのあることながら現時の有樣ゝてゝ養蠶家の好む種類と製絲家の好むところゝ稍々その趣を異ゝするものゝ如き傾

きあり併し是も一般に斯くあると申す程にはあらざれども兎に角嗜好の異りたるところありと謂つて宜しかるべし仮令ば夫の赤熟の種類ですあの繭の形狀も大にして繭層厚く隨て絲量も多ければ良好の種類と謂ふべきものなり然るに近年養蠶家が單に繭巣の大に誇り纖維の適否如何を措て問はざりしより製絲家も遂に赤熟にても佛國の機織に適應すべき精良細緻の生絲を繰製し能はざるものとまで公言するに至れり是も畢竟赤熟種のあしきにあらず製種家が種繭の撰みに暗らく單に需要者の多きを利となし健全のみに意を用ひ纖維の適

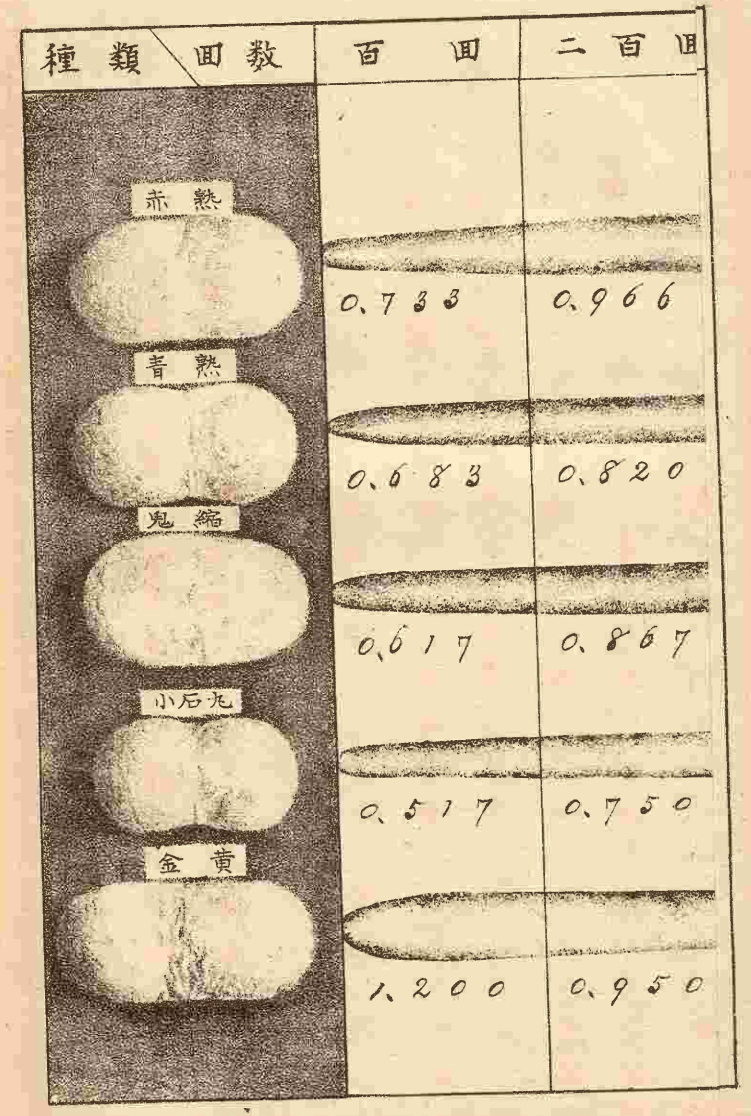
否に心付き製種したると養蠶家が啻に繭巣の大且厚にして見えよく絲量の多きを利とせしより終に此極に達したるものと考えられます因て私も五六年來頻りに此種類の改良を論ずつゝありしが近時も養蠶家も大ゐに改良の志念を懷くものあるに至れり元と此種類の纖維強靱にして絲量の多きも本邦無比のものなれども光澤に至りても青熟小石丸又昔等に一歩を讓れるものと謂ふべきなり加之ならず纖維に細大甚だしくその太き部分に至りても頗る太きに過ぎ老練なる工手と雖も纖度を揃へて精緻の生絲を繰ることも太だ難きものです之

が赤熟の二失でありますから此點ハ宜しく注意せられよ尤も目今の米國向の如き稍々太き纖度の生糸を繰製するハさまで難事なることハおきものですから夫れ是と考量して宜しく購入をなさば然るべくと考ふるなり又青熟ハ光澤美麗ハして纖維も赤熟のごとくハ細大なく太き部分ハても精緻の生絲を繰製するハ適せざることおし故ハ佛國向ハまれ米國向ハまれ適宜の纖度ハ繰製し得らるゝ良好の種類あり只此種類の赤熟ハ比らべて欠くるところハ絲量の稍々劣れるの一點のみ未だ他ハ闕所あることを見出だし能ハざるなり鬼縮とい

ふ一種の縮緬わらき繭あり此繭ハ明治四五年の頃より漸次ハ内地ハ廣まりたるものゝ如し想ふハ此元種ハ西斑牙より本邦ハ來りたるものならん歟其形狀纖維等宛も該國種ハ似たり抑も此繭の改良繁殖と謀りたるものハ群馬縣富岡町の養蠶熱心家佐藤國太郎と申す人ハして當時之が增殖を勸めたるものハ富岡製絲所あるものゝ如し又この繭ハ付するハ鬼縮の名を以てしたるも佐藤氏ありけるが當時富岡製絲所の所長たりし尾高惇忠氏之と聞き如何ハ縮緬が粗ければとて鬼と云ふ字を繭ハ付するハいかつ過ぎぞやと笑ひたりとぞ然かも今日

其名と共に世に行われ製絲家の嗜好に適するに必竟此繭の纖維良好にして精緻の生糸を繰製するに適應するが爲め此種類に纖維細くして平らかなれども或に飼育の如何により纖維細きに過ぎて絲力と減ぜるの傾きあるものなり且つ青熟等に比すれば光澤稍々劣れども青熟に亞ぎ良好なるものと謂つべし「小石丸」又昔の類に光澤纖維共に佳良にして精緻なる生絲の製造素品となるものなり此等の種類に以上の各種に比すれば纖維短かくして絲量少きものなり又動もすれば形狀小に失するものあり宜しく此點に注意して購入せらるべし「金

黄」に近年伊佛等より輸入し來りたる種類にして色澤恰も黄金の如し故に金黄の名を命したるものなれども此繭に形狀長くして大なり而るに纖維に細くして長く强靱にして繰製し易し然れども此生糸に練り減り多きこと各種類中に冠たり且又固有の色あるが爲め純白なる織物の材料たらしむること能はざるものあり此蠶に本邦移養日尚ほ淺く所謂試驗中のものなれば他日を待つて之が得失を論ずべきあり又本邦在來の緑黄繭に近年漸く減耗し之に換るに白繭を以てするに至れり此種類に金黄に亞き練減り多くして糸量に少きものあり然れ



種類＼回数	百回	二百回
赤熟	0、733	0、966
青熟	0、683	0、820
鬼縮	0、617	0、867
小石丸	0、517	0、750
黄金	1、200	0、950

蘭纖維比較圖入る

ども纖維ハ概ね平らかにして細大なきものなり又此繭より繰り得たる生糸ハ白繭糸よりハ幾分か價直の安きものなれば成るべく白繭を購入すべし先づ纖維適否のお譚も荒増しこんなものです他ハ類推してお會得あらんことを冀望致します尚ほ以上のお譚を確實むる爲めこゝに纖維の細大を圖して以て御參考に供ふべければ之を實際に試驗して得失を知り賜へ紳商成る程ヘエー蠶史舷窓より頭を出して看つゝあるうち海上の風景何やら横濱近くになりたるものゝ如く覺ゆるにぞ出でゝ甲板に上り見れば早や觀音崎の燈臺にぞ近づきぬ時に

繭纖維比較圖

種類＼回數	百回	二百回	三百回	四百回	五百回	六百回	七百回	量目合計	備考
赤熟	0.733	0.966	0.983	1.220	1.070	0.633	0.383	5.988	我一厘四毛二糸餘に當る此量の多寡により纖維の細大を知るべし二分二厘四毛ある表中の數字はデニール量にして一デニールは三尺九寸二分二厘二二四ある を以て百回は即ち三百九十二尺二寸回數は撿尺器に由り細大は撿位衡を以て試驗す撿尺器の一回は
青熟	0.683	0.820	0.816	0.850	0.700	0.575	0.373	4.817	
鬼縮	0.617	0.867	0.867	0.783	0.717	0.633	0.433	4.917	
丸石小	0.517	0.750	0.717	0.717	0.367			3.068	
金黄	1.200	0.950	0.967	0.917	0.867	0.767	0.683	6.351	

乘客ハ甲板を散歩するもの多く遠望鏡を携ふるものあり地圖を播くものありて何やら人氣も壯快らしくぞ見えよける蠶史ハ暫時して甲板を下り室ヨ歸れば紳商ハ前ヨ示したる纖維圖を看つゝ閑臥してありけり蠶史曰く早や横濱ヨ近づきました誠ヨ平穩で宜しふ御座りましたそろ〳〵上陸の支度を致しませう紳商左樣か然らば私も支度をと互ヨ陸上げの支度ヨぞ掛りける兩人已ヨ用意の整ふたる折しもあれ早や汽笛の鳴るありピーヒューの一ト聲何となく他港の上陸と異なりて蠶史ヨハ愉快ヨぞ聞えける夫より共ヨ上陸して汽船問屋西村ヨ

投杯共に無事を祝し盃を擧げなどして談話に時を移しけるが早や横濱東京間終りの汽車出發の時にぞ近づきければ紳商に別れを告げ蠶史ハ獨り東京駒込の僑居に歸りぬ

第十二回　蠶糸業の未來

ヲイ絲野君向ふに見ゆる高き烟突ハ何の工場ですか糸野あれハ此頃の創設にかゝる繰糸工場にして持主の名ハ日本の婦人ですが其實佛人であると申すとです何と立派なるものでハありませぬか蠶史ハ〻アそして彼の左りに見ゆる烟突ハ何ですか糸野あれハ横濱の或る紳商が設立したる繰糸場ですが此頃承れハ其實英人某の所有にして向ふに見ゆる工場より外觀ハ粗かれども工業ハ却て手廣に致す樣子であります蠶史ハ〻アしてあの裏手に巍然たる高閣の雲表に聳ゑ三層やら四層やら突起して見へますがあれハ何ですか糸野あれハ矢張彼の英人の居館です何に致せ先年先生に汽車中で御目に掛りました時ハマサカ斯やうな有樣にならふとハ夢〳〵思ひませなんたが吾〳〵もあの頃に覺悟すれば只今ごろハ餘程都合が宜しかつたのですか未だ〳〵中々と云ふ考へでしたから日ハ一日に手おくれになり遂に皆彼輩に宜しく

致された譯であります一昨日問ぎ語りまに或る人の說を承れば向ふまに見ゆる工場の名前主たる婦人へもと中國の產れまして幼きときより繰糸の業まに從事し彼地此地を教師おとまに雇へれ居り其後蠶業まに篤志なる桑畑某の妻とならんとせしまに良人となるべき人の身まかりてより其人の遺志を繼ぎ一の工場を起さん爲め各地を歷遊し既まに着手の場合となりしも又其養父たる桑畑翁の易簀よりして遂まに事ならぎなりぬ然るまに去年より彼の佛人の依賴まにより夫の工場を管理するとの噂なれども其實へ佛人の妾となりたるまに違ひないと申すとです蠶史斯

と聞より只呆然としてありしが心の中まに思ふやう水の流れと人の行末月まに村雲花まにへ嵐才子多病の諺まにもれぎと佳人の薄命を嘆ちつゝ又手云ふやう其婦人へ年の頃幾許位ですかお聞及びへ御座りませぬか糸野ハイ何んでも廿四五位であると承りましたが先生へアノ婦人をお承知ですか蠶史ハイ先年神戸港で蠶糸業の譚を致したる事のある婦人まに違ひないやうです果して夫ならば婦人まに多く得難きものと信ぜて居りましたが其事の蹉跌より終まに爲なく斯へる身となりしへ最と氣の毒まにぞ思ふなりと語けば糸野其仰せへ去とながら今日の狀態まに

ハ獨り彼の婦人のみならず有名なる工場の主も大方外人の支配を受け其名ハ依然として存するも其内幕を伺ひみれハ彼の支配の下ニ居て被傭稼ぎと一般あり只勞力の多少ニより幾分か利益の配當を受け得て其日を消光るのみの姿なれば殘念ながら事實己を得ざる次第なりと腕を扼してぞ語りける

夫より徐々ニ歩を進むれば向ふより二人曳きの腕車を飛して來る一人の紳商あり車夫の掛聲ニ両人路を讓りながら車上の人を見れば先年汽車ニて倶ニ蠶糸の事を語りつゝ品川より横濱ニ至りたる瓜込屋早利なりけれ

ば糸野ハ遽たゞしく瓜込屋君と聲を掛くれば瓜込屋イヤ是ハと車を停め下り立ちつゝ先づ糸野ニ禮をなし尋で蠶史ニ打向ひイヤ蠶史先生ニハ寔ニお久しう御座りました何日も御健勝でと挨拶を終り何分此頃ハ忙わしき故斯ゝる始末ですと云へば蠶史お聞しきハ何寄結構シテ只今ハ孰れニおゐでなさるかと問かくれハ絲野傍らより先刻お尋ねありし英人の工場ニおゐでゝ御座ります蠶史ハ・ア夫ハ寔ニ結構ですと瓜込屋イヤ結構なぞと云ふ場合でハ御座りませぬが何ニ致せ西洋人のする仕事ハ資本が富饒ですから爲易い所があります夫れニ彼の工場

の管長い中〳〵活潑の仕事をする男ですから面白ふ御座ります迚も本邦の製糸工業家が如何は骨と折て働ひて見た所が識見と云ひ智力と云ひ資本と云ひ共は競爭し得べからざる次第であります殊は夫の需要地の狀態い十分は知り悉し居るのみならず該地の狀況い細大となく郵信は電報は毎日の通信あると以て市場の掛引より現業の指揮は至るまで能く其事態の變遷と共は進退すると以て實は痒き所は手の届くとも申すべき有樣ですが我邦の製糸家い中〳〵そんな譯は參らぬ學識智力資本とも欠乏なるが上は海外の事態は暗く大抵い横

濱の外商は據りて工業の目的と定むるの度合ですから常は需用地の流行は後れ失敗と取のです全体工業者が横濱の仲買とも云ふべき外商は工業の目的を學ぶと謂ふい抑も間違ひ切ッたる譚しで有ます何せとならば彼い彼の商業上の一時の都合のみを謀りて云々するは止まると以て容易は信と措くは足ざる譚柄あり然るまそれと信ぶて以て工業は從事するが故は其製造品の漸く工業家の手を離れて市場は顯いるゝときい早や已は外國市場は變動が起りて當時と狀態を異はするより應分の利益と占得する能いぬ豈啻利益を得ざるのみならぬ

遂ニハ製造素品の價格ニも相當せざる迄ニ下落し加ふるニ資本の利子ハ彼の資本ニ比らぶれハ常ニ五六分の高位と占るが爲ニ得失贖ハす遂ニ廢業するもの多く心ならぬも目前の利ニ絆されて吾々と等しく外人の工業ニ從事し彼の支配と受るもの多きニ至れり先づ今日の有樣ニてハ何の時か能く工業の体面を一新し商權の平準を保ち得べきや想てこゝニ至れハ洪嘆の外なき次第で御座ると流石の瓜込屋も赤心面ニあらわれてぞ見へ ニける蠶史誠ニ然り左樣サ何ニしろ困ッたものですと云ふとき瓜込屋ハ時計と取り出しイヤ最早十二時です實

ハ明日ハ「オハニック」號の出帆なれば手紙書きやら何やらで甚だ忙しく緩々お譚も出來兼ますれば尙ほ他日お目ニ掛ませうと云ふ蠶史イヤそれハ御繁忙でおゐでゝせう何れそのうちと云へば糸野イヤこれハ失敬と左右ニぞ別れける蠶史糸野君どうです實ニ瓜込屋の譚の如く先今日の景況ニてハ何れの日か能く本邦人の工業が泰西人の工業と相對峙するニ至るでありませう想ふてこゝニ至るときハ慨嘆せざらんと欲するも得べからざる次第でありますす嗚呼と嘆ちければ糸野御尤です如何ニも左樣殘念至極でありますが先生のお考でハどうしたら之が

恢復を圖ることが出來ませぬ蠶史サアそこです先年お目に掛りし頃も此事が想ひれて寐ても起きても苦になる故斯樣したくないと杞憂の餘り口に筆に喃々したのですが所謂苟且偸安に日を送るが人情ですから心に掛ぬ人多かりし故遂に事こゝに陷りたる譯であります今更何回くり言いふも詮なきとながら元來當業者が所謂お先き眞闇にて前途の見込と誤りしより斯く忌ひしき域に達したるのですが必竟ぎるに此蠶業に從事する者の智識が足らぬからであります今日の姿となりたる原因を繹ぬれゝ双手も屈むるに堪えざる程ですが要するに左

の數項の外に出でざるべし其當時に在りてゝ生絲の需要も際限御座あるべからざるの事態でありましたし隨て之が價直も他の生産物に比すれば所得が多かりし故利欲に迷ふが人情の常なればお先き眞闇なる奴輩ゝ需要地の如何をも顧みぎ啻に蠶業にさへ從事すれゝ何時でも當時の利益ゝ收得せらるゝものと暗信し學を脩めぎ智を研かぎ依然として舊套を墨守し只管産額の增殖を圖り目前の利益にのみ級々たりし餘弊の積りたる是則第一因なり經濟の思想に乏しく需要供給の原則を忘失したるより我の供給ゝ彼の嗜好に適せぎ價格ゝ次第

に低下するの勢を顯すに至りしも力と盡して精品を廉價に販出するの策と講ぜるものなし是則第二因なり蠶種微粒子毒檢査の方法世に廣まりしより山村僻地の翁嫗もこの病毒の怖るべきをさとり病毒蠶種の養蠶家に益あるを知り撰種に意を用ふるもの多かりしも智惠才覺の不足ある輩い微粒子毒さえなけれい如何なる蠶種も好結果を奏し海外輸出生糸の原料を收得するものと固信し啻に顯微鏡的の檢査のみに依賴し其種類適否の如何い指て問いざるものゝごとし是を以て射利これ謀るの徒いこれと奇貨とし種類を撰まず繭と撰まず特に

發蛾の多きを利とし養蠶家を瞞着して得意然たるものあり又智惠才覺も相應にありて地方に養蠶家の名を得たる人々のうちにも如何ある種類が最も製糸に適するか適せざるかを吟味せずして漫りに新奇の名稱を下し競ふて聲價を博せんとするものあり故に赤熟にも數種あり青熟にも數種ありその他何々〳〵と一種の蠶種に些少の變化と與えい各人思ひ〳〵の名稱を付るに至れりこれと奈何ぞ純正良好の生絲たらしむるとを得べけんや是則第三因なり分業の實擧らず養蠶家が製糸の工業と兼ぬるより生糸の繰法束裝ともに雜駁を極め製

造素品の良好なるも加工の區々拙劣なるより其利を低減するの弊甚だし又該工業家が商業を兼帶するより單に商機にのみ心を奪われ製品の改良を後にし時價の高低に利益を依賴し價格を定めて販出するの斷決に鈍く竟に好の時機を失して損失を招くに至る是則第四因なり」本邦開港場の生糸商なるものゝ概ね地方製造家の被托販賣人なるがゆえに全く販賣の歩合口錢に口を糊すると通例とす故に勢ひ寄托者の多きを利とし競爭の極或ゝ寄托販賣者が定むる所の價格よりゝ幾分の高價に販賣せんとし商機を失して寄托者に損敗を來さしむる

か如き弊あり（明治十九年下半期より二十年上半期に渉れるの實例なり）是則第五因なり」本邦在留の外商ゝ概ね繰糸の技術に暗し然れども取引上慣習の久しきより稍々生糸の等位を鑑別し得て之を米佛其他の市場に輸販するの商人なり是を以て海外市場の商況ゝ常に能く之を探知し得べけれども生糸繰製の技に至りてゝ甚た迂なるもの多し然るに地方の製造家ゝ此仲買商とも謂ふべきものゝ言を二おき確實なるものと思料し綾取に綛尺に舊套を株守するもの往々これあるのみならず或ゝ曰ふ齊一の束裝ゝ粗品に利ありて精品に不利なり寧ろ綛尺又ゝ束裝の一樣ならざる

の勝れるに及かぎと主張するものあり是必竟需要先きの實況を知ざるより目前の些利に愉安して將來を慮るの腦力に乏しきの致すところとす是則第六因あり元來我邦の製産者ハ獨り生絲製造家のみならぎ概して一致結合の思想ヨ乏しく其規模狹隘ヨして競爭の團甚だ小あり故ヨ地方の一小部分ヨ孤立し共同の利を知らぎ適々率先して之が計畫を爲す者あるも應ぎるもの或ハ少なく又或ハ其目的を達せんとするが如き地位にまで進み得るも之を統理するの人才に乏しく大抵同等の智惠才覺を供ふるものなるがゆえに議論百出忽ち土崩瓦壞

するに至るの例し尠なからぎ好しや統理者其人を得るも素より合同の思想に乏しき人々なれば最初ハ都合よく其人に事を委ぬるも半年若しくハ一年位を經過するときハ早已に倦怠の心を生ぜ甲のブツ〳〵ハ乙の賛成を得丙丁戊己と次第に雷同附和して遂に其人を去しめ十把一束の人のみ後に殘りて竟に纏らぎ共同の眞味を嘗るに至らぎして止むの類屈指に暇あらぎ是則第七因なり又少しく進取の氣象あるものハ處置を看るに改良の思想に富み坐繰の迂粗なるを嘆ぜ蒸汽機械の効能を說き地方蠶事の改良を自ら任ぜ東奔西馳一意事に茲

に從ふも元來只熱心と云ふまでにして其技に暗く爲に秩序を誤り勞多くして益少なく遂に中途にして止むが如きもの比々皆然り今これが一例を擧れば產繭の乏しき場所に工場を建て工手を傭聘せんか熟練なるものなく工場長を求めんか適應の人物なし水を評せんか繰糸に適せず運搬を便にせんか開鑿に巨額の費用を要すべしと云ふが如きの有樣なり焉んぞ能く其効を奏し得べけんや是則第八因なり

世間幾多の蠶糸家中以上の八因を免かるゝもの果して幾人かある恐らくは寥々たると雨夜の星の如けん當時

の狀態斯の如し然るに製糸業に關する事柄を學ぶべき完全なる場所とては一もわらざりしゆえ有志の徒は概ね上信奥の三州に遊び實地の業務は其度に應ぶて習得するも工業上必需の學理を習得するに由かく三五年の後地方に歸りて製糸場を起すも率ね手加減目分量の模作品たるに過ぎ又蒸汽機械を据付くるも汽罐の造構作用を審にせずと云ふが如き有樣ありし是を以て蠶史は頻に製糸場の管理者たるべき人才を養成すべき場所を適應の地に置き製糸の工業に應用すべき理化學、機械學經濟學等の大意を授け而して製糸上一切の技術を習得、

せしめ學術兼備の工場長たるべきものと陶冶し出すの必要と論せしかとも當時思想こゝに至るもの鮮かく荏苒今日に至れりそのうち養蠶家ハ次第ヨ增加し繭の產額ハ殆んと三四倍の高ヨ上れり去れとも工業ハ依然として進まず粗品ハ愈出て愈增し價格ハ次第に下落して支那生絲の後に立つの姿とかりぬ凡そ社會の物品ハ需給の釣合に支配せられて價直に昂低を起すものですから製品の價直下落すれハ自然とその製造素品に影響を及ぼし之が產出額を減少するか當然です故に是非とも繭の改良增殖と共にこの工業と進め內ハ養蠶家の經濟

を維持し外ハ機業者の嗜好を滿し彼我ともに利益と永遠に保續するやう致さねば販路壅塞と云ふ一件か倏ち來るのですこれを等閑に打過たるより粗品の增加とかり伊、支その他の國々に次第〳〵に打負て日本の血液とも申べき程の大切なる生糸社會の凶慌ハ目も當られぬ有樣かり其後間もなく此雜居の區域か擴まりたる譯柄かり事こゝに至るも亦宜なりとこそまうすべけれ噫々と嘆ちけれは糸野成程げに仰せの如くヨ候ちふかり去り迚此儘に過ぎ行くべき何とか挽回の策を講ぎるとそ國民たるものゝ本分からめ先生如何に〳〵と詰難せらる

と雖ども今更策の容易に施すべからざるより蠶史答に
つまり如何ゝせんと思案しつゝ歩を進むるうち突嗾し
りえに聲ありてハイハヲ〳〵糸野馬車ですと云ふより蠶
史も路を讓りて其馬車を仰き見れば彼の桑畑某の嫁お
りし佳人と佛人某と併乘せし馬車ありけりアット云ふ
間に早くも馬車ゝ塵と飛ばして巍然雲表に聳えたる高
閣にぞ近づきける蠶史餘りの事に言語も出ぜ跡を見詰
つゝ歩みしに脚を失し路傍の溝にぞ陷りたりアナヤト
驚き眼と開けば身ゝ駒込の僑居に在りて書房に仮睡し
流涎肱を潤し遙に門前車馬來往の響きを聞のみ

明治二十年八月六日版權免許
同　年十月　出　版
（定價金八拾五錢）
著者　群馬縣士族　高橋信貞　東京本郷區追分町二十七番地寄留
出版人　東京書肆　穴山篤太郎　京橋區南傳馬町二丁目十三番地
發兌　有隣堂　同所
印刷　有隣堂活版所

蠶桑及製糸書目錄

農商務省御藏版
船津傳次平君著

●栽桑實驗錄

洋裝假綴　全壹冊　定價五拾錢　郵稅拾貳錢

●總論●苗地●苗樹生育法●籬伏●分株●擇木取●樺木●樹蒔●實蒔●接木●種類●移植●培養●害蟲●疾病●栽桑●効用

夫レ桑樹ノ種類ハ頗ル多ク土質氣候ニ從テ各異ナリ且ツ培養ノ巧拙ニ由リテ栽植損益アル枚擧ニ遑アラス此書ハ著者積年ノ研究ニ出ヲタル桑樹栽培肝要ノ法ナリ

農商務省御藏版
田島武平君質問
練木喜三君著述

●蠶桑生理問答

洋裝假綴　全壹冊　定價四拾錢　郵稅八錢

此書ハ理化ノ本原ニ基キテ蠶桑ノ生理ヲ問答シタル書ナリ加ルニ蠶體解剖ノ密圖ヲ附記ス發兌以來數千部ヲ販賣ス蠶業家有益ノ書タル知ルヘキナリ

弘通書林

東京	丸善書店	雲州松江　園山喜三右衛門
同	博聞本社	岐阜　水谷善七
大阪	柳原喜兵衛	越後長岡　目黒十郎
同	岡島眞七	陸奥八戸　浦山政吉
同	松村九兵衛	同弘前　玉田平二郎
西京	村上勘兵衛	信州飯田　奥村収藏
名古屋	片野東四郎	同松本　高美甚左衛門
静岡	廣瀬市造	加州金澤　近岡太平
甲府	徽古堂	和歌山　辻一也
廣島	松村善助	函館　常野書房

農商務省御藏版

●蠶病試驗成蹟第一報

洋裝假綴　全一冊　定價金三錢　郵稅金貳錢

目次●黑痣病の試驗●製糸法改良の試驗幷圖表●黑痣病豫防法●蠶種檢査法附顯微鏡用法幷圖解●蠶室及ひ飼養法●護種法●儲桑法●收蠶法●養蠶表附錄蠶卵紙檢査成蹟

●蠶病試驗成蹟第二報

洋裝假綴　全一冊　定價金拾二錢五厘　郵稅金四錢

目次●蠶種の檢査●蠶兒發生の景況●微粒子傳染の試驗●蠶蛹檢査及蠶種製造法●蠶蛾及蠶種の檢査

●蠶病試驗成蹟第三報

洋裝假綴　全一冊　定價金拾七錢　郵稅金八錢

目次●蠶種檢査ノ事●養蠶室ノ事●蠶ノ種類及ヒ微粒子病毒歩合ノ事●蠶兒發生ノ景況●蠶兒發生後ノ景況、第一室、第二室第三室●微粒子病傳染試驗ハ事●白疆蠶傳染試驗ノ事●微粒子病豫防試驗ノ事●白疆蠶豫防試驗ノ事●外國蠶種育ノ事●佛國產、朝鮮國產●各種收繭表附玉繭歩合比較表●蠶種製造ノ事付蠶種配付表●絲樓細太試驗ノ事付生糸試製表●損益推算表

蠶ノ病害ヲ除カンニハ其源因ヲ究メサルヘカラス其ノ源因ヲ究メンニハ到底學術上ノ力ヲ假リテ精密ナル試驗ヲ施シ實地適用ノ良法ヲ求メサル可カラス是農場局ニ於テ殊ニ委員ヲ命シ蠶病ノ試驗ニ着手セラレシ所以ナリ此篇ハ即チ明治十七年ヨリ十九年ニ至ル各年成績ノ報告ニシテ加フルニ精微明瞭ノ圖画ヲ挿入ス世ノ蠶業ニ從事スルノ諸君此篇ニヨリテ病毒防除ノ方法ヲ求メハ裨益スル處蓋尠少ナラサルベシ

農商務省御刊行

●微粒子病試驗報告

洋裝假綴　全一冊　定價金八錢　郵便稅六錢

此報告ハ去ル明治十七年農商務省農務局ニ於テ微粒子病ノ試驗ニ着手セラレシヨリ十九年ニ至ル三年間ノ試驗成蹟ニ基キ該病ノ性質徵候ヨリ顯微鏡ノ用法蠶種檢査法製種法ノ諸項ニ至ルマテ具サニ其要領ヲ說キ示サレタルモノナレハ獨リ該病毒豫防殄滅ノ法ヲ知ルノミナラス又蠶種檢査規則御發布ノ旨趣ヲ了スルニ足ラン

內務省勸農局御藏版

●獨逸農事圖解ノ內養蠶法

全一葉　定價拾五錢　郵稅四錢

本紙ハ獨逸國農事圖解ノ一ニシテ蘭人「フハン、カステール」氏ノ譯スル所ナリ精細ノ圖画ハ想像ノ範圍ヲ超ヘテ其眞ヲ寫出ス蠶業家有用ノ珍書ナリ

●蠶絲集談會記事　洋裝假綴　全一冊　定價拾二錢　郵稅四錢

本書ハ明治十八年八月繭絲織物陶漆器共進會開會ノ節東京商工會議場ニ於テ開キタル蠶糸集談會ノ紀事ニシテ第一項ハ製糸ニ最良ナル蠶種ヲ撰ヒテ成ルヘク之ヲ飼養スルノ手段第二項ハ生絲ノ束裝及ヒ綾取アル揚簀ヲ用ヒテ總ノ尺度ヲ一定スルノ方法第三項ハ蠶絲組合設立ニ就キ障碍ノ有無並養蠶製糸ヲ兩組合トナシ若シハ一組合トナスノ便否右三項ノ題目ニ就キ會員六十四名ノ討議ノ顛末幷ニ會員一同ヨリ農商務卿ヘ養蠶々絲條例御頒布ノ儀ニ付建言書幷ニ組合組織目的養蠶部製絲部ノ要領ヲ掲ケテ添申セシ意見等ヲ附記ス養蠶家ノ參考トスヘキノ書ナリ

博物館

●御藏版　教草一覽　三十葉ノ内　壹葉定價金五錢　郵稅貳錢

●養蠶一覽　一葉　●野蠶一覽　一葉　●生絲一覽　一葉　●樟虫一覽　一葉

本紙ハ曩キニ墺國博覽會出品ノ時ニ際シ各種職業ノ教草ヲ編成セラレシモノニシテ第一人生ニ切ナル衣食ヨリ先ナルナシ故ニ童蒙ヲシテ先ツ各業ノ大略ヲ知ラシメ他日修產ノ助ケトナサントス是レ其ノ大意ニシテ右四葉ノ如キ教育ノ資ノミナラス實業家ノ參考ニ供スルニ足レリ

農商務省御刊行

●明治十八十九兩年收繭絲量及微粒子毒傳染試驗成蹟比較　全一葉　實價壹錢三厘　郵稅壹錢

此表ハ農商務省蠶病試驗所ニ於テ蠶種改良ノ爲メ顯微鏡檢査ニ從事シ好結果ヲ得タル試驗ノ比較ニシテ蠶糸ノ等級即チ微粒子毒遺傳ノ分合ヲ數等ニ分割シ給桑、收繭、生糸等ノ量價ヲ一目瞭然タラシム加ルニ全國採桑ノ量、收繭、糸量、糸價ニ至ル迄ヲ載ス養蠶家ノ參考スヘキ良書ナリ

農商務一等技手練木喜三君閲　福島縣池田社池田常藏君演述

●蠶桑講話筆記　洋裝假綴　全一冊　定價金貳拾五錢　郵稅金六錢

此筆記ハ福島縣三春蠶絲業組合ニ於テ蠶卵種ノ微粒子病其他蠶病ノ原因及ヒ之レカ撲滅ノ方法ヲ知得センカ爲メ蠶業ニ有名ナル伊達郡池田社ノ池田常藏君ヲ聘シ其說明ヲ請ヒ同氏カ多年講習切瑳ノ餘發明シタル實驗幷ニ諸大家ノ說ヲ參酌講明セシモノニシテ顯微鏡ノ利用ニ得タル蠶体ノ構成ヨリ榮養ノ理ヲ說キ夫ヨリ病理ニ及ホシ豫防驅除殘ス所ナク其詳密ナルニ至リテハ圖画ヲ挿シ解釋ニ辨ナラシム殊ニ練木喜三君ノ閲ヲ經タルモノニシテ方今蠶病ノ諸說數岐ニ涉リ繁難ナルノ際一歩ヲ抽テ此演說アリ蠶業家ノ指南車ト云フベシ弊舗請フテ印刷ニ附シ當業家ノ參考ニ供ス

小幡信篤君譯

●發氏 養蠶論

洋裝 全一冊 定價一圓 郵稅三拾貳錢

目錄●蠶ヲ鑑定スル顯微鏡ヲ用ふる論●蠶卵々團卵心の說●蠶卵を貯藏し冬ヲ越さしむる法●蠶卵發生之事●蠶虫●蠶の諸形器を論す●細胞体及其變形分と其組織とを論す●營養諸器を論す●呼吸器を論す●血液循環の裝置を論す●蠶の分泌諸器を論す●運動基を論す●神經裝置●脂肪組織●皮膚●脫皮●蠶の營養と論す●養蠶篇●養蠶初期適應の時限●養室溫度の規則●飼養法●位置の淨潔ヨ就て論す●蠶を分置す可き區面の廣幅を論す●蠶室內の通氣及適應の溫を維持する方法と論す●蠶の繭を作る事●繭を作る場所と營む事●蠶の絲室即繭●繭中に含蓄せる蠶蛹を殺すの法●蠶絲幷に其性狀●蠶の繭を造て蛹となる事●蛾の論●蛾の陰具●熟卵及產卵●普通卵紙製造法●桑蠶の種別及ひ其交接の或る利益の論●常蠶の疾病●微粒子病コルプルヘン●究理的の性質幷含密的の反應●蠶の微粒子病に罹る有樣を論す●顯微鏡檢查に困つて蠶種ヲ選擇するの方法を論す●卵種製造に就て器械の裝置法●卵種の製造ヨ就て撰用すへき繭の鑑定●蛾の交換を每

對分離すへき法●顯微鏡と以て蛾を檢查するの法●卵種を洗淨するの法●傳染病の危害を豫防するの法●弛緩病ステツフスート●硬化病俚名オシヤリコ●主要とするに足さる蠶病を論す

右ハ有名ナル獨逸國「ハーベルランド」氏ノ著ニ係ル養蠶書ヲ譯セルモノニシテ養蠶書中錄々ノ名アリ早ニ諸君ノ知了スル處故ニ目次ヲ揭ケ其詳ヲ辨セス

須藤行恒君編

●蠶桑指針

洋裝假綴 全一冊 定價金貳拾五錢 郵稅金六錢

本書ハ蚕桑ノ業ニ於テ必用ナルヿヲ記載スルモノニシテ飼育ノ順序ヨリ收繭ニ至ル迄ノヿ其他蚕病豫防、種紙ノヿ桑樹ノヿ等目次ニ示ス所ノ如シ其方法ニ至リテハ著者多年ノ經驗實歷ニ習得スル確說ニシテ人ノ糟粕ヲ舐リ徒ニ高尙ノ說想像ノ談ヲ爲シ世人ヲ瞞着シ名ヲ釣ルノ類ニアラス目下養蚕ノ業盛況ヲ呈スルノ件ニ際シ適當ノ書ヲ搜索セラルヽモ繁簡組密或ハ一方ニ偏シ溫度ノ加減等地ノ寒暖ニ因リ差違アルモ能ク其例ヲ擧ケ詳說スルモノナシ故ニ只從來ノ慣行ニ任セ豐凶ヲ天爲トナス實ニ舟行楫ナキカ如シ危殆ト言フ可キナリ本書着々養蚕ノ針路ヲ示ス題シテ蠶桑指針ト云フ其名實相適フモノト云ノヘキナリ

野師應君編輯
伊國傳法

製絲全書

和裝 全四冊 定價金九拾錢 郵稅拾八錢

第壹編●繭取扱方ノ部●生繭取扱方ノ事●生繭蒸燥殺ノ事●生繭ヲ蒸殺スル熱度ノ事●繭二番撰ノ事●繭ノ性質撰別ノ事●繭絲「テトロ」ノ事●繭絲試驗ノ事

第貳篇●生絲製法ノ部●繰湯温度ノ事●製絲ニ用ウル水ノ事●繭濡シ方ノ事●緒立箒ノ事●絲寄セ方ノ事●絲ニ捻ヲ掛ル事●小篝廻轉ノ事●綾取ノ事●連接繭繰製方ノ事●「モレスカ」最上層糸取扱方ノ事●「バチナアテ」湯底ニ沈ミタル繭取扱方ノ事●蛹取扱方ノ事

第三篇●撚絲製法ノ部●再製絲ヲ撚絲トナス爲メ撰別及扱方ノ事●撚絲濡シ方ノ事●小篝移方及製損絲取除方ノ事●絲磨器械ノ事●撚絲製方ノ事●撰絲ヲ合ス爲メニ濡ス事●撚絲合セ方ノ事●緯絲合セ方ノ事●合絲ヲ再撚ニ掛ル事●合絲ヲ緯絲トナス撚ノ事●綛ヲ造ル爲メ大篝ニ移替ル事●撚絲仕揚ノ事●「テトロ」ヲ檢シ綛ヲ作ル事

第四編●製絲試驗ノ部●製絲ノ濕分ヲ除ク事●製絲檢査會社ノ事●製絲試驗ノ事

此書ハ蠶業旺盛ナル伊國ノ製絲法ヲ記述シタル者ニ〆其大畧ハ目錄ニ示ス所ノ如シ

永井保興君著

製絲家必携

和裝 全三冊 定價七拾五錢 郵稅拾六錢

第一章●繭購求ノ說●蒸殺前ニ繭ヲ撰別スル說●蒸殺ノ說●繭ヲ蒸殺セシ后是ヲ撰別スル說●製絲ノ說

第二章●製絲場構造ノ說●器械運轉力ノ說●蒸氣釜火爐及ヒ蒸氣力ノ說

第三章●喞筒ノ說●貯水器及ヒ水濾器械ノ說●烹繭器械ノ說●索緒ノ說●製絲釜ノ說●「フヒリエール」ノ說●「クロワジウール」ノ說●動搖器械ノ說

第四章●小糸桝ノ說●擧ケ糸桝ノ說●結糸ノ說●良糸ノ說●佛國製糸機械ノ說●製糸場計費各月概算ノ說●製糸場首長要務ノ說

此書ハ佛國製絲術ノ方法ニシテ本邦ノ製絲ニ參照シテ規模宏ニ機械裝置等尤備レリ而ノ著者意ヲ用ヒテ簡易ニ說述セリ製糸全書ト相伍シテ伯仲ノ間ニアリ

松崎太郎君著

養蠶實驗錄

洋裝仮綴 全一冊 定價金十錢 郵稅金貳錢

本書ハ著者カ經驗ヲ記セシモノニテ八章廿六項ニ分チ第一利益ノ比較ヨリ蠶至ノ結構空氣寒暖ノ關係蠶ノ種類病因蛹殺法其他夏秋蠶ノ養法等ヲ簡易ニ記述セシ者ナリ

福島縣原著　川勝隆義君釋述

●養蠶扱方

和裝　全壹冊　定價金拾八錢　郵稅四錢

總論●蚕室の事●蠶卵の事●藏卵の事●浸卵の事●掃卵の事●初眠の事●二眠の事●三眠の事●四眠の事●老蠶の事●收繭の事●藏繭の事●選繭の事

此書ハ明治十年内國勸業博覽會の盛擧あるよ方りて福島縣廳ヨ於て伊達信夫兩郡内養蠶に熟練せる者を招集し衆説一途に出て數十年來經驗して好結果と得たる養蠶扱方の順序を編纂せるものにして完全の書たる言を俟さるなり

野村義雄君著

●蠶桑獨まなび

洋裝仮綴　全一冊　定價金拾八錢　郵稅金四錢

養蠶原由●養蠶注意●寒暖氣候●桑樹之事桑葉の原由●桑園地質●桑園培養法季節並肥料種類●桑摘方刈方●養蠶用器具用意●蠶室●養蠶手順●蠶忌物●蠶種扱附蠶種の注意●桑葉刻方●養蠶并桑與方附糸繭飼種飼之事●初眠起之譯●蠶種類●初眠起迄の扱●二眠起迄の扱●三眠起迄の扱●四眠前後扱●巣倉へ宿り繭の事●繭種數撰方扱●種製造の事附蛆の事●繭室燥殺附り貯藏の事●製糸手順●製糸審査●眞綿製造の手順●絹織の心得

養蠶ノ事ヲ記スルノ書方今日ニ發兌蠶與ヲ極ムルモノ尠カラス然レトモ桑樹栽培ヨリ養蠶製糸ニ至ル迄簡便ニ記述シ且ツ盡セルモノハ此書ニ如クナシ獨まなびト云フハ即チ各人自得シ安キ爲メニ記載サレシヲ以テナリ

志賀雷山君譯

●普通養蠶書

洋裝仮綴　全一冊　定價金貳拾錢　郵稅金八錢

第一編桑樹ノ事●第二編桑葉ヲ摘ム事●第三編養蠶室ノ事●第四編蠶蝶ノ卵ノ事●第五編蠶虫ヲ養フノ事●第六編脫皮即チ寢眠ノ事●第七編蠶虫ノ繭ヲ造ル事●第八編繭ノ事●第九編蠶虫ノ蝶ノ事●第十編蠶虫ノ種類●第十一編蠶虫ノ疾病●第十二編紡糸業ノ事●第十三編蠶虫ノ化學上ノ事●第十四編雜記

本書ハ米國ノ「シー、イー、パムフチルド」氏ノ著ヲ譯セルモノニシテ蠶桑業ノ自然ノ順序ヲ洞見シ其性質上ヨリ桑樹ノ培養、蠶ノ飼育ハ斯クスヘシ繭種ノ扱ヒ紡糸業ハ云々ト丁寧ニ解説セリ始メテ此業ヲ營ムノ人ニハ最モ解シ安シ又書中頗ル新規ノ説アリ之レ著者ノ雜説ヲ耳朶ニセス無心此業ニ從事シ其經驗ニ得タル結果ナル知ル可キナリ

田村多門君編輯

●學理經驗 實地養蠶論

洋裝 全一冊 定價金六十錢 郵税金十六錢

此書ハ養蠶上目下必要ナル諸件ヲ學理ト實地トニ照査シ尤適實ナル方法ノミヲ蒐集編成セルモノニシテ傍ラ和漢洋ノ養蠶著書中ヨリ編者ノ意ト的合セルモノヲモ捃摭引用セラレタリ書中飼養、製種、蠶病、桑園ノ四大部ニ分チ通編三十三目ニ成ル且ツ篇末ニ微細ノ圖画ヲ加ヘ實地照合ノ便ニ供ス夫レ近時蠶桑ニ關スルノ著書日一日ヨリ多ク精ヲ勤メ工ヲ競フ讀者又事業ニ施シ其利害ヲ褒貶ス此ニ於テ歟本書ノ如キモ編者頗ル注意シ雜粕ヲ去リ其粹ヲ集ム蓋シ蠶桑書中古今獨歩ト云フヘキナリ

池内信嘉君編輯

●蠶桑實理辨明 全壹冊 近刻

愛媛縣池内信嘉君夙トニ蠶桑ノ業ニ從事シ積年實驗得ル處尠カラス曩ニ農商務省蠶業試驗場ヲ起シ各府縣蠶業有志ノ士ヲ撰拔シテ諸般ノ學課ヲ講授セシメントスルヤ君又自ラ進ンテ入場シ苦學經驗自余日其間學ブ所ノ課ハ理、化、動、植物學ヨリ蠶体解剖、蠶体生理、蠶体病理、桑樹栽培法、桑樹病理、顯微鏡檢査法、養蠶術、等直接ニ間接ニ一トツシテ蠶業進歩上ニ裨益ナラサルナシ而シテ現時全國ノ蠶業ハ改良進歩ノ途ニ嚮

ヒ朝野共ニ其計画ニ汲々タルニ際シ此脩得スル所ヲ世ニ公ニスルヿ最モ補益スル所アルベシト則チ其學課ヲ基礎トシ更ニ我國及泰西諸大家ノ説及諸書ヲ攻照參酌シ且ツ多年自カラ經驗スル所ヲ交ヘ此書ヲ編成セラル蠶桑書中ノ卓越ナルモノト云ベシ

弊舗請テ鉛版ニ付ス發兌ノ期將ニ近キニアラントス冀クハ一讀ノ榮ヲ賜ヘ

田島浩造君著

●勸農叢書 蠶業改良説

洋裝仮綴 全壹冊 定價金貳拾錢 郵税金八錢

第一章 作富の道は盛んに蠶桑業を興すにあり　第二章 製糸改良の必要
第三章 蠶種改良の必要　第四章 蠶種改良の困難
第五章 北海道ハ天與の養蠶地なり　第六章 全道をして蠶種製造地と爲すの鴻益

我國近年養蠶ノ業益盛ナリ從テ微粒子毒等蠶病ノ蔓延甚シク當業者ノ勵精熟練ナルニモ拘ハラス失敗スル者多シ著者積年製種ノ業ニ從事シ竟ニ數名ノ同業者ト之レカ改良ヲ圖リ百方苦心實驗ニ徵シ偶々北海道蠶種ノ强壯ナルヲ發見シ其改良ノ捷徑ナルヲ識得ス然レ𪜈獨リ其利ヲ專有セスシテ廣ク社會ニ報道セントト更ニ此書ヲ著シ其顚末ヲ畧説シ併セテ從來實驗ノ成果ヲ述フ其作富ノ道ト云ヒ製糸種ノ改良ト云ヒ比例ヲ擧ケ証左ヲ示シ就中北海道ノ一節ニ至リテハ其言懇々目下ノ急務當業者ノ宜ク一考ス可キ要點ナリ諸彦熟覽シテ其論旨ノ良否ヲ鑑別セラレンヿヲ

故戊田思齋翁著

●勸農叢書 **養蠶絹篩** 和裝 全二冊 定價金七十五錢 郵稅金十六錢

我國近來養蠶ノ業大ニ進ミ海外輸出ノ價額殆ント其全部ヲ占ム外人評シテ富源蠶桑ニアリト宜ナル哉而ノ古來農桑ヲ勸奬スル實ニ思齋成田翁其人ナリ翁文化年間ニアリテ此書ヲ著ス爾來蠶桑ヲ說クモノ皆翁ノ流ヲ汲ム其惠澤豈大ナラスヤ書中ノ栽桑養蠶製絲ニ至ルマテ遺漏アルナク諄々其秘溢ヲ說ク養蠶書中ノ蕭楚ナリ

故上垣守國君著

●勸農叢書 **養蠶秘錄** 和裝 全三冊 **近刻**

夫レ事物ノ精細ヲ極ムルハ一朝ノ事ニアラス數年ノ歲月ト經驗トヲ積ミ實効顯ル可シ然レモ濫觴其人ナカル可ラス上垣氏ノ如キ養蠶ニ於テ特著ナル者ナリ着手ノ始メ交通不便ノ往昔ニ在ツテ山河ヲ跋涉シテ野州ヨリ奥羽ニ赴キ親ク其風土ヲ視察シ其操作ヲ鑑ミ飼育多年誤リナキヲ認メテ此書ヲ著ス方法最モ精確圖畫又密ナリ今日理化ノ學開ケ原ヲ究メ質ヲ辨シ毫末モ亦顯微ノ鏡面ニ於テ逃スナシ而ノ發明ノ眞理ト爲ス所ノモノ却テ此書ト暗合スルモノアリ是レ此書ハ經驗ノ効學理ニ適フモノニシテ今人ノ敬重措カサルモノ夫レ茲ニアリ本書四方ノ需求舊版既ニ庫中ニ空シ依テ弊舗新ニ再刻貴需ニ應ス諸彥陸續購覽アレ

佐々木長淳君校閲　八田達也君編輯

●**蠶事輯說** 和裝 全壹冊 定價金三拾錢 郵稅金拾錢

飼育順序五條●上簇の說●繭搔取及儲藏の注意●蠶種製造法及儲藏の說●蠶兒變色ゟ從て給桑量を增減すへき說●溫度昇降の說●蠶蟲呼吸の略說●桑葉採收及儲方注意●桑葉の良否及桑園栽培方●蠶具調製及扱方●蠶病の原因及豫防の說●飼育實施の顚末

此書ハ八田氏祖先ヨリ蠶業ニ從事シ積年百家ノ說ヲ研究シ竟ニ從來ノ飼養法ヲ革メ溫度ヲ籍リテ育蠶スルノ法ヲ試ミ數回ノ後好果ヲ得タル實蹟ト猶之レニ內外諸邦ノ著書又ハ諸大家ノ卓說トヲ摘挿シ佐々木君ノ校閲セシモノ故當今養蠶書中適當ノ良書ナリ

下村規一君著

●**柞蠶飼養實驗錄** 洋裝仮綴 全一冊 定價金五十錢 郵稅金十錢

此書ハ柞蠶舶來ノ起原ヨリ性質形狀養樹ノ種類及得失櫟苗仕立法種繭ノ貯藏等ヨリ稚蠶ノ育法飼場ノ配置管守ノ心得其他ノ要項凡ヲ二十章ニ分チ諄々其方法ヲ說述ス

佐藤源之助君著

●増補再版 **養蠶新說** 和裝 全一冊 定價金貳拾五錢 郵稅金六錢

緒論●飼桑の說●蠶室準備の事●蠶種取扱法の事●蠶兒掃立の事●初眠扱法の事●二眠扱法の事●三眠扱法の事●四眠扱法の事●熟蠶扱法の事

此書ハ著者養蠶ニ從事スル數十年刻苦經營其業大ニ進ミ從來ノ養蠶者多量ノ桑葉ヲ費シ多數ノ日子ヲ消シ徒ニ成繭ノ優劣ヲ競フカ如キ利害損益相償ハサルノ獘アルヲ患ヘ且ツ當業者ノ請ヒニ依テ記述サレシモノニシテ此養法ニ據ルトキハ消費スル所少クシテ收利多キ方法ナリ加フルニ氣候ノ不順ニ遭フモ失敗ヲ招ク等ノコトナク最モ利便ノ飼養ナリ前版ノ分既ニ盡キ更ニ增補再版ス之レ其爭フ可カラサル事實ニシテ座上泳水ヲ說クモノト比シ同日ノ談ニアラサルナリ

伊藤精一君著

●養蠶專要 **驗濕器表** 自四十度至百度 全一冊 **近刻**

空氣ノ動物ニ於ケル水魚ヨリ尙切ナリ況ヤ蠶兒ノ如キ軟弱ノ微蟲オヤ其寒暖乾燥ノ皮膚ニ感觸ヲ與ル他虫ノ庇陰ヲ求メ葉間ニ潛ミ適度ヲ調和スル等ノ機能ナク生死人意ニアリ而ノ人ニ報ユルノ厚キ比ス可キモノナシ之ガ養法ニ於テ豈忽諸ニ附シ可ナ

ランヤ方今飼養上寒暖計ヲ用ヒ其昻底ノ度ニ隨ヒ飼育ヲ試ムルモ決メ適セリト云フ可ラス著者之ヲ考按シ此表ヲ製シ當業者ノ便ニ供ス一目其差異適度ヲ斟酌セシム實ニ簡易ノ組織ナリ養蠶家諸君請フ一本ヲ座右ニ備ヘヨ

尾崎行正君著

●樟 **虫養法** 全一冊 **近刻**

樟蟲ハ風土氣候ノ障害ヲ恐レス天蠶野蠶ト其性ヲ同シテ其用廣シ釣魚糸ヲ製シテ漁家ノ需用ニ供シ或ハ種々ノ織物ヲ製スヘク就中敷物及外套ノ如キハ毛織ト同一ニメ雨露ニ抗抵スルノ力ト强靭ナルトニ至テハ反テ毛織ニ勝レリト實ニ天賦特有ノ產物ト云ヘキナリ我國從來許多ノ樟虫存在スト雖モ之ヲ飼養製糸スルノ方法ヲ知ラサルノミナラス反テ往々此蟲ヲ以テ有害トナシ薬除スルニ至ル豈ニ天物ヲ暴殄スルト云ハサルヘケンヤ即チ此書ハ首ニ總論ヲ揭ケ利用供給ノ販路ヲ示シ次ニ飼養ノ方法ヨリ製糸製綿ノ方法ヲ簡易周密ニ說述シ加ルニ發生ヨリ結繭發蛾ニ至ル精細ナル圖画ヲ付ス苟モ意ヲ民利殖產ニ注クノ士ハ一閱ノ勞ヲ取テ可ナリ

尾崎行正君著

●山蠶或問

和裝全二冊　定價金五十錢　郵稅金十錢

本書ハ山蠶ノ養法ヲ說クモノニシテ頗ル懇篤ヲ極ム蓋シ近年山蠶ヲ飼育スルモノアリト雖ヒ只利ノ一端ニ奔リ習熟ヲ力メス失敗挫折其極世人ヲシテ山蠶ハ躓蹶アルモノナリト忘信セシムルニ至ル夫レ天ノ物ヲ生スル一トシテ用ナキモノアランヤ況ヤ山蠶ノ如キ飼育其當ヲ得レハ利家蠶ニ倍蓰スルオヤ之レ蓋シ失敗ハ未熟ノ致ス所ニシテ其蠶性ニ依ルニアラサルナリ尾崎君此書ヲ著シテ其詳ヲ辨ス通シテ五十二項銅版密圖ヲ加ヘ更ニ野蠶方法ヲ附記ス殖產ニ志アルノ諸君本書ヲ以テ參考トシ試育セラレナハ豫算以外ノ結果ヲ看ン可必定ナリ

伊東茂右衛門君著

●中外蠶事要錄

增補再版　洋裝仮綴　全壹冊　定價金壹圓五拾錢　郵稅金三拾四錢

伊東君ノ此著アル國益ヲ增進スルノ微衷ニシテ奔走勞ヲ惜マス養蠶ノ地製糸ノ場年々至ラサルナク經歷ノ餘歲月ト共ニ積テ冊ヲ成ス此書一度出テ中外望ヲ屬ス前版疾ク盡テ再版附錄ヲ載スルニ至リ購讀者倍多シ其効用掩フ可ラス全部八編白五十章ニ成リ紙數六百頁ニ至ル蓋シ桑樹ノ栽培蠶兒ノ飼養製絲ノ操作全國ノ方法網羅シテ遺スコトナシ有志諸君此書ニ因テ考究研精セラレハ其國益ヲ裨補スル尠少ナラサルヘシ

菊地廣治君纂譯

●萬國蠶業彙聞

洋裝全一冊　定價金壹圓　郵稅金三拾四錢

本書ハ歐米ノ蠶業雜誌中ヨリ我邦養蠶者ニ最緊要ナルモノヲ摘譯セルモノニシテ養蠶生糸絹織物雜記統計ノ五篇ニ分テリ我邦ノ蠶業ニ於ケル本年ノ如キ季候ノ不順ニモ拘ハラス產額增多ナリト是單ニ熟練ノ致ス所ニメ飼育ノ妙處ニ達スルト言可シ然レトモ顧ミテ海外ノ景況ヲ察スレハ米國ノ如キ蠶業ノ幼稚ナル世人ノ注目セサリシ處ナルニ近年ニ至リ荒蕪ヲ墾キ桑樹ヲ培養シ養蠶會社及養蠶協會ナルモノヲ設立シ富豪貴紳爭フテ資金ヲ投シ僅ニ數年進步ノ域ニ至ルト伊佛ノ如キモ蠶病猖獗ノ跡ヲ斷ヲ漸ク勃興ノ兆アリ支那ハ從來天蠶家蠶共ニ飼養シ歐洲ノ需用悉ク支那ニ取ル殊ニ糸質良美强彈ヲ兼テ產地ノ廣キ世界比ナシ然レヒ飼養製造舊慣ヲ株守シ改良ノ途ニ上ラス故ニ幸ニシテ我邦ノ製品歐米ニ適ス之レヲ以テ目下一時ノ安ヲ得ルモ遠カラス競爭ヲ試ミ我得意ヲ掠奪センコトヲ謀ルモノアルヘシ是實ニ蠶業ノ大敵ニシテ將來最モ影響ヲ被フルモノナレハ養蠶家ハ一層奮起黽勉不撓ノ精神ヲ以テ海外ニ航シ彼レカ貿易製產ノ實情ヲ詳ニシ之カ備ヲナサヽル可カラス本書能ク海外ノ養蠶製糸絹織等ノ實況ヨリ需用ノアル所商勢ノ變化其概略ヲ知ルコトヲ得蠶業ニ從事スル者熟讀參照アランコトヲ

農務局御刊行

●農事報告

第廿一號　貳冊　定價六拾三錢
第廿二號　　郵稅貳拾六錢

該報告中ニハ佐々木忠二郎君ノ蠶蛆說ヲ分載セリ氏ガ慣手ノ筆ニ成ル處頗ル的中ス

農商工公報號外

●抄譯中國總論

全壹冊　定價五錢
郵稅六錢

本書ハ米人ウヰリヤム氏ノ著書ナリ今其繭糸、水產常食ノ部ヲ抄譯セシモノニテ又以テ淸國蠶業ノ一斑ヲ知ルニ足ルヘシ

農商工公報號外

●質問應答錄

全壹冊　定價拾八錢
郵稅拾貳錢

本書ハ明治十九年中農商務省ト各府縣ト農商工ニ關シ質問應答セシモノニテ書中養蠶ノ部分ハ蠶蛆蠅其他蠶病、石炭烟煤ノ養蠶ニ害アル有無、蠶病撲滅法質疑、脫肛病、白殭疆病、芹ヲ以テ桑葉ニ代用シ蠶兒ヲ飼養セシ件等ナリ

農業書肆　東京々橋區南傳馬町貳丁目　有隣堂　穴山篤太郎

群馬県立図書館
0496061-3